

# 京都府立鴨沂高等学校既存建築調査報告書



2012 年 6 月

建築まちなみ研究会

(代表：大場 修)



正門と本館



正門（背面）





正門（詳細）



本館正面





南教室棟正面



南教室棟と本館の背面





本館玄関廻り



南教室棟の2階廊下



本館北側の階段



北教室棟の階段





地下通路北側入口



地下通路南側入口





体育館外観



茶室外観





和風校舎（和室）外観



和風校舎（和室）内観

## 例言

1. 本報告書は、京都府立鴨沂高等学校の既存建築に関する調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は、建築まちなみ研究会（代表：大場 修）が、京都府教育委員会からの委託を受けて実施した。
3. 調査員は下記の通りである。

主任調査員	大場 修	京都府立大学大学院 教授・工学博士 (建築まちなみ研究会 代表)
調査員	原戸喜代里	京都府立大学大学院 特任助教・博士（学術）
調査員	檜垣 友映	京都府立大学大学院 博士前期課程
調査員	松崎 渚	同 上
調査員	渡邊 綾香	同 上
調査員	木口なつみ	同 上
調査員	小谷 由貴	同 上
調査員	宮下 浩	同 上
調査員	今井 隆平	京都府立大学専攻生
調査員	野口 貴弘	同 上
調査員	陳 緯玲	京都府立大学研究生
調査員	林 井永	同 上

4. 既存建物の実測調査及び写真撮影は、門・木造校舎（和室）・茶室に対して実施した（茶室は内部展開も含む）。実測調査および図面作成は、調査員が分担して取り組んだ。写真撮影は大場が担当した。
5. 鉄筋コンクリート校舎に関する現地調査は大場が担当した。
6. 関係資料の調査は原戸が担当した（鴨沂会館、京都府総合資料館、他にて）。
7. 既存建築に関する写真撮影は大場が担当した。
8. 本報告書の執筆は大場と原戸が担当した。担当箇所は、目次に記した。
9. 本報告書の編集は小谷が担当した。
10. 謝辞

本報告書を纏めるに際しては、京都府立鴨沂高等学校校長 山岸忠様、同事務長 鷲尾達実様をはじめとする同校教職員の皆様、並びに鴨沂会館の皆様には、現地調査や資料閲覧に多大なご協力を頂きました。

また、京都府教育庁指導部文化財保護課参事平井俊行様をはじめとする同課の方々からは貴重なご助力、ご指摘を頂きました。ここに記して、深く感謝の意を表します。



## 目次

1. はじめに（大場・原戸）	1
2. 沿革（原戸）	
2-1. 新英学校及び女紅場・英女学校及び女紅場時代	3
2-2. 女学校及び女紅場時代・女学校及び京都女紅場時代	5
2-3. 女学校時代	6
2-4. 高等女学校特別経済時代	7
2-5. 高等女学校時代	8
2-6. 京都府立京都第一高等女学校時代	11
2-7. 京都府立鴨沂高等学校時代	11
3. 校舎の変遷（原戸）	
3-1. 土手町時代(京都市上京区土手町通丸太町下ル)	14
3-2. 荒神口時代(京都市上京区寺町通荒神口下ル)	17
4. 表門（原戸）	25
5. 茶室（原戸）	28
6. 木造校舎（通称「和室」）（原戸）	34
7. 本館・教室棟・特別教室棟（大場・原戸）	
7-1. 概要	39
7-2. 外観	39
7-3. 本館の構成	41
7-4. 普通教室棟・特別教室棟の特徴	42
7-5. 屋内プール及び体育館	42
7-6. 地下トンネル	45
7-7. 図書館	47
8. 鴨沂高等学校校舎の歴史的価値	
8-1. 表門・茶室・木造校舎(通称「和室」)（原戸・大場）	50
8-2. 鉄筋コンクリート造校舎群（大場）	51



9. 鴨沂高等学校校舎の改修に向けて（大場）	
9-1. 鉄筋コンクリート造校舎群の歴史的価値に即した改修方針 .....	54
9-2. 建替えを前提とした部分的保存の考え方 .....	56
10. 写真（現況） .....	59
11. 図面（実測図面） .....	85
12. 図面（建築当初） .....	97

## 1.はじめに

明治3(1870)年、当時の京都府参事である榎村正直は「学術は広く皇学・漢学・洋学にわたって生徒の学業を進歩させることが急務である<sup>1)</sup>」とし、京都府中学校を旧所司代跡に開校した。当時、京都市中には既に小学校(番組小学校)は開校していたが、華士族は平民と一緒にの学校に通う事に抵抗があったため、中学校内に小学校を付設して華士族の子弟を入学させた。

また、中学校の分科として、同年11月に独逸学校(河原町二条下ル旧角倉邸)、翌(1871)年4月に英学校(旧山口藩邸内)、11月に仏学校(河原町二条上ル高田別院内)を相次いで設立した。鴨沂高等学校の前身、新英学校及び女紅場は、この外国語学校建設の一環として、明治5(1872)年に京都市上京区土手町通丸太町下ル駒之町の九条家河原邸を利用して開校した。

華士族の子女の通う英学校と女子が手仕事の技術を習得する女紅場が並列する形をとっていた学校新英学校及び女紅場は、その後、新英学校及び女紅場、女学校及び女紅場、京都女学校、京都府高等女学校、京都府立京都第一高等女学校を経て、戦後京都府立鴨沂高等学校と改称され今日に至る。

京都御苑の東、寺町通りに面する同校の重厚な木造の門をくぐると、すぐ右手には図書館(昭和13年建築)、左手に新体育館(戦後築)が配され、正面には車寄せ玄関のある本館、本館南に教室棟、本館北には特別教室棟の、3棟が連なるコの字型の校舎(昭和11年竣工式)がある。いずれも鉄筋コンクリート造で、戦前に建てられた校舎群の意匠は「モダニズム」と呼ばれる当時流行した新進の建築意匠でまとめられている。

一方、本館の背後(南東側)には、木造平家の校舎と茶室が建っている。コンクリート造の校舎群の中であって、木造の門、平家建ての和室、茶室は異彩を放っている。門と茶室は新英学校及び女学校時代から、和室は京都府高等女学校時代からのもので、いずれも現校地の前身である上述した元九条家河原邸の旧地に建っていた。明治33(1900)年、校地の現在地への移転とともに移築されてきたものである。

さらに、同校地の北辺を画する荒神口通りのさらに北側には運動場があり、同地とは荒神口通り下の地下通路で連結されている。その両出入口の建物も昭和9年に建築されたものである。また、運動場には屋内プール(昭和8年)と体育館(同9年)が並び建っている。

そこで、本報告書は、新英学校及び女紅場以来の京都府立鴨沂高等学校の沿革をたどりつつ校舎の変遷を明確にし、同校に現存する戦前期およびそれ以前に建てられた校舎



群の建築的特徴とその歴史性を明らかにする。その上で、同校に現存する一連の校舎群の建築史的、文化財的価値を検討していきたい。

なお、今回の調査では、上記3棟の木造建築については詳細な実測調査を実地し、図化した。戦前期の鉄筋コンクリート造校舎については、竣工当時の図面類を参照しつつ、現地にて確認調査をおこなった。同校の沿革等に関する調査は、主として同校に隣接する鴨沂会館に保管されている京都鴨沂会所蔵史料を中心に用い、京都府総合資料館所蔵史料なども適宜参照した。

### 参考文献

1. 京都府：京都府誌 上、株式会社名著出版、1974. 4. 23
2. 京都府教育会：京都府教育史 上、第一書房、1983. 4. 30
3. 文部省内教育史編纂会：明治以降教育制度発達史 第一巻、流吟社、1938. 5. 5

---

### 注釈

- <sup>1)</sup> 京都市：京都の歴史7、京都市史編さん所、1979. 10、P51

## 2.沿革

### 2-1.新英学校及び女紅場・英女学校及び女紅場時代

「新英学校及び女紅場」は、明治 5(1872)年 4 月 14 日、京都市上京区土手町通丸太町下ル駒之町の九条家河原邸において開校された。名称が示す通り、英学校と女紅場が並列する形をとっている。前章で述べたような他の独逸学校・英学校・仏学校が官費で運営されたのに対し、この新英学校及び女紅場は府費によって運営されていた。これは「中學の管下に置かないで、勸業課の事業としたのは、全體が歐米の新文明に依る産業組織を移して繁栄せしめ且新日本の進取的國策に貢献しやうとした京都府の方針の一部分をなす<sup>1)</sup>」ためであった。府は女紅場基金(5 万円)を制定し、学校出納係が管理した。この基金の利子(月額 500 円)は「教師の俸給と薪炭燈油その他の用途凡そ 274 円、書籍その他の備品費 226 円、合計 500 円を賄ふことにした<sup>2)</sup>」と、学校の運営費に充てられた。



(社団法人京都鴨沂会所蔵)

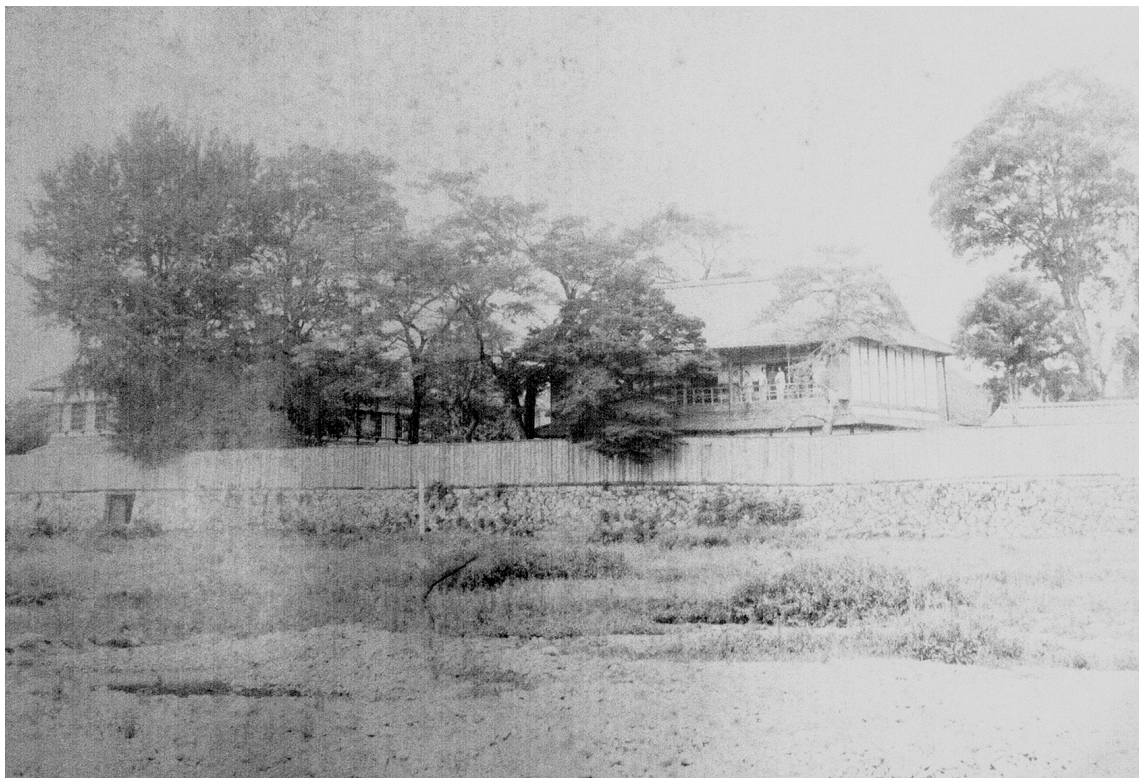
写真 2-1 新英学校及び女紅場 表門



京都府による女紅場開業の告示には、「管内之モノノ智識ヲ皓メ拡メンガ為メ先年来  
數カ所之學校ヲ設ケン為メ丸太町通り河岸ニ於テ之學校ヲ開キ地理算術舎密和洋之  
女工英佛語學等教授致サセ候條望之者ハ男女長幼ニ不限中學校へ可願出候事<sup>3)</sup>」とあり、  
開校当初、英学校には女子だけでなく男子学生も就学させていたことがわかる。

開業の告示と共に制定された女紅場規則の第一条には、開校の主旨が記され、女紅場  
は「一技一術ヲ習熟セシメ人ノ教導<sup>4)</sup>」をする者、「博ク女工ニ涉リ女事ヲ治メテ一家  
ノ良婦<sup>5)</sup>」となる者を養成しようとする機関であった。

また、第二条には「生徒ヲ別ツテ英學生徒女紅生徒ノ二稱トス英學生徒ハ必女紅ヲ兼  
ネ女紅生徒ハ英學ヲ修メス専ラ女紅ヲ學フ者ノ名トス<sup>6)</sup>」とある。これによると女紅場  
の生徒だけではなく英学校の生徒も女紅の科目(裁縫、機織、養蚕、糸挽、<sup>せんさい</sup>剪綵、袋物、  
<sup>ぬいはく</sup>繡箔、<sup>つづれにしき</sup>綴錦<sup>7)</sup>)の習得を義務づけられていることから、女紅は単に一家の良婦になるた  
めに習得する技術ではなく、人を教導する者も習得すべき技術であったと考えられてい  
たことがわかる。



(社団法人京都鴨沂会所蔵)

写真 2-2 加茂川より見る土手町校舎

校舎は、鴨川沿いに建つ九条家河原邸を使用し、「敷地面積は 2251 坪 4 合 6 勺あり。棟数 17、寢殿其他の建物を以て教室に充て<sup>8)</sup>」られ、寄宿舍や養蚕室が新たに建設された。ここで「先づ華士族の子女 78 名に英語並に高等の和洋女紅を授け<sup>9)</sup>」られた。その後 12 月には一般民籍の学生の入学が許され、生徒総数は 159 名となる。<sup>10)</sup>

明治 7(1874)年 6 月には新英学校を「英女学校」とし、男子英学生徒は中学校に移されて、女子のための教育機関となる。このように新しい時代を担う人材の養成を掲げたものの、在学者数は年々減少していき、明治 8(1875)年には 31 名まで減少する。

『京都府教育史』には、「殊に英語を主とした點が社會の實際に適せず、一般には専ら裁縫の教授を望み、手芸さへも歓迎する者が少ない有様であり、特に英學の不評は激烈で段々學校が衰微する様になった。殊にその課業の中に、読書、習字、算術がなかったのも不評を買った原因である<sup>11)</sup>」と当時の状況が記されている。

このように、京都府の女子教育に対する理想と教育を受ける側の要求のズレが露呈した英女学校及び女紅場は、教育方針の転換を迫られることとなった。

## 2-2.女学校及び女紅場時代・女学校及び京都女紅場時代

明治 7(1874)年に女紅場規則が制定されて、府下小学校に女紅場を布設することが奨励されると、女紅場の布設数は年々増加し「明治 15 年には公立 26・私立 61、合計 87 を数えるという盛況ぶりであった。<sup>12)</sup>」

このような情勢の中、明治 9(1876)年 5 月には、英女学校及び女紅場は「女学校及び女紅場」と改称され、従来の課程に和・漢学を加え、師範科を設置し、小学校裁縫及び諸礼科の教師、各地女紅場の教師を養成するようになる。

また、明治 10(1877)年に京都府は「京都女學校給費生規則」を制定し、「今般府下女學學校ニ於テ各小學校俊秀之女生徒ヲ拔擢シ給費入舎セシメ以テ女子完全之教育ヲ受ケシメント欲ス<sup>13)</sup>」として、府下の優秀な生徒 50 人を入学させている。

この給費規則の課業の項を見ると「讀物數學習字女紅諸禮コレヲ正科トス、正課時限中ニ於テ毎日 1 時間豫科ヲ授ク、體操遊歩ノ時間ヲ以テ絃歌ヲ教ユ<sup>14)</sup>」と、英語学が見当たらず、普通学の普及を図ろうとした事がわかる。このような教育方針の転換が功を奏し、明治 8 年には 31 名まで減少した生徒数も、生徒数が増加の一途を辿り、明治 12 年には 303 名となる。<sup>15)</sup>

明治 10(1877)年 2 月に明治天皇、英照皇太后、昭憲皇太后が臨御、明治天皇より金 500 円、英照皇太后、昭憲皇太后より金 25 円がそれぞれ下賜された。



明治 11(1878)年に「校舎既に狹隘を告ぐるのみならず、其の構造教場に適せざるを以て<sup>16)</sup>」増改築工事が行われた。これまで九条家屋敷をそのまま転用していたが、教育方針が転換し教科内容が変化してきたため、教場の増改築が必要となったと考えられる。

明治 12(1879)年 5 月には、女学・英学・女紅の 3 学科で構成されるようになる。女紅の内容も、当初教えられていた養蚕や機織等は無くなり、裁縫のみとなっている。また、点茶、食礼、香道、插花等の授業が加えられ、「本邦固有の女徳を涵養するに務め<sup>17)</sup>」られた。

明治 13(1880)年 2 月 21 日、女学校及び女紅場が「女学校及び京都女紅場」と改称された。同年 6 月には、増加し続ける生徒数に対応するため、校舎増築のため京都府勧業課より接続地およそ 220 坪を借入れ着工、翌年 1 月 7 日に教場が竣工し、校舎の整備が完了した。

## 2-3.女学校時代

明治 15(1882)年 6 月に、京都府は京都府女学校組織及び規則の改正を布達する。

「

今般當府女學校内ニ女子普通科學科及女子師範學科ヲ置キ從來當府女紅場ニ係ル事業ヲ同校手藝專修科トシ女紅場ノ名稱ヲ廢シ規則別冊ノ通改正候條此旨布達候事

明治十五年六月十三日

京都府知事北垣國道

京都府女學校規則

主旨

本校ハ女子ノ志望ニ因テ高等ノ普通學科小學師範學科及各種ノ手藝專修科ヲ授ル所トス其普通學科ハ専ラ治家訓兒ノ方法ヲ授ケ一家ノ良主婦タラシメ師範學科ハ小學訓道志願ノ者ヲ養成シ手藝科ハ各種ノ工業ヲ專修セシメ一家計ヲ立テ食力益世ノ道ヲ辨ヘシムルニ在リ<sup>18)</sup>

」

女学校には、「専ラ治家訓兒ノ方法ヲ授ケ一家ノ良主婦タラシメ」る女子普通学科、「小學訓道志願ノ者ヲ養成」する女子師範学科、「各種ノ工業ヲ專修セシメ一家計ヲ立テ食力益世ノ道ヲ辨ヘシムル」手芸專修科が女紅学科に代わって設置され、女紅場の名称を廃止し「女学校」となった。

明治 16(1883)年 3 月には付属小学校を、翌年 6 月には付属幼稚園を開設して、師範科の生徒の実習の場となった。

開校当初、「一技一術ヲ習熟セシメ人ノ教導」となる人材の養成を目指した教育理念は、その内容を変化させつつも新たに設置された師範学科に引き継がれたのである。

明治 17(1884)年頃より財政難に見舞われる。京都府女学校は、創立当時より女紅場基金とその利子により運営されており、地方税が支弁されることはなかった。この女紅場基金は元々勸業課預かりであり、明治 15(1882)年に女紅場を廃し、女学校が勸業課の管轄下を離れたため、女学校経費として使用できなくなったのである<sup>19)</sup>。

明治 19(1886)年 4 月学制が改正され師範学校令が公布されたために、師範学科は京都府尋常師範学校に移管されることとなった。

## 2-4. 高等女学校特別経済時代

明治 20(1887)年 1 月 18 日に、京都府女学校は「京都府高等女学校」と改称された。明治 21(1888)年 2 月 23 日付で制定された京都府高等女学校規則によると、その主旨は「本校ハ優良ノ婦女タルニ須要ナル高等ノ普通學科ヲ授クル所トス<sup>20)</sup>」とあり、同校は普通学科中心の教育へと再びその性格を変えた。

当時、高等女学校について定めた法律はなく、高等女学校の整備は未着手であったものの、京都府高等女学校には 382 人の生徒が就学しており<sup>21)</sup>、他の女学校と比して隆盛を呈していた。

が、学校運営は、依然として財政難に陥っていた。『京都府誌』によると「是に於て授業料を増額し、寄宿料を徴収し、以て収入増加を圖り、且本願寺より寄付金を得て僅に経費を支ふるを得たり。(中略)22 年 10 月内務省令により本校財産を府有とし、其の経費は特別経済とし、地方税と分離し、授業料、寄宿料、雑収入及有志寄付金を以て経常費に充つることとせり。依て大谷派本願寺より寄付を得て本年度の経費を支へ、辛うじて経営を持続したり<sup>22)</sup>」と、学校運営経費捻出の為に苦心した様子が記されている。

またこの時期、昭憲皇太后の二度の臨御があり、明治 20(1887)年には金 100 円、同 23(1890)年には金 200 円が学校に下賜されている。

財政的には苦しい時期であったが、入学希望者は増加の一途を辿り、校舎が狭隘となったために、明治 22(1889)年 11 月、校舎増築の計画を立て有志寄付金を募って、同 23(1890)年 1 月、教場 1 棟を新築した。新しい教場は 2 階建てで、1、2 階とも 3 室ずつ教室を設け、これを本科及び裁縫室に充てた。さらに同月、教場 1 棟の新築工事に





写真 2-3 土手町校舎 玄関

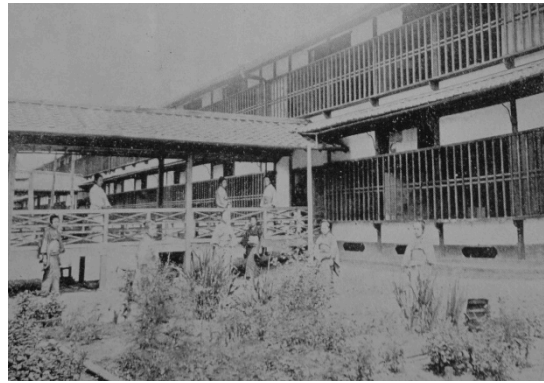


写真 2-4 寄宿舍

(写真 2-3、2-4 とも『鴨沂会雑誌』(社団法人京都鴨沂会所蔵))

着工、4 月に竣工している。これは唱歌室、作法室、随意科教室及び準備室となった。さらに 7 月には寄宿舍の 2 階増築工事が行われ、9 月に落成した。

明治 26(1893)年 11 月の通常府会にて、翌年以降の高等女学校の財政を地方税によって賄う事が決定し、漸く特別経済時代が終わりを告げた。

## 2-5.高等女学校時代

明治 28(1895)年に高等女学校規則、明治 32(1899)年に高等女学校令が公布され、女子中等教育機関の整備が行われると、入学希望生徒は増加の一途を辿る。

このような状況から「女子の教育は日に月に隆盛に赴けるに、本校は敷地も校舎もいとせまくて其の時運にかなはねば、いづれにか敷地をえらび校舎を新築せんとて頻に計画し居らる<sup>23)</sup>」と、より広い校地を求め、校舎移転の計画が持ち上がる。

1890 年代の末、文部省が着手した諸学校制度に沿って、京都府においても教育施設の整備が行われ、尋常師範学校の移転、尋常中学校の分校増加及び本校の移転新築が行われる事となった。また、尋常師範学校が移転したその跡地に京都府高等女学校を新築し、寄宿舍は師範学校的女子部の移転跡に新築されることとなった。

明治 28(1895)年、高等女学校規程に基づき、京都府高等女学校規則も改正され「本校は優良の婦女を教養するを以て目的とし本科補習科裁縫専修科を置く」と新たに裁縫専修科が設けられた。入学希望者は増加する一方で、明治 31(1898)年には「入學志望者募集定員に超過せること夥多なりしを以て<sup>24)</sup>」入学志望者に対し初の比較試験が実施された。翌年には高等女学校令の発布があり、ますます増え続ける入学希望者に対応

するべく校舎の増改築工事が急がれた。

明治 33(1900)年 8 月旧校舎から上京区寺町通荒神口下ル松蔭町の新築校舎に移転し、9 月に移転式を行った。翌年 3 月に寄宿舍が落成し、校舎の全てが移転を完了した。



(社団法人京都鴨沂会所蔵)

写真 2-5 高等女学校 表門

当時の校舎の構成が、『鴨沂會雑誌』の第 10 号に記されている。

「教室は二階造にて敷地の南方に二行に建築し、其の西部を矢張二階造の教室にて接続し、中央にいとも大なる丁字形の二階造の建物を設け、階上を講堂、貴賓室、図書室其の他の各室とし階下を校長室、事務所、應接所、生徒溜、其の他の各室とし、北方に音楽室体操室等を建築し、其の前面に五百餘坪の空地を存して之を運動場とし、寄宿舍亦二階造にて三行に建築し、廊下を以て之を接続せしめ、食堂、浴室、盥漱場、洗濯場、病室、診察室、其の他必要の建物は皆其の構内に建築し荒神口通りにトンネルを作りて寄宿舍と本校との通路とせらるる計画なり<sup>25)</sup>」校舎の総床面積はおおよそ 1800 坪で、旧校舎の 2 倍に拡張されることとなった。

旧校舎のうち、表の正門、茶室、待合及び第一高等女学校の卒業生が明治 23(1890)年 4 月の昭憲皇太后宮が臨御に備え寄付金を募集して新築し、臨御の際には玉座として使われた作法室及び割烹実習室の 2 階建ての教室 1 棟は、新校舎に移築された。

第一高等女学校が移転した後、土手町に残された校舎を利用して、明治 37(1904)年 4 月 1 日、第二高等女学校が開校するのであるが、写真 2-6 の第二高等女学校の玄関の写真と写真 2-3 の土手町校舎玄関の写真とを比較すると、元の校舎がそのまま使用されていた様子が伺える。

新校地へ移転後、土手町の校舎は第二高等女学校が利用することとなっていたのにも関わらず、九条家河原邸時代より引き継がれた表門、茶室、待合、御座所となった作法室及び割烹実習室の2階建ての教室1棟が敢えて新校地へ移築されたということは、これらの建物が学校の由緒を象徴する存在であるにとらえられていたと考えられよう。



近代デジタルライブラリー「京都府写真帖」（国立国会図書館所蔵）

写真 2-6 第二高等女学校 玄関

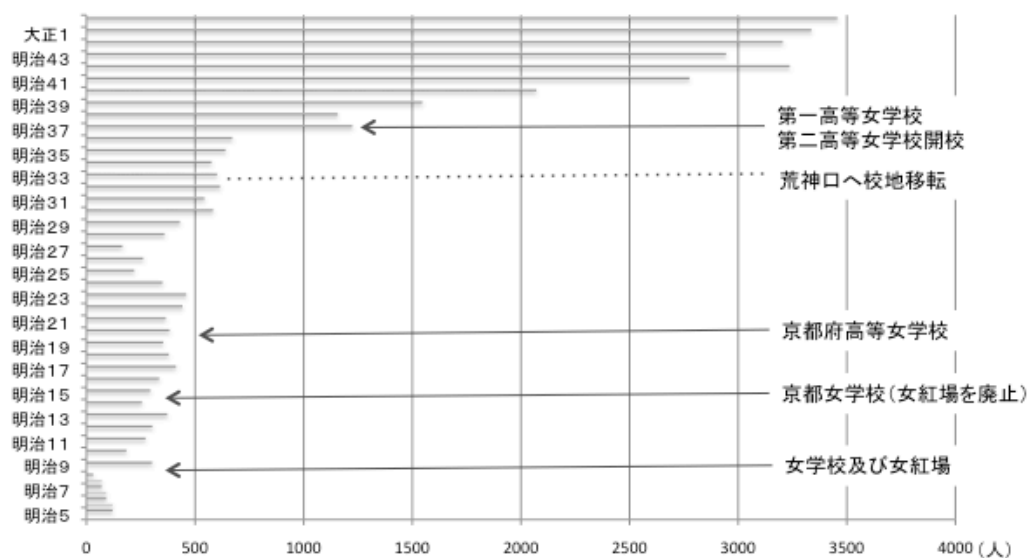


図 2-1 高等女学校在学者数



## 2-6.京都府立京都第一高等女学校時代

明治 37(1904)年、年々増加する入学志望者に対応するため、京都府は府立第二高等女学校を設置する。また郡部においても女子の中等教育の要望が大きく、南桑田郡立高等女学校、与謝郡立高等女学校等が相次いで設立された。

大正 12(1923)年 4 月 1 日、京都府高等女学校は「京都府立京都第一高等女学校」と改称された。

明治 33(1900)年に新築された校舎も昭和になると老朽化が問題となり、昭和 7 年度の通常府会において校舎改築が議決された。

昭和 8(1933)年に鉄筋コンクリート一部鉄骨造の屋内プールが完成し、同 9(1934)年には鉄筋コンクリート造の本館及び特別教室棟、体育館が竣工する。さらに、同 10(1935)年には鉄筋コンクリート造の普通教室棟が竣工した。また、同 13(1938)年には御大典記念図書館が建てられた。

木造の旧校舎が鉄筋コンクリート造の校舎に建替えられたが、旧校舎時代、記念建造物として保存された門、茶室は取り壊される事なく保存された。作法室及び割烹実習室の 1 棟は取り解かれ、その古材を利用して木造平家の「行啓記念館」として生まれ変わった。門、茶室、行啓記念館は、京都第一高等女学校にとっても特別な建物であったといえる。この時代に校舎の整備が進み、その構成は現在のものとほぼ変わらない。



(『改築落成記念帖』(社団法人京都鴨沂会所蔵))

写真 2-7 京都第一高等女学校 表門

## 2-7.京都府立鴨沂高等学校時代

戦後の新しい学校の体系を定めた「学校教育法」による教育の改革は米国教育使節団の勧告に基づいていた。旧来の中等教育では男子と女子は全く別の体系をとっていたが、

新制度では「中等以上の学校もすべて男女共学を原則とし、男子と女子の間に何らかの差別扱いも許さず、第二に中学校、高等女学校と実業諸学校との区別をなくした<sup>26)</sup>」のである。新制度による高等学校は、昭和 23(1948)年 4 月から発足し、従来の中高等学校のほとんどが名称を変更して新制高校となった。京都第一高等女学校も「府立鴨沂高等学校」と改称する。



写真 2-8 京都府立鴨沂高等学校 表門

しかし、占領軍京都軍政部は義務教育の浸透を優先させたため、公立旧制中等学校 21 校のうち 11 校の校舎は新制中学校の校舎へと転用された。府立第一高等女学校の校舎にも府立第一中学校と府立嵯峨野高等女学校の生徒が入り、この時期、旧制中等学校の統廃合が進んだ。

その後、高校三原則(学区制、男女共学制、総合性)によって再編成し、京都市内を 10 学区に分けて、公立高校は 1 学区 1 校とし、京都府立高校 5 校、京都市立高校 5 校の 10 校が設置された。昭和 43(1968)年、表門の左手に新体育館、食堂が完成し、現在の校舎の配置となった。

---

#### 注釈

- 1) 京都府教育会：京都府教育史 上、第一書房、1983. 4. 30、p347
- 2) 前掲書 1)、pp347-348
- 3) 京都府：京都府百年の資料 5 教育編、1972. 3. 31、p187
- 4) 前掲書 3)、p187
- 5) 前掲書 3)、p187
- 6) 前掲書 3)、p187

- 
- 7) 前掲書 3)、p187
- 8) 京都府：京都府誌 上、名著出版、1974. 4. 23、p374
- 9) 京都府立第一高等女学校：創立第三十五年記念誌、1907. 10. 15、p1
- 10) 前掲書 9)、p1
- 11) 前掲書 1)、p349
- 12) 前掲書 3)、p15
- 13) 前掲書 3)、p194
- 14) 前掲書 3)、p195
- 15) 前掲書 8)、p373
- 16) 前掲書 8)、p376
- 17) 前掲書 9)、P9
- 18) 前掲書 3)、p206
- 19) 本山幸彦編：京都府会と教育政策、(株) 日本図書センター、1990. 9. 20、p309
- 20) 前掲書 3)、p451
- 21) 京都府：京都府百年の年表 5 教育編、1970. 3. 31、p21
- 22) 前掲書 8)、p378
- 23) 京都府高等女学校：鴨沂會雑誌 第十号、1897. 12. 26、p107
- 24) 前掲書 8)、p380
- 25) 前掲書 23)、p108
- 26) 京都市：京都の歴史 9、1976. 3. 31、p345

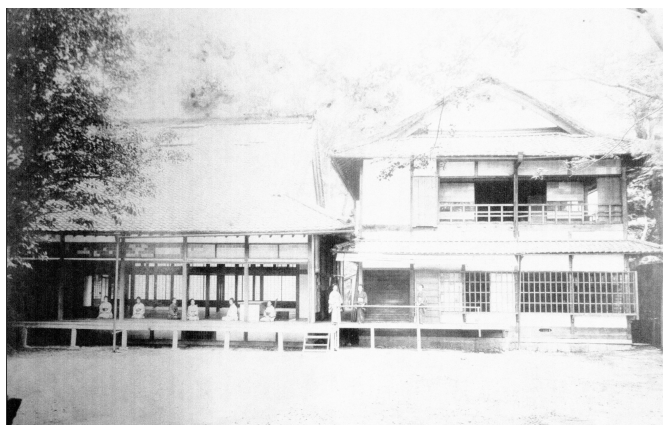


### 3.校舎の変遷

#### 3-1. 土手町時代(京都市上京区土手町通丸太町下ル)

京都府立鴨沂高等学校の前身である「新英女学校及び女紅場」は、明治 5(1872)年、上京区土手町通丸太町下ルにある九条家河原邸の屋敷をそのまま教室として利用し開校した。明治 9(1876)年に、英女学校及び女紅場は「女学校及び女紅場」と改称される。明治 11(1878)年には「其の構造教場に適せざるを以て<sup>1)</sup>」初めて教室の増改築が行われた。その後、入学生徒の増加に伴い、明治 13(1880)年に府勧業課から隣接地を借り入れて校舎増築の工事を行っている。

明治 20(1887)年、「京都府高等女学校」に改組され、入学希望者は益々増加する。「尚一層當ノ擴張ヲ希望シ益々教育ヲ完全ナラシメンガ為一大教場及唱歌室(図面では音楽室)ヲ新築シ尚従前ノ寄宿舍ヲニ階造ニ改メ新ニ百余名ノ寄宿生ヲ容ルヘキモノトシ将来本科生豫備生其他ヲ併セテ合計六百人ノ生徒ヲ養成スルニ足ルノ校舎ニナサント<sup>2)</sup>」して、明治 23(1890)年、1 階が音楽室、2 階を作法室とした教場 1 棟（この 2 階部分が後の行啓記念館となる（後述））を新築、2 階建ての教室棟を従来の平家の教室棟に連なる形で増築し、その後寄宿舍の 2 階増築工事が行われた。



(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 3-1 高等女学校 土手町校舎

左・教室、右・新築された 2 階建ての教場(階上に作法教室)

写真3-1は、教室棟（左）と新築された2階建ての教場（右）を南側から撮影したものである。明治23(1890)年1月に写真3-1の右側に写っている2階建て教場の新築工事が着工、4月に竣工したため、この写真はそれ以降に撮られたものであることがわかる。

この教場が竣工した後、同年7月に、今度は寄宿舍の2階増築工事が着工され、9月に竣工している。図3-1の配置図には、寄宿舍の2階部分も記載されていることから、この図は明治23年9月以降の校舎の状況を示したものであるといえる。

土手町校舎の配置図では、写真の2階建て教場の南側に茶室が描かれているが、この写真には茶室が写っていない。もともと茶室がどこにあったのかについては、明治初期の校舎の配置に関する資料が現在のところ見あたらないので不明である。推測の域を出ないが、教場が竣工した明治23年4月から寄宿舍が完成する同年9月の間に、茶室は配置図が示す教場の南側に設置されたのではないかと考えられ、写真3-1は、それ以前に撮影されたものではないかと推察される。

このように、作法室を含む2階建ての教場に加え、南側に建つ2階建ての教室棟が増築され、寄宿舍の2階部分が増築されて、土手町時代の校舎は完成を見ることとなった（図3-1参照）。



『鴨沂会雑誌』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）

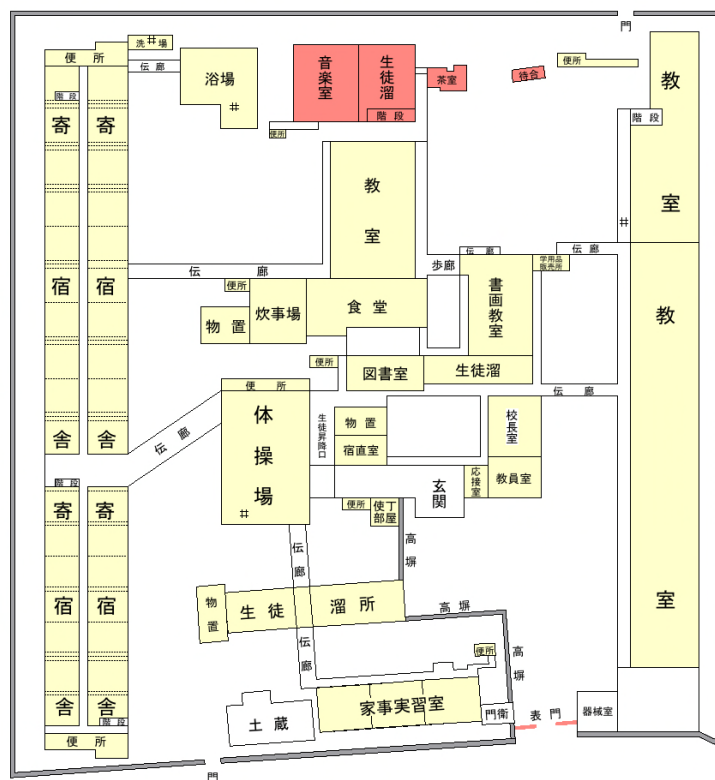
写真 3-2 土手町校舎 玄関



『鴨沂会雑誌』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）

写真 3-3 土手町校舎 教室棟

（手前に2階建て増築部分が見える）

[illegible]

『京都府立第一高等女学校創立第三十五年紀年誌』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）に

16



### 3-2. 荒神口時代(京都市上京区寺町通荒神口下ル)

日清戦争以降、女子教育に対する関心は益々高まり、明治 31(1898)年には、入学希望者に対して初めて比較試験が行われるほどになった。明治 32(1899)年、高等女学校令が公布され、国が女子教育制度の整備に着手すると、京都府高等女学校の入学希望生徒も順調に伸びていく。

女子高等教育への要望に応える為、京都府は高等女学校の校舎移転を計画し、京都府尋常師範学校の移転跡地(上京区寺町通荒神口下ル松蔭町・現在の鴨沂高等学校所在地)に新校舎及び寄宿舎が新築され、表門、茶室、木造 2 階建て 1 棟(後の行啓記念館)が移築されることとなった。明治 33(1900)年に校舎が、翌年 3 月には寄宿舎が竣工し、旧校舎のある土手町から表門などの建物が移築され、校舎の移転が完了した。

(敷地坪数は 4642.14 坪、建坪は 1803.08 坪、この内 1191.5 坪が 2 階建てとなる。)

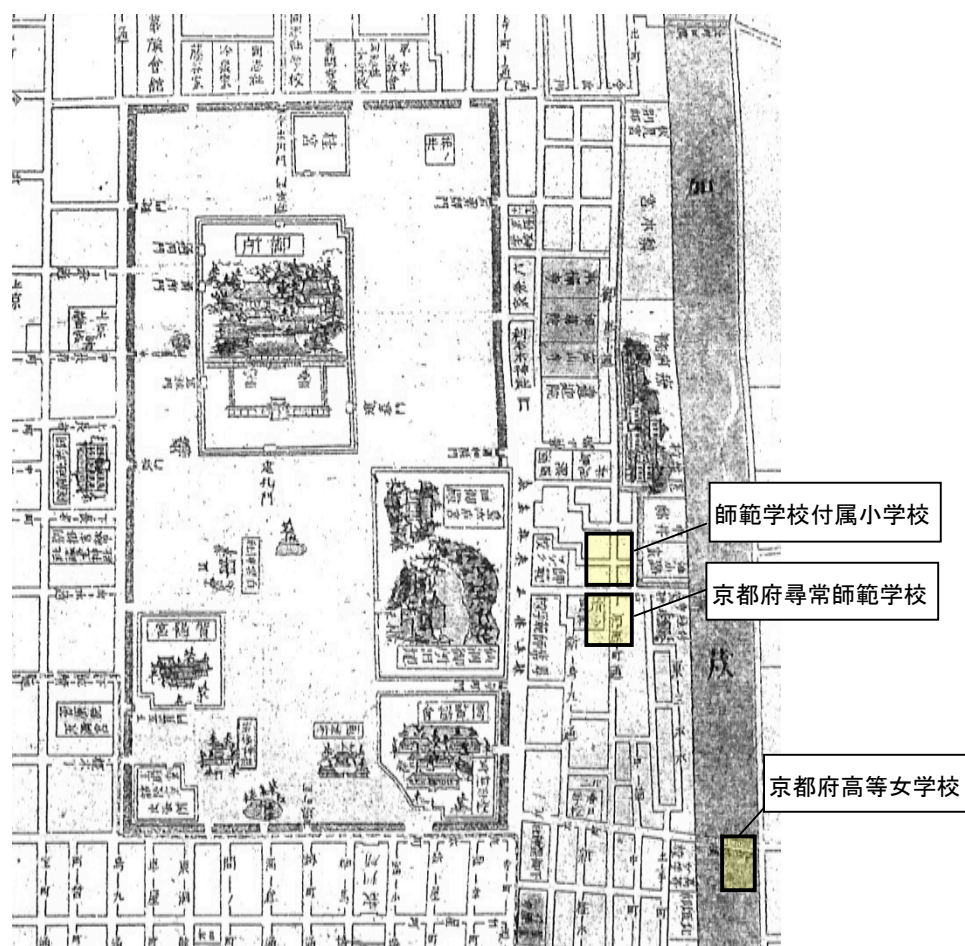


図 3-2 校地移転前の御所周辺の様子

明治 28 年刊 新撰京都古今全図(京都市『京都市史地図編』1947. 5. 25)に一部加筆

『鴨沂会雑誌』には「この新築校舎の内、現在の作法教室及茶室竝に表門の三つの建物は、新築の方へ引移されむ御豫定なり、さるは作法教室は、明治二十三年四月二十七日、かしこくも、

皇后陛下、本校に 臨御あらせ給ひし御時 玉座に充てさせ給ひし建物なれば、其の御由緒を永く保存し奉らむが為と□や、さればこの御室に入る人は、いづれも、

陛下の教育に 大御心を労せさせ給ふ深き厚き大御恵を尊みかたじけなみ思ふべく、又茶室は、今の千家宗匠の、本校教授中、丹誠をこらして営みたてられたるなりとか承れば、かいなでの數寄屋にもあらざるべし、表門はややふりたれど、さすがに昔の名残おぼえてめでたき結構なれば、修繕をだに加へなば、なかなか新しく造らむには勝るべく、又かうやうの門をあらたに造らむは、其の費容易ならずとの事なれば、これをも移さるることなむ<sup>3)</sup>」と、作法教室は行啓の際玉座に充てたという由緒を長く保存するために、茶室、表門は昔の名残があり立派な構えで、修理すれば新しいものを造るよりも良いということから、土手町の校舎よりそれぞれ移築された。



『鴨沂会雑誌』より(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

#### 写真 3-4 高等女学校 表門

明治 32(1899)年の『高等女學校建築工事一件書類』に、表門については「現在高等女學校ニ建築アル表門ヲ取解キ柄仕口等ニ養生ヲナシ移築地へ運搬ヲ為ス」「扉板軒廻り其他の腐朽セシケ所ハ取替又ハ切継ヲ為シ足シ木ハ在来ノ材料ニ相當スルモノヲ以テ繕フ<sup>4)</sup>」様指示されている。また、茶室及び待合所については「現在ノ姿ノ俚丁寧ニ取解

キ注意深ク現場へ持込洗木ヲナシ裏板及垂木其他腐朽セシモノハ同木ヲ以テ取替ル<sup>5)</sup>」  
と、表門と茶室及び待合所は、移築前の姿のままに建てられたことがわかる。

当時の校舎の様子を撮影した写真が残されている。土手町より移築された表門を入ると正面には唐破風屋根の車寄せを備え千鳥破風を配した入母屋造り木造 2 階建ての建物がある。この建物の 1 階には事務室、教員室、生徒溜があり、2 階は講堂、参考品陳列室、客室がある。その南にはコの字型の教室棟が配され、その中庭に移築された茶室と待合所がある。玄関棟の北側にある寄棟造りの 2 階建ての建物は、土手町の旧校地より移築されたもので、第一、第二作法室となっている。



写真 3-5 玄関



(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 3-6 講堂

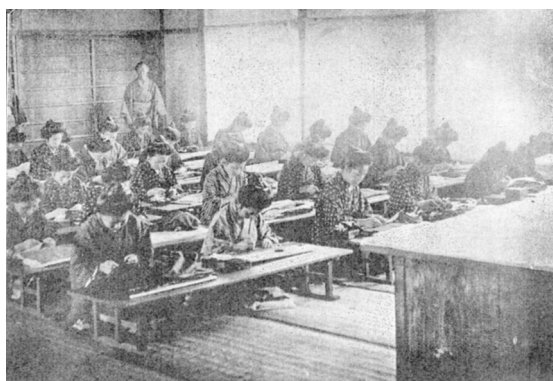


写真 3-7 裁縫教室

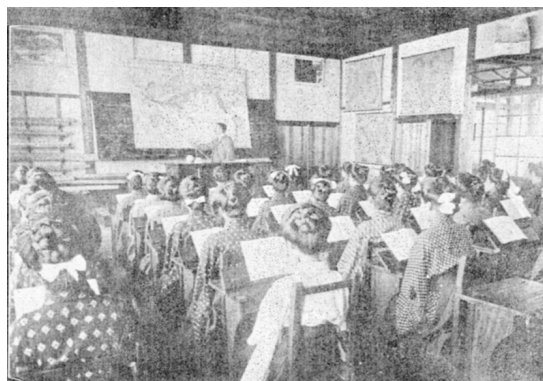


写真 3-8 歴史地理教室



写真 3-9 運動場



写真 3-10 地下トンネル



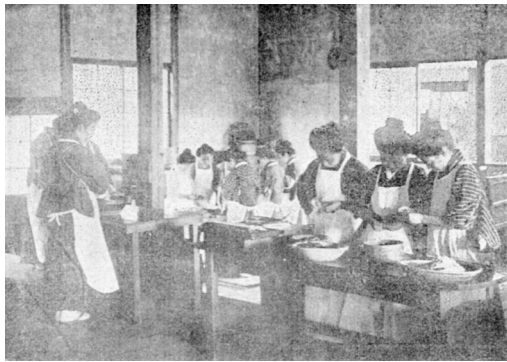


写真 3-11 割烹教室

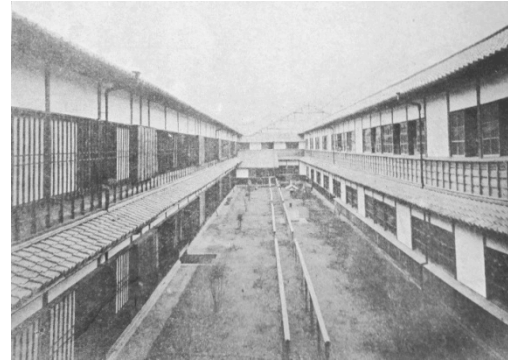
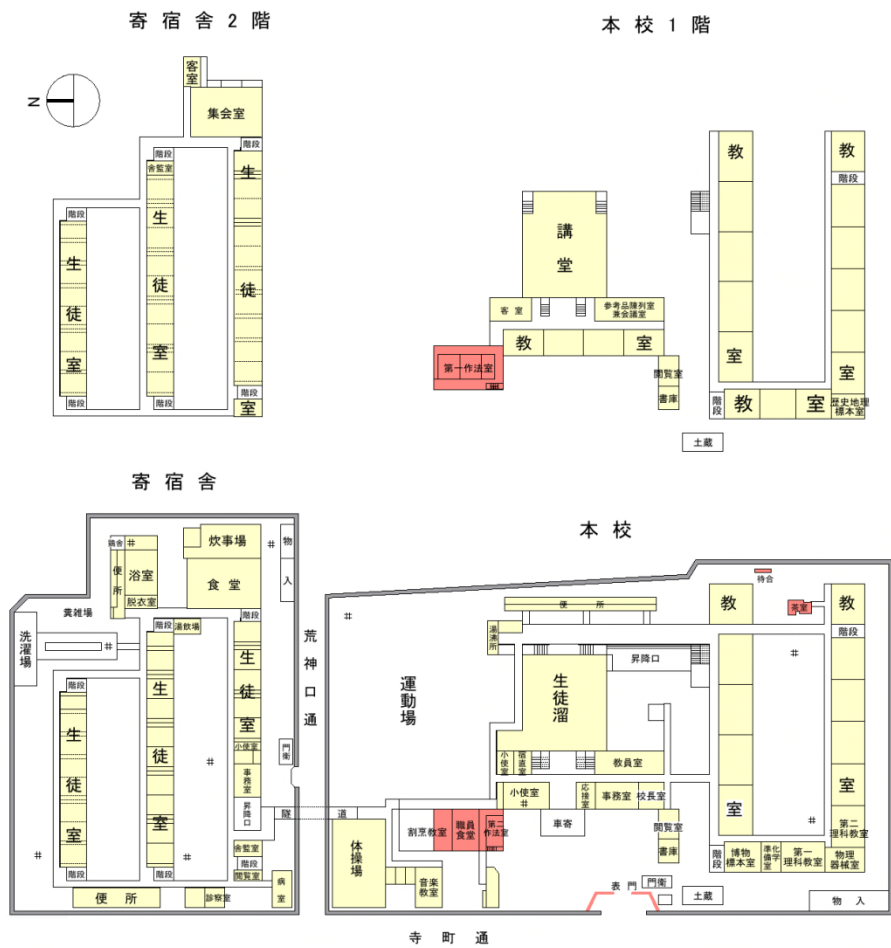


写真 3-12 寄宿舎

写真 5、7～12 『鴨沂会雑誌』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)



部分は、移築された建物

図 3-3 明治 33 年の荒神口校舎の配置

『京都府立第一高等女学校創立第三十五年 紀年誌』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)に  
収録されている京都府立第一高等女学校現在校舎平面図に一部加筆

明治 33(1900)年に新築された校舎も昭和になると老朽化が問題となった。昭和 7 年度の通常府会において校舎改築を提案、議決され、昭和 8、9、10 の 3 年間の継続事業として校舎改築を行う事となる。新築の鉄筋コンクリート校舎が建ち並ぶ中、表門、茶室、作法室の旧来のまま保存されることとなった。



京都府立京都第一高等女学校『改築落成記念帖』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）

### 写真 3-11 昭和 11 年 校舎全景

表門について、京都第一高等女学校の当時の校長、鈴木博也が昭和 11(1936)年 5 月 20 日に行われた竣功式の挨拶で以下のように述べている。

「今回ノ改築ニ際シ初メハ校門モ洋風ニ改メラレルコトニナッテ居リマシタガ特ニ懇願シテ舊来ノ校門ヲ修繕存置スルコトニナリマシタ。<sup>6)</sup>」

表門は当初、校舎新築とともに洋風意匠に変更しようという動きもあったようであるが、京都府立第一高等女学校側が府に強く保存を要望した。

その結果、校舎の設計に際して府議会は

其ノ建築結構ニ意ヲ用ヒ

- 1、教育上ノ環境ヲ考慮シテ現地改築セルコト
- 2、建築様式ヲ日本趣味ヲ加味シタル近世式トセルコト
- 3、御所トノ関係ヲ考ヘ其ノ調和美ヲ發揮シタルコト

4、歴史的ノ舊正門ヲ存置シ現代建築トノ調和ヲ保チタルコト

5、採光通風ヲヨクシ衛生的方面ニ遺憾ナカラシメタルコト

等々、所謂歐風建築ヲ日本的ニ醇化セシメ輪奐壮美ノ中ニ本邦ニ於ケル女子ノ現在及将来ノ地位ニ對スル明確ナル信念ト國家的精神トヲ具現スル(下線筆者)<sup>7)</sup>

と「歴史的ノ舊正門ヲ存置」することを盛り込むよう指示したと思われる。

京都府学校営繕技師の十河安雄は、竣功式の工事報告の中で、新校舎設計について以下のように述べている。「第一敷地ガ京都御所御苑内ニ近接シ且都市計畫風致地區域ナルヲ以テ外觀ニ日本趣味ヲ採リ平面圖ニ於テ三階ヨリ御苑内ヲ見透シ難イ様ニ建物ノ配置ヲ定メタ事デアリマス、第二材料ト色彩ニ就テハ學校ノ歴史ニ鑑ミマシテ之ヲ選擇致シマシタ事デアリマス<sup>8)</sup>」

意匠設計については、「日本趣味ヲ加味シタル」モダニズムのデザイン、御所の中を覗き見る事のないよう配慮されたコの字型の校舎配置、学校の歴史を考慮した仕上げ材料と色彩と、いずれも「御所トノ關係ヲ考ヘ其ノ調和美ヲ發揮」することが念頭におかれたのである。

設計は京都府工営課が担当し、施工は戸田組が請負った。昭和 8(1933)年に鉄筋コンクリート一部鉄骨造 2 階建ての屋内プールが完成。同 9(1934)年には鉄筋コンクリート造 3 階建ての本館及び特別教室棟、鉄骨鉄筋コンクリート造の体育館が竣工し、同 10



写真 3-12 玄関車寄



写真 3-13 本館ホール

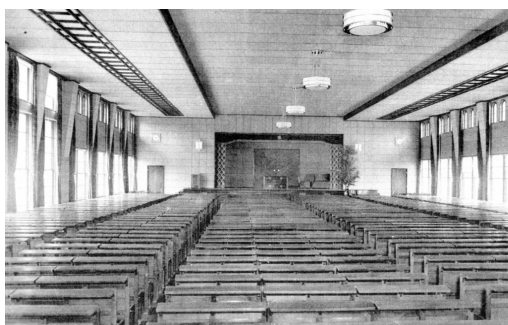


写真 3-14 講堂

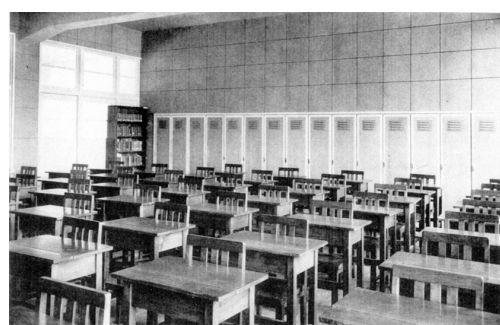


写真 3-15 普通教室

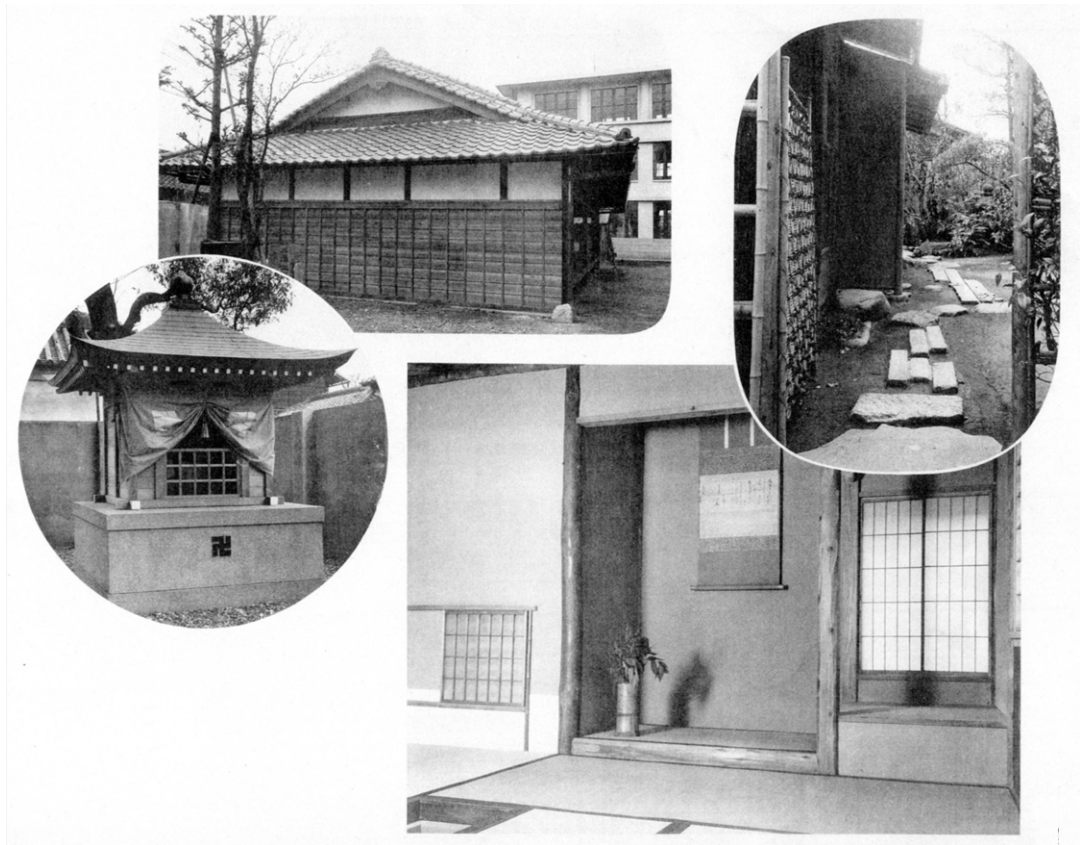


写真 3-16 行啓記念館(左上)、茶室庭(右上)、地蔵堂(左下) 茶室内部(右下)

写真 10～15 京都府立京都第一高等女学校『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

(1935)年には鉄筋コンクリート造3階建て普通教室棟が竣工した。また同13年には昭和の御大典記念事業として鉄筋コンクリート造2階建ての図書館が建てられた。

旧校舎の建物で存置されたものは表門だけではなく、本館の南東に建つ茶室、旧作法室(現木造校舎)も表門とともに保存された。

鈴木校長はまた、竣功式典でこれら茶室や作法室についても述べている。

「私ガ特ニ欣喜ニ堪ヘナイコトハ今回ノ改築ニ當リ幸ニモ本校ノ記念建造物ヲ保存シ得タコトデアリマス。舊校舎ノ建築物中九條殿ヨリ移轉シタルモノハ校門ト茶室ト作法室デアリマス。殊ニコノ作法室ハ明治二十三年四月二十七日昭憲皇太后臨御ノ際卒業生ノ醵金ニヨリテ新築シ御座所ニ充テタモノデアリマス。(中略)又舊作法室ハ本校々友會ガ其古材ヲ譲受ケ府ノ認可ヲ得テ行啓記念館トシテ改造存置シ将来作法茶儀ノ実習ニ使用スル豫定デアリマス<sup>9)</sup>」

「舊校舎ノ建築物中九條殿ヨリ移轉シタルモノ(下線筆者)」とあるが、門、茶室は明治5年の新英学校及び女紅場の開校以前から使用されていたものであり、旧作法室は、1階が音楽室(図面では音楽室)、2階が作法室の2階建ての建物で、明治23年に建築



された教場のうちの一つであった。

今回の校舎改築工事に際して、この2階建ての旧作法室は取り解かれ、その古材を利用して平家の木造校舎「行啓記念館」として新たに建築されたのである。

開校より多くの皇族が来校し或いは在学した第一高等女学校において、門、茶室、行啓記念館は、その歴史性を示すシンボルとして存置されてきたのである。

---

<sup>1)</sup> 京都府：京都府誌 上、名著出版、1974. 4. 23、p376

<sup>2)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第二号、p21

<sup>3)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第十一號、1898. 2. 25

<sup>4)</sup> 京都府立総合資料館：高等女学校建築工事一件書類 明治自 32 年至 33 年継続

<sup>5)</sup> 前掲書 4)

<sup>6)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第七十八號、1936. 7. 13、p106

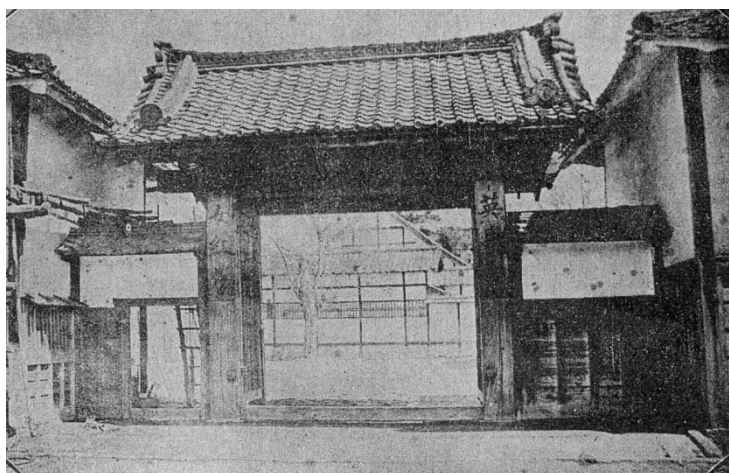
<sup>7)</sup> 前掲書 8)、p102

<sup>8)</sup> 前掲書 8)、p100

<sup>9)</sup> 前掲書 8)、p107

## 4.表門

鴨沂高等学校の表門は、元々上京区土手町通丸太町下ルの九条家河原邸の門が移築されたものである。明治 5(1872)年に鴨沂高等学校の前身、新英学校及び女紅場が九条家河原邸をそのまま利用して開校したことから、この表門は学校開校以前から建っていたと考えられる。



『創立第三十五年紀年誌』より(社団法人 京都鴨沂会蔵)

写真 4-1 明治 7 年の新英学校及び女紅場表門

表門は、一間一戸の薬医門で屋根は切妻造り、棧瓦葺きである。獅子口、鬼瓦には九条家の家紋、九条藤があしらわれている。

架構は、女梁を用いず男梁の上に豕叔首を組み斗拱を載せ棟木を支持する形式をとり、破風の拌みには梅鉢懸魚が吊るされている。建築年代は定かではないが、様式的に近世末期のものと推察される。

新英学校及び女紅場は、その後、女学校及び女紅場、女学校及び京都女学校、京都女学校、京都府高等女学校を経て、明治 20(1887)年、京都府立京都第一高等女学校と改称されるが、明治 33(1900)年に土手町の九条家河原邸から上京区荒神口通寺町下ル(鴨沂高等学校の現在地)に移転される。

明治 33(1900)年の「高等女學校建築工事一件書類」の表門移築内訳書に「表門、左右潜り門 高内法 5 尺 柱内法 貳尺 7 寸」とあり、門の左右にある潜り戸も門と一緒に土手町から移築されてきた。開校当初の写真では門の脇の潜り戸は 1 カ所しか認められないが、明治 33 年の校地移転時の行政文書には「左右潜り門」も移築すると記さ

れている事から、向かって右側の門は後の増築であることがわかる。

この表門は、昭和 11(1936)年、京都第一高等女学校の校舎を鉄筋コンクリート造(現在の鴨沂高等学校校舎)に建て替える際、保存か建て替えかの議論がなされたが、京都第一高等女学校側の強い要望により保存されることとなった。それは、この表門が同校にとって、皇族や公家との関わりや学校の由緒を示す重要な建物であると考えられたからである。



『改築落成記念帖』より(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 4-2 昭和 11 年新校舎竣工時の表門



写真 4-3 現在の表門



写真 4-4 妻飾り

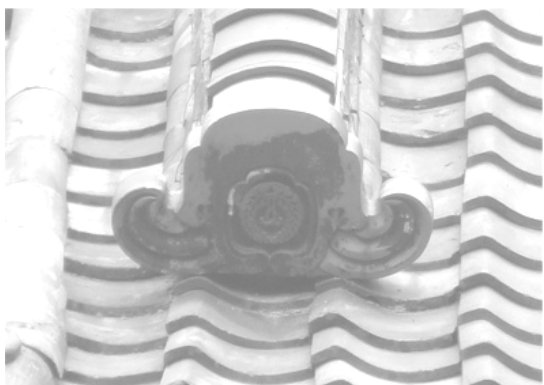


写真 4-5 鬼瓦



写真 4-6. 獅子口

この表門は近世の公家住宅の数少ない現存遺構として貴重である。同時に、この門は、新英学校及び女紅場以来、途中校地の移転の際にも移築され、戦後の鴨沂高等学校に至る同校の長い沿革を通して、同校の象徴的な存在としての役割を果たし続けて来た。そのことの歴史的意義も大きい。

今後も、長く保存されることが望まれる。



## 5.茶室

鴨沂高校の茶室は、開校当初校舎として使用していた九条家河原邸から移されたものであると伝えられている。切妻造り瓦葺きで軒先は銅板葺きとなっている。明治32(1899)年の「高等女学校新築工事茶室及待合所 移築設計書<sup>1)</sup>」では、「屋根瓦葺、軒先柿葺」とあり、昭和11(1936)年の新校舎竣工式の写真でも軒先は柿葺きとなっていたため、現在の銅板は後に葺き替えられたものである。

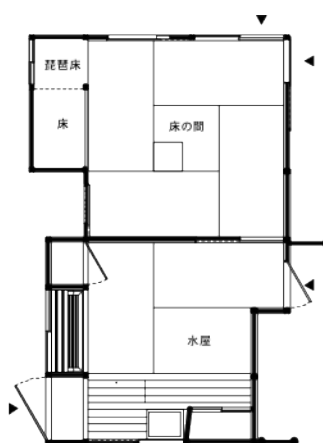


図 5-1. 現在の茶室平面図

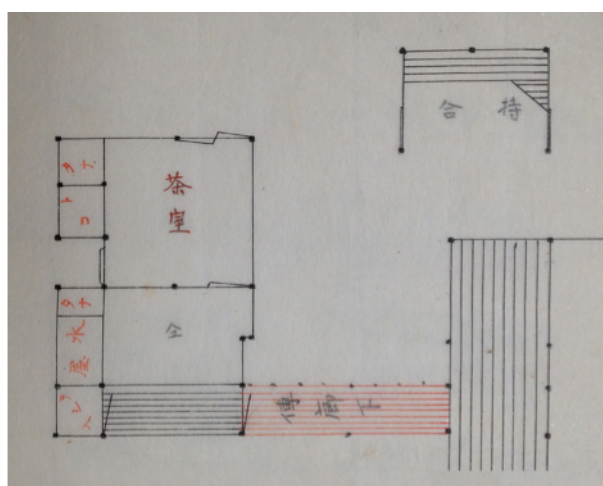


図 5-2. 校地移転時の茶室及び待合所平面図

『高等女学校建築工事一件書類』より

(京都府立総合資料館所蔵)



写真 5-1. 昭和 11 年当時の茶室

(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

図 5-2 は明治 33 年に校地を移転する際に、移築された茶室の平面図である。移築される茶室に新しく伝廊下が取り付けられ教室と繋ぐ計画となっている。現在の水屋は、図中の「ヲシ入」と書かれている部分に出入り口があり、押入は明治 33 年当時出入り口となっていた部分に設けられている(図 1 参照)。四畳半の茶室部分は移築当時から変わらないが、水屋については、鉄筋校舎の新築に伴う茶室の移築に際して、茶室の向きに応じた出入り口や押入位置が変更されていたことがわかる。

茶室は四畳半で、躰口の正面に床を構える。床は、台目の畳床とその脇に一段高い小床を設け琵琶床とし、琵琶床の奥の壁には引違いの明かり障子をたてている。床柱や床框の見付には入節の杉磨き丸太が用いられる。床及び床脇の天井には杉の一枚板が張られ、床の左手には相手柱として皮付の赤松丸太が立つ。床上面の廻縁と床脇の落掛には赤松の皮付丸太が、床の落掛には杉が用いられている。



写真 5-2. 床廻り現況

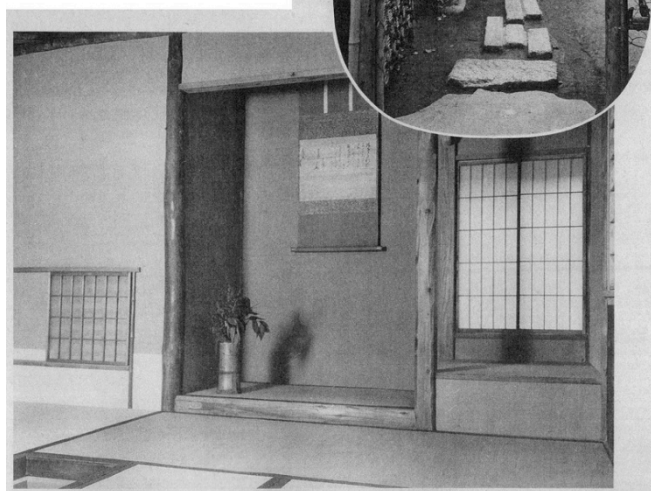
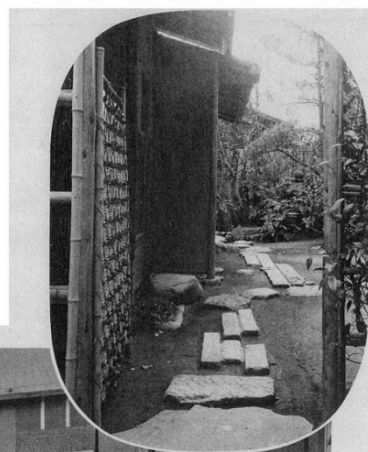


写真 5-3. 昭和 11 年当時の茶室内部

京都府立京都第一高等女学校『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)



写真 5-4 楊子柱



写真 5-5 軒桁

手前座の風炉先には下地窓、手前座入隅の柱は、上部のみを残し下部を塗り回した楊子柱としている。

客座側の壁には、片引き窓と貴人口が配される。片引き窓の敷居と鴨居は杉で、竹の戸当たりが設けられている。貴人口は腰付障子 2 枚の引き違い、脇の柱は入節の杉丸太、貴人口の敷居と鴨居及び客座側の廻縁も杉としている。

躰口側の上部には竹の連子窓、入節の杉丸太の柱を挟んで下地窓が配される。軒桁は杉の磨き丸太で茶道口より 1 間程をなぐり仕上げとしている。

躰口と矩折に亭主の出入りする茶道口が設けられている。茶道口は方立口で、鴨居方立とも杉を用い、太鼓張の襖が入る。

茶室の天井は床前から手前座にかけて片木板(野根板)を網代張とした平天井で、竿縁は竹の吹寄せとしている。躰口より半間は掛込天井で、杉の片木板を張り竹垂木に竹小舞を配した化粧軒裏としている。

全体として、土壁や面皮柱、入節の丸太等、自然の素材を多用した閑寂な趣のある茶室である。

躰口正面に床、客座と躰口側に窓、躰口と矩折に配された茶道口、手前座入隅の楊子柱等、茶室の平面構成や天井の意匠は、利休の孫の千宗旦が、利休の聚楽屋敷の四畳半の茶室を再現したと伝えられる裏千家の「又隠」を想起させる。「又隠」は、利休の流れを汲む四畳半茶室の典型として、江戸時代に広く流行したと言われていることから、この四畳半の茶室を九条家河原邸内に建てる際に、「又隠」を意識していたとも考えられる。



「又隠」は、天井も低く、壁面の下地窓は2カ所、屋根裏の突上窓が1カ所の合計三つの窓しかあけられておらず、ほの暗い空間であった。それに対し、この茶室は手前座側以外の全ての壁面に窓がリズミカルに配されて、四畳半茶室でありながら、非常に開放感のある空間となっている。

開放的な空間作りは、四畳半という狭さを感じさせないためであろうが、もともと、九条家河原邸内に建っていた茶室であることから、四畳半の典型として「又隠」を参考にしつつも、窓の外に広がる鴨川や東山の風景を楽しむことができるよう開放的に造られたとも推測できる。



写真 5-6. 水屋



写真 5-7. 茶道口の方を見る 写真 5-8. 押入、右端に炉が見える

茶室の茶道口から水屋に入ると、左手半間の壁には、躡口とその上部に下地窓が中心をずらして配される。茶道口側の壁の右手には、台目寸法の水屋とその脇には茶道具を収納する物入戸棚を備える。水屋左手に出入り口が設けられている。

水屋は二段の通し棚とその上部に二重の釣棚が取り付けられる。棚奥の壁には引違い



の障子を配し、足元は竹の簀子が置かれた水屋流し、その流しを囲む三方に腰板を張り、茶筌や茶巾等をかける竹釘が打たれている。水屋流しの手前は通常縁甲板張りとするが、畳敷きとなっているため水屋流しは 18cm 立ち上げて設置されている。水屋の両側にたつ柱は、入節の杉の磨き丸太で、水屋脇の物入戸棚の扉は杉片木板の網代張としている。

茶道口正面の壁には、茶道具を収納する引違い杉板戸の押入が上下二段に設けられ、赤松皮付丸太の柱を立てる。足元は縁甲板張りの床となっており、押入脇には炉が切られる。炉の前には片引き戸、右上にも窓があり角柄窓としている。炉の上部には一重の釣棚が設けられている。この炉は、控え釜が掛けられたり、お湯や火入れ炭などの準備のためのものであろう。

水屋の天井は、杉板に竹の竿縁天井とし、廻縁には北山杉の入節の小丸太が配される。茶室同様水屋も、素朴な材料を随所に使用した侘びた風情としている。

『鴨沂會雑誌』に、明治 33 年の校地移転に伴い新築された校舎についての記事があり、その中でこの茶室についてもこのように触れられている。「因に云、この新築校舎の内、現在の作法教室及茶室竝に表門の三つの建物は、新築の方へ引移されむ御豫定なり(中略)茶室は、今の裏千家宗匠の、本校教授中、丹誠をこらして営みたてられたるなりとか承れば、かいなでの数寄屋にもあらざるべし<sup>2)</sup>」と。

宗匠円能斉がこの茶室で丹誠を込めて茶事を行っていたということを伺えば、(この茶室は)もはやありきたりの数寄屋ではない、と記事は述べている。当時の裏千家の宗匠 13 代円能斎鉄中は女学校教育の中に茶道を取り入れる事に注力していた人物であり、明治 23(1890)年の昭憲皇太后行啓の際、茶儀の演習を担当していた教員として千宗室の名前が当時の『鴨沂會雑誌』に記されていることから、宗匠円能斉が、この京都府高等女学校において教鞭をとっていたことが伺える。

この茶室は、現存する公家の茶室の一つであると伝えられ、表門とともに新英学校及び女紅場以来、長い歴史を経て現在の鴨沂高等学校に至るまで、同校の出自を示す象徴的な存在としての役割を果たしている。また、裏千家宗匠との関わりの深い茶室として、その意義も大きい。今後も、門とともに長く保存されることを望む。

## 参考文献

1. 中村昌生：茶室を読む、淡交社、2002. 10. 26
2. 前久夫：茶室の見かた、東京美術、2002. 12. 25
3. 北尾春道：数寄屋詳細図譜、彰国社 1953. 10. 1
4. 堀口捨己：日本の美術 No. 83 茶室、至文堂、1973. 4. 15

5. 林屋辰三郎：角川茶道大事典、角川書店、2002. 9

---

**注釈**

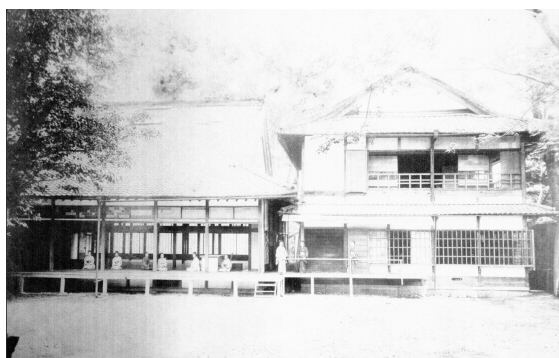
<sup>1)</sup> 京都府立総合資料館所蔵：高等女學校建築工事一件書類、1899-1900

<sup>2)</sup> 京都鴨沂会：鴨沂會雜誌第十一號、1898. 2. 25、pp77

## 6.木造校舎（通称「和室」）

本館の東に木造平家の建物が建っている。この建物は旧校地から移築されたものであり、元をたどると明治 23(1890)年 4 月、高等女学校時代(上京区土手町通丸太町下ルに所在)に建てられた木造校舎の一部である。当初は、1 階に音楽室、2 階に作法室を備えた木造 2 階建ての校舎として建てられた。落成後すぐの明治 23(1890)年 4 月 27 日に昭憲皇太后の行啓があり、その際には 2 階の作法室が休憩所として使用された。

明治 33(1900)年に校地が現在の寺町通荒神口下ルに移転した際、旧校地から移築された表門と茶室とともに、この 2 階建て建物 1 棟も移築され、階下を割烹教室、職員食堂、第二作法室、階上を第一作法室としている。



(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 6-1 明治 23 年完成の 2 階建て校舎



『鴨沂会雑誌』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 6-2 明治 33 年の玄関廻りの写真

玄関脇向かって左の 2 階建ての校舎が作法室棟



(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 6-3 昭和 11 年 行啓記念館

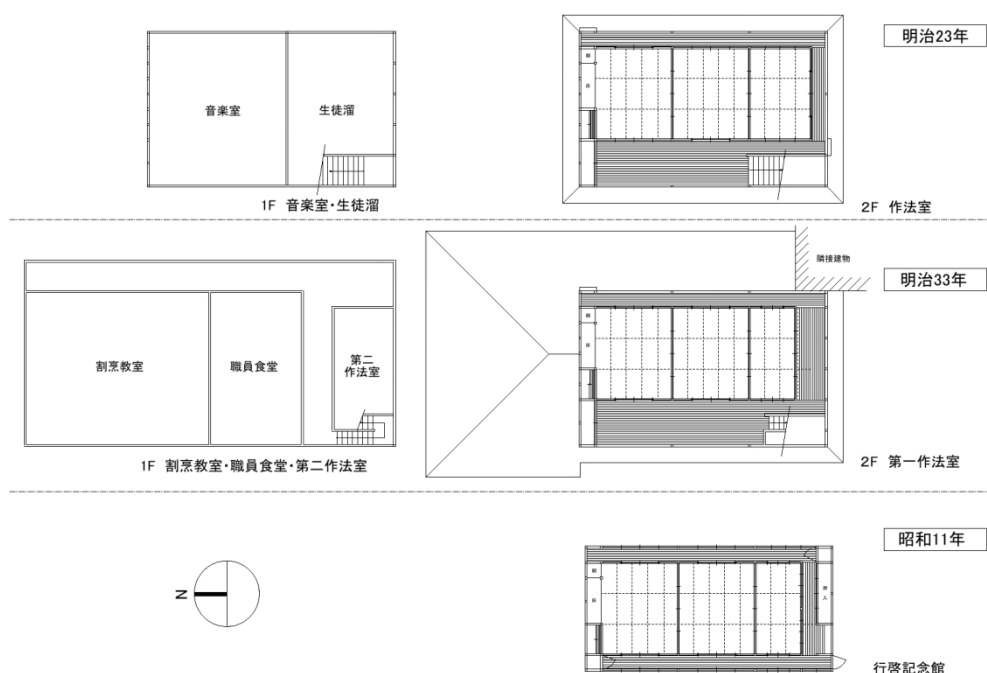
手前は、同じく旧校地より移築された茶室

図 6-1 は、この建物について、明治 23 年、33 年、昭和 11 年当時の平面構成を復元したものである（京都府文化財保護課による）。明治 23(1890)年の建築当初は 8 間×5 間の総 2 階の建物であった。明治 33(1900)年に土手町から荒神口へ移築されるが、その際、1 階が北へ 4 間×5 間分増床された。明治 23 年、昭憲皇太后行啓の際使用された 2 階の旧作法室については、ほぼ元の形を保ちつつ第一作法室として再建された。

昭和 11(1936)年、校舎が鉄筋コンクリートに建て替えられた時も、表門、茶室とともに、この建物も保存される事となる。そのために、鉄筋コンクリート校舎の新築に伴い校内で場所を移し、しかも 2 階建ての建物はいったん取り解かれ、旧材を使用して現在のような木造平屋建て校舎として再建された。

復元図からは、現存するこの木造校舎は、明治 33 年当時の 2 階の第一作法室部分を用いて建てられたことがわかる。ただし、明治 23 年の建築時から昭和 11 年に再建されるまで 2 階にあったため、西側に階段、南側には開口が取られていた（写真 6-1、6-2 参照）。昭和 11 年に平家として再建された際に、階段は取り払われ、南側に茶室が建てられたため、南にあった開口は塞がれて収納とされたものと考えられることができる。

この平家の建物は「行啓記念館」と命名されたが、その建物の名前からも伺えるように、明治 23 年、昭憲皇太后の御座所として使用された作法室を、2 度の移築を経てもなお、そのままの形で保存しようとしてきた事がよくわかる。



（京都府文化財保護課により復元）

図 6-1 木造校舎の平面の変遷



現存する木造校舎は、桁行 8 間梁間 4 間の入母屋造り棧瓦葺平家建てである。下手(南側)に 6 畳の板の間の水屋があり、上手(北側)に向かって 9 畳、15 畳、15 畳と三間続きの和室とし、続き間の東西両側には幅半間の廊下が南北に長く通っている。

上手 15 畳の間の正面は、地袋を備えた床脇、1 間半の畳床、その脇の半間を琵琶床とする。長押を廻し、上手 15 畳の間には菊菱文様の釘隠しが打たれている。手前の 2 室にも釘隠しの痕が残るので、かつては 3 室ともに釘隠しが打たれていた模様である。床柱は杉の磨き丸太、床框は漆塗り、琵琶床には檜材が用いられる。各室を間仕切る鴨居上部の欄間は三つに分割され、中央には板目の杉板が嵌め込まれ、左右の欄間は櫛形の杉板に千鳥が彫られている。

校地が現地へと移転された明治 33(1900)年に撮られた古写真を見ると、床脇、床の規模や配置は現在のものと変わらないが、床柱は角柱、床脇には天袋と飾り棚、欄間には全て櫛形の板が嵌め込まれていた様子が窺え、また手前の部屋にも釘隠しが打たれていたことも確認できる。昭和 11 年、この建物が校内で現状の位置に移転された際、2 階建てから平屋建てに改修されるとともに、室内の造作も多少改変されたようで、改修以前の床廻りは今よりもやや格式張った構成であったことがわかる。

明治 23(1890)年、昭憲皇太后の行啓はこの校舎の完成直後である。改変以前の当初の座敷飾りは、この部屋(作法室)を御座所として利用する事を念頭に置いたものなのかもしれない。



『創立第三十五年紀年誌』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 6-4 作法教室



写真 6-5. 木造校舎全景



写真 6-6. 西側廊下



写真 6-7. 床廻り 写真 6-8. 床柱釘隠し



写真 6-9. 15 畳和室



写真 6-10. 欄間の千鳥



写真 6-11. 廊下釘隠し

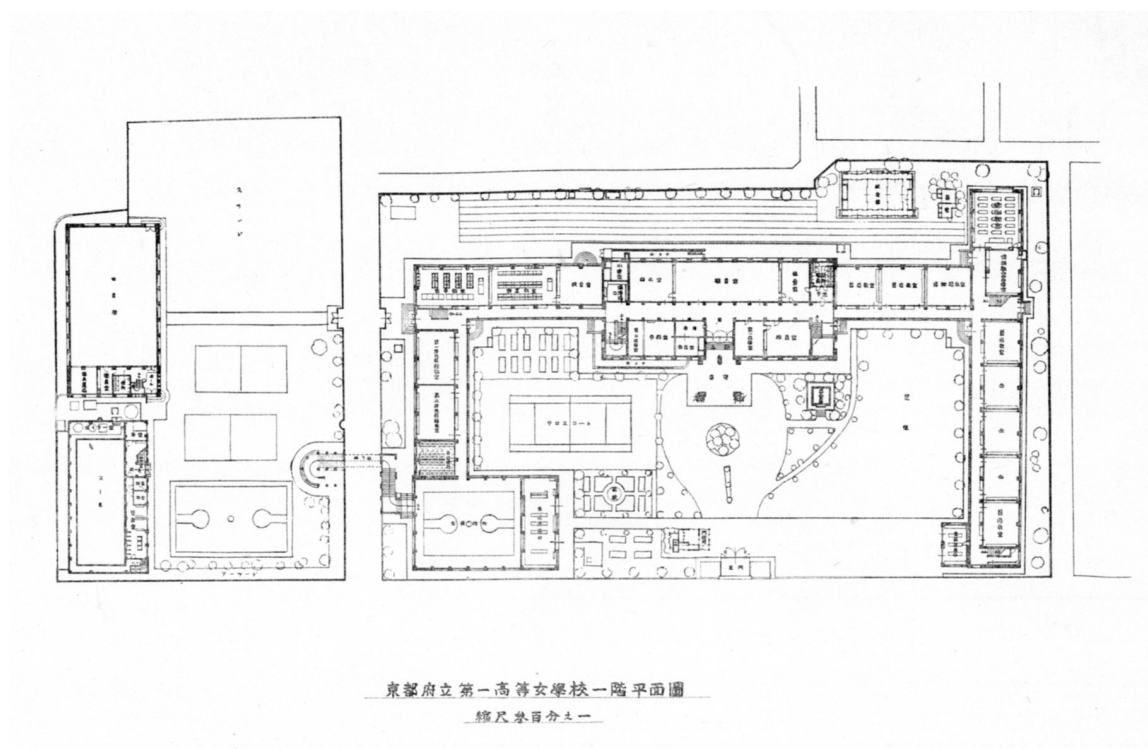
明治 23(1890)年、京都府高等女学校時代に建築され、昭憲皇太后の御座所として使用された作法室は、2 度の移築を経て現在の木造平家建ての木造校舎に至る。現存する「和室」は、建築当初の 2 階建てから平家へと建築構造は変わり、座敷廻りの造作も多少変更されているものの、かつての作法室の面影をよく留め、御座所という由緒とともにその風格をよく伝えている。

この建物は、明治中期に建てられた高等女学校の今に残る稀少な木造校舎であり、明治の女子教育機関に関わる作法室を伝える校舎遺構としても重要である。同校と皇族との関わりを記念するという意義も含め、今後保存の手だてが求められる。

## 7.本館・教室棟・特別教室棟

### 7-1.概要

表門の正面に、本館棟を中心に、右側(南側)の普通教室棟、左側(北側)の特別教室棟の3棟が、南北に長くコの字に連なる一体型校舎を構成している。いずれも鉄筋コンクリート造の3階建てであるが、本館及び特別教室棟は昭和9(1934)年に、普通教室棟は翌10年に竣工している。設計は京都府営繕技・十河安雄による。



『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

図 7-1 校舎平面図

### 7-2.外観

外観デザインの基調はモダニズムであるが、本館と左右の教室棟では変化をつけつつ、本館の中心性が強調されている。すなわち、本館と両教室棟はともに低い寄棟造りの屋根を載せているが、本館では3階の上部、屋根底の下部にいわゆるアティックの層を設けることで教室棟よりも屋根を一段高くし、しかも柱型による太い垂直線を主体とするやや厳めしい雰囲気を持つ外観としている。これに対し左右の教室棟は、窓上部の連続底による水平線を強調することで、軽快な印象を与えている。



本館と両脇に続く教室棟の、このような視覚的な差異による本館部の中心性は、さらに本館中央上部に高く掲げられた「千鳥破風」という和風モチーフによって一層強調されている。しかも、破風の拝みには懸魚が鰭とともに取り付き、懸魚中央には銅製の六葉が、鼻母屋にも鋳金具を取り付けるなど、鉄筋コンクリート造の校舎でありながら和風意匠は細部にまで及んでいる。

本館三階上部のアティック層には、内部の講堂への採光窓である三連のアーチ窓と円柱が並んでいる。しかも、円柱の柱頭には寺院でよく見かける雲文をかたどる銅製の鋳金具が取り付けられていて、アーチ窓との和洋折衷の不思議な組み合わせが試みられている。



『改築落成記念帖』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）

写真 7-1 本館(昭和 11 年)

このように、全体的には直線的なモダニズムデザインであるが、本館正面上部に和風意匠が大胆に採用されている点が、同校の鉄筋校舎の最大の特徴である。これは、隣接する御所御苑との調和を考慮し、前段でも述べたような「建築様式ヲ日本趣味ヲ加味シタル近世式<sup>1)</sup>」とした設計意図によるもので、同校の立地条件を念頭に置いた和洋折衷の意匠的な試みとして注目される。

立地条件と場所性に依拠した和洋折衷の鉄筋コンクリート造校舎としては、他に京都市内では八坂神社の門前に位置する元弥栄中学校(旧弥栄小学校、昭和 12 年築)をあげることができる。弥栄校では校舎の屋上に切妻屋根が載せられている。これに対して鴨

沂高校における千鳥破風は、御所御苑を望む校舎の正面中央部にのみ設けられ、御所御苑との関係性が読み取れる。同校の鉄筋校舎における和風意匠は、御所に対する正面性を明確にすべく付与されたといつてよい。

### 7-3.本館の構成

本館の一階は、南北に通る中廊下を軸に、玄関ホールと教員室を中央に配して、事務室、校長室、放送室等がその両側に並んでいる。二階には、やはり中廊下の両側に普通教室や会議室を配置している。三階は、両端部を除き無柱の広々とした講堂で、北側にステージや控え室を設け、南側を入口とする。



『改築落成記念帖』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）

写真 7-2 本館階段室及び音楽教室（昭和 11 年）

本館の両端（南北端部）西側には階段室が設けられている。階段室は本館端部の西側すなわち表側に置かれ、しかも中階にある踊り場のレベル差を生かした縦長の窓を設けることで、外観においても本館表面（西側）両端を意匠的に引き締める役割を果たしている。

南北両階段室の手摺や手摺子（縦ざん、縦子）には木が使われ（アピトンという濃い色の南洋材）、階段の段板、蹴込み板、踊り場のフローリングとともに、これらの木部がプラスター塗りの白いコンクリート壁面との鮮やかな対比を見せていて、階段室は本館内部の一番の見所となっている。

しかも、動線的には、南側の階段が三階の講堂入口に接続する為に動線の要になるのに対して、北側の階段室は、三階にあってはステージ背後の通用口に接続している。このように、南北両階段室の三階廻りの空間構成は大きく異なることで、その対比もまた本館内部意匠の要所となっている。

#### 7-4. 普通教室棟・特別教室棟の特徴

本館の両脇に接続する普通教室棟(南側)・特別教室棟(北側)は、いずれも棟を西側へL字型に曲げ、校舎全体をコの字型とするが、その内側に廊下を通す片廊下型とすることで、中廊下型の本館とは異なり明るく開放的な廊下を軸とする棟となっている。

両棟ともL字型の要の位置に階段室を配している(南側の普通教室棟には、西端部にも階段室が設けられている)。これらの階段室は、本館のそれとは異なり木部による手摺子を省くことですっきりとした意匠としつつ、本館階段室との差異化が図られている。



『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

写真 7-3 合併教室及び階段室(昭和 11 年)

#### 7-5. 屋内プール及び体育館

荒神口通りを挟んで北側の校地には、グラウンドの北側に屋内プールと体育館が建っている。屋内プールは鉄筋コンクリート一部鉄骨造 2 階建てで昭和 8(1933)年に、体育館

は鉄骨鉄筋コンクリート造で同 9 年に竣工している。

屋内プールは、創立 60 周年記念事業の一つとして鉄筋コンクリート造への一連の校舎改築の最初に着手された。その竣工式は昭和 8 年 4 月 16 日に挙行され、屋内プール建設父兄後援会常任委員長で工学博士の中澤良夫が式典にて工事報告を行っている。

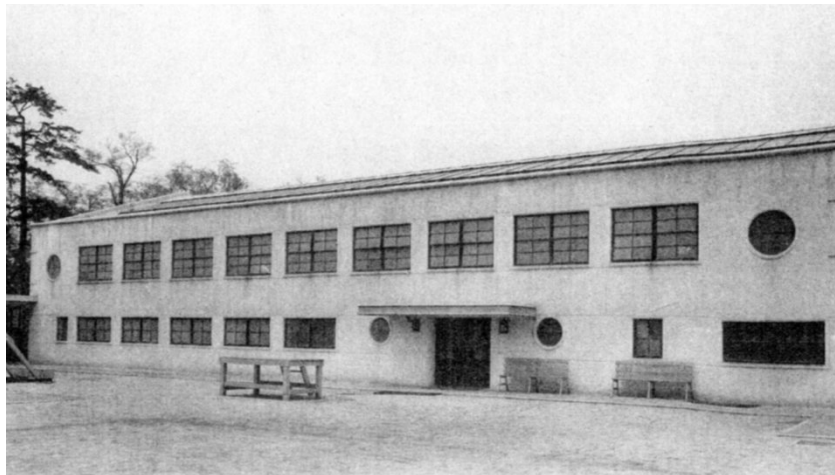


写真 7-4 屋内プール外観(昭和 11 年)



写真 7-5 屋内プール内部(昭和 11 年)

写真 4, 5 とも『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

それによると、「設計者は京都府営繕技師十河安雄氏、工事請負者藤井清三郎氏施工者永田芳太郎氏機械請負者石井武治氏なり。(中略)鉄筋コンクリート造り、屋根は鉄骨小屋組波形スレート葺きとし一部を坂元式サイエライトガラス入りスカイライト張りとして採光を十分にしたり。尚電燈設備をなし夜間にても使用し得ることとす。(中略)機械室には温水装置を施し年中 21 度の水温を保ち何時にても使用し得。更に濾過消毒



及び循環装置をなし8時間に1回完全に濾過し得るやう設備せり<sup>2)</sup>」と、天井の一部をトップライトとして昼間は採光を十分に取り、夜間も使用できるよう照明が設置された。温水設備、濾過設備は当時の最新設備が採用された。

屋内プール棟の内部は、貴賓室、休養室、化粧室、浴室、脱衣室、シャワー室、便所、機械室があり、一度に800人の観覧者を収容することができる。

プールの竣工式には久邇宮多嘉王、同妃、同徳彦王が台臨した。屋内プール内に貴賓室が備えられ、同校と皇族との関わりが窺える。

プールの外観、内部はともに装飾性は乏しく簡素であるが、当初は横長の窓が規則正しく並ぶ外壁の両端に丸窓が穿たれ、出入口の脇にも小さな丸窓が左右に配されて、外観に興を添えていた。現在は塞がれていて当初の趣は失われている。室内のプール上部は、連続する柱型が支持する鉄骨トラス造の小屋組がそのまま表しとなっている。プールの両側に建ち並ぶ柱型は上方で緩やかに湾曲して持ち送りとなり、トラス組を受け止める様は、簡素ながらも穏やかな意匠性を感じさせる。

屋内プールの竣工から1年後に完成した体育館は、プールと同様の切妻屋根の単純な構成をとるものの、プールとは対照的にその外観には水平庇や丸窓があしらわれ、個性付けがされている。すなわち、体育館の両側面は柱型を強調した大きな縦長窓を連続させることで十分な採光を確保し、一方、出入口廻りは屋根を陸屋根として庇を深く張り出させ、壁面に大中小の丸窓を効果的に穿つことで、外観意匠の見せ場としている。大型縦長窓の垂直線と庇の水平線、これに窓の円形が加わることで、グラフィカルで独特の外観デザインとなっている。丸窓のモチーフは、玄関ホール内部においても、階段昇り口に据えられた大円形の親柱との意匠的な呼応関係が意図されていて、来訪者の目を楽しませている。

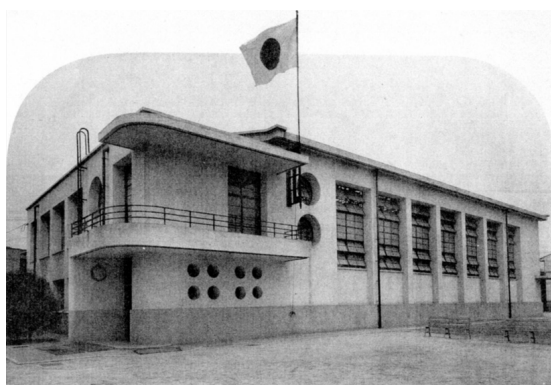


写真 7-6 体育館外観(昭和 11 年)



写真 7-7 体育館内部(昭和 11 年)

写真 6, 7 とも『改築落成記念帖』(社団法人 京都鴨沂会所蔵)

体育館の一階は玄関ホール、階段室、職員室、便所、体操器具置場、体操場、小階段

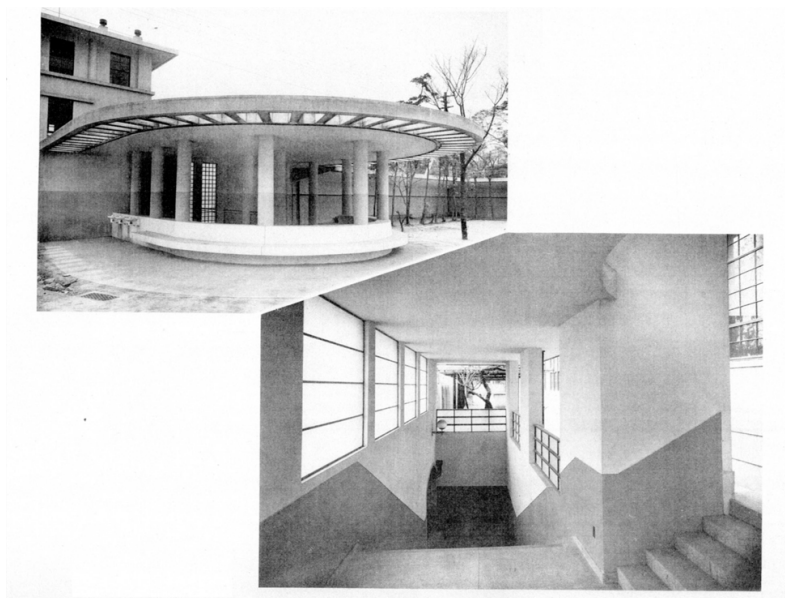
で、二階は階段室、貴賓室、更衣室、4 室のシャワー室、観覧席となっている。天皇の行幸や皇族の台臨に備えて、体育館にも貴賓室が備えられていた。

当時の『鴨沂会雑誌』の「近世式鐵筋骨コンクリートの堂々たるその偉容は蓋し本府否日本一の稱を得るに足る事と思はれます。(中略)設備は至れり盡せりで外観内部近代體育の殿堂たるにふさはしい趣を具へて居ります。<sup>3)</sup>」という記事からも、同校体育館が当時の最新設備を備えていたことがわかる。

## 7-6.地下トンネル

鴨沂高校の体育館、屋内プール、および運動場は、荒神口通りを挟んで北側の校地に配置されているために、南側校地とは荒神口通り下の地下通路で結ばれている。

地下道の双方の入り口はともに鉄筋コンクリート造で、昭和 9 年にできている。北側の地下道口は、半円形の底を 12 本の独立した円柱が支えるだけの吹き放しの施設とし、外側の円柱の土台部分の立ち上がりにはベンチを設えている。南側の地下道口は、対照的に壁で囲まれた閉鎖的な長方形平面であるが、やはり半円形为天窓が陸屋根の上部に突き出していて、北側のそれとの意匠的な関係性を表現している。



『改築落成記念帖』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）より

写真 7-8 地下トンネル(昭和 11 年)



『鴨沂会雑誌』（社団法人 京都鴨沂会所蔵）より

写真 7-9 明治 33 年の地下トンネル



写真 7-10 現在の地下トンネル

この道路下のトンネルは、明治 33 年、現地に校舎が移転してきた時に設けられたものである。現在、体育館、屋内プールのあるこの北側校地には、明治 33 年当時は寄宿舍が建てられていた。南側校地の教室棟との連絡のために地下トンネルが設置されたのである。

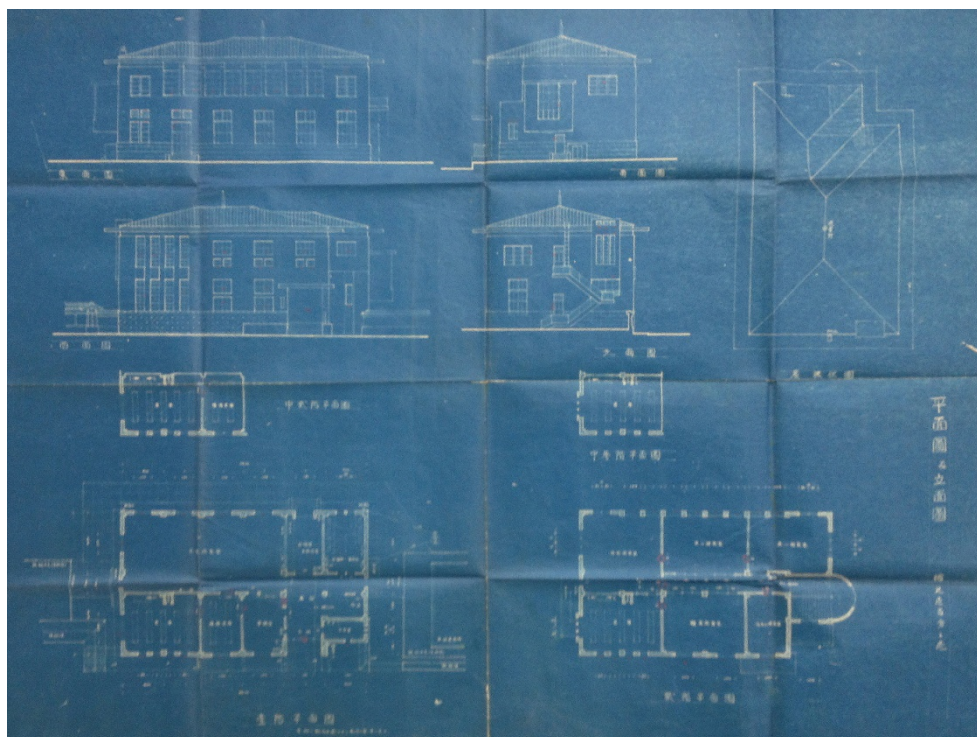
明治 31 年の『鴨沂会雑誌』は、新築校舎の配置に関する記事の中で、このトンネルも紹介している。「これぞ本校と寄宿舍とを連続せしむるトンネルの入口なる(中略)さてこのトンネルの中も廊下を設けられたれば、上は草履のままにて行かるべし<sup>4)</sup>」、と。

割烹実習室での授業の様子を撮影した写真を見ると、割烹実習室は板張りで、草履を履いたまま授業を受けている。明治 33 年以前の土手町時代の校舎の配置図を見てみると、教室棟と寄宿舍棟は渡り廊下で連結されており、下足に履き替える事なく行き来することが出来ることがわかる。記事の中の草履とは現在で言う上履きのようなものである。上履きのまま寄宿舍と学校とを行き来できるようにとの配慮から、トンネルが設置されたと推測できよう。

道路を挟んだ敷地の連絡用に、このような地下トンネルを設けた事例は全国的にも稀であろう。しかも、明治 33 年の開削以来、今日もなお校地内の重要な通路として使用され続けている地下トンネルは、鴨沂高校にとってその成立事情に関わる不可欠な施設であり、近代化遺産としての価値が高い。しかも個性的なモダニズムデザインによる両地下道口がこれに伴うことで、昭和初期の学校建築の意匠性を端的に示す好個の事例としても価値が高い。

## 7-7.図書館

昭和 13(1938)年、昭和の御大典記念事業として、また昭和 8 年の屋内プールに始まる一連の校舎改築の仕上げとして、鉄筋コンクリート造 2 階建ての図書館が建てられた。設計は校舎と同様、京都府営繕技師・十河安雄が担当した。



(京都府立総合資料館所蔵)

図 7-2 図書館平面図及び立面図

図書館は表門の右手(南側)に建てられ、校庭側(東側)と寺町通り側(西側)の二カ所に出入口が設けられた。寺町通りに面した入口は、同窓生など、校外からの利用を想定したものという。

屋根は緩勾配の寄棟屋根とし、四周に深い水平庇を廻らせ、外壁は周囲との調和を考慮し落ちついた色彩、材料が選ばれた。寺町通りを介して御所・御苑と相対するものの、本館のような日本的趣味は見られない。深い庇下に配列された大小の正方形と縦長の開口部による端正な立面構成と、半円筒形の張り出し(階段踊り場)による外観は、派手さはないものの、理性的で落ち着いたあるモダニズムデザインの優れた事例として評価できる。寺町通り側の玄関廻りには石を貼り手摺を添えることで重厚感を演出し、外観にアクセントを添えている。





写真 7-11 竣工当時の図書館外観

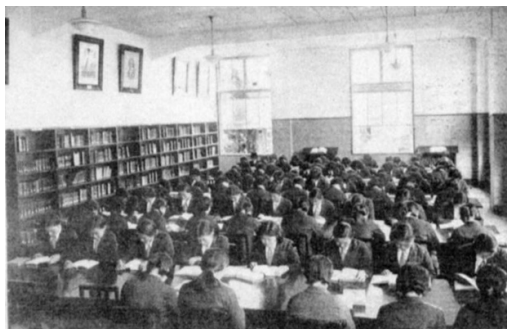


写真 7-12 生徒閲覧室

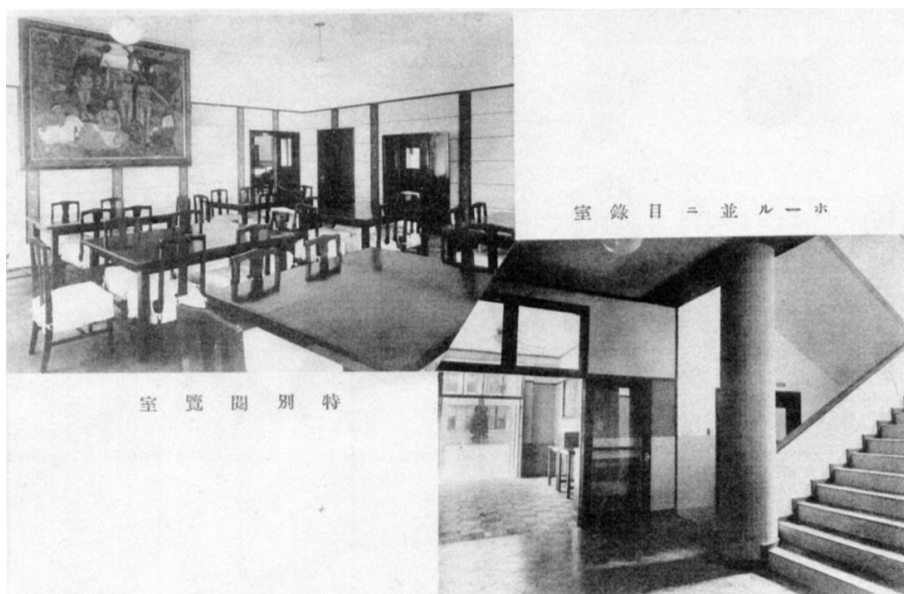


写真 7-13 図書館内部(左上・特別閲覧室、右下・ホール並びに目録室)

写真 7-11、12、13 とも『記念図書館竣工記念絵葉書』(京都府立総合資料館所蔵)

1 階建ての各階は、他の校舎等と比べて階高が高く、1 階閲覧室及び 2 階に設けられた外来者用特別閲覧室の天井高は一樣に高い。特に 1 階閲覧室には天井が張られず、窓は上部に小壁を設けず天井直下まで縦長に開けられ、開放感のある閲覧環境が実現されている。

高い階高を結ぶ階段もまた長くなる。ゆえに階段室は矩形の本体から張り出させて半円筒形にかたどり、外観に変化を与えつつ、先端には湾曲した縦長の開口部(現状は後補のガラスブロックを嵌めている)を開け、さして大きくない同館にあって、大階段室の趣を呈している。

同館の高い階高は、実は大容量の書庫を収容するためである。各階に鉄骨造 2 階建て

の積層書庫が配架されて都合4層の書庫となり、各層は鉄骨造の階段と小型リフトにより直結されている。最上層に昇ると、寄棟屋根が化粧屋根裏となり、梁は登梁となって寄棟屋根を直接支持していることがわかる。同館の勾配屋根は、四層の積層書庫に十分な階高を確保するためであることが了解される。

同校の図書館は、小規模ながらも、このような本格的な積層書庫を内包し、昭和初期における高等女学校附属施設としての水準の高さを示して注目される。

同館はまた、外来用の特別閲覧室や出入口が用意され、対外的にも開かれた施設として計画された。それゆえ寺町通りに直に面し、しかも表門の脇が選地された。同校の顔とも言うべき立地に対して、同館は落ち着いたある洗練されたモダニズムで答えている。

同校の図書館は、昭和初期の学校附属図書館建築の機能性と意匠性を高いレベルで実現している恰好の実例として高く評価できる。

#### 参考文献

1. 京都市文化財保護課：京都市近代化遺産、2006.6、pp120-122.
2. 社団法人大阪建築士事務所協会：まちなみ No.314、2003.9.1、pp10-13

---

#### 注釈

- <sup>1)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第78号、1936.7.15、p102.
- <sup>2)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第72号、1933.7.15、p88.
- <sup>3)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第75号、1934.12.25、pp78-79.
- <sup>4)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌第11号、1897.12.21、p75.

## 8. 鴨沂高等学校校舎の歴史的価値

### 8-1. 表門・茶室・木造校舎（通称「和室」）

京都御所の東に位置する京都府立鴨沂高等学校の前身は、明治5(1872)年、九条家河原邸を利用して開校した新英学校及び女紅場までさかのぼり、今年(2012年)で創立140年となる。同校は英女学校及び女紅場、女学校及び女紅場、女学校及び京都女紅場、京都女学校、京都府高等女学校、京都府立京都第一高等女学校と、その時々々の教育方針・制度の変化に伴い校名を変えて来た。また、生徒の増加に伴う校舎の増改築、さらに校地の移転(明治33(1900)年)と、同校を取り巻く変化とともに校地・校舎の状況も幾多の変遷を重ねて来た。

140年にわたる同校の歴史と、もっとも長く歩みを伴にして来たのが同校の表門と茶室である。これは、九条家河原邸の表門と邸内に建てられていた茶室で、少なくとも近世末期に遡る遺構として貴重である。明治33年の校地移転の際もそのまま移設され、さらには昭和初期の校舎改築の際にも保存された。

明治23(1890)年に建てられ、その直後の昭憲皇太后行啓の折には御座所となった木造校舎(通称「和室」)も、同33年の校地移転に際して表門や茶室と共に移築された。昭和11(1936)年、京都府立京都第一高等女学校時代に、校舎の大部分が当時最新の鉄筋コンクリート造に建て替えられる。その際、この木造校舎は2階建てから平屋に改修されつつも保存され、現在にまで活用され続けている。

昭和11年5月20日、鉄筋コンクリート造の新校舎竣工式における京都鴨沂会代表の祝辞では、「私達は土手町時代からの歴史を語る校門とお茶室とそれは母校の創立當時に校舎として使用された九條邸河原御殿の御建物の名残であるところの二棟が依然として舊観を存すると共に昭憲皇太后を初めて奉り数々のやむことない御方々の御休憩所に當てさせられた作法室が行啓記念館として改築保存されて居るのを拝見致しまして坐ろに懐かしさと嬉しさの涙さへ催すのでございます。彼の最新式の堂々たる三階建が日進月歩の文化に順応して日に新に又日に新なる教育上の施設をされる母校の方針を象徴する一方にこの舊態依然たる木造の建物が(中略)伝統に輝く校風を物語って居ると思います。<sup>1)</sup>」と、当校の創立当時から旧観を留める表門と茶室、当時の作法室の趣を残しながら保存された行啓記念館(現木造校舎)を、「伝統に輝く校風を物語る」存在であるとたたえ、「最新式の堂々たる三階建」新校舎竣工の祝賀とともに、その歴史的な存在意義が強調された。

このように、同校ではその長い沿革を体現し象徴する建築として、表門、茶室、木造校舎は常に重んじられ継承されて来た。戦後も同様で、これら木造建築は、同校の伝統

を物語る記念碑的施設と意義づけられ今日に至っている。

これらの木造建築はまた、同校の歴史性を記念することに加え、近代建築史上、あるいは京都の近代史上においても高い価値をもつ。表門、茶室は、近世末期の公家住宅に付随する数少ない遺構として、木造校舎もまた明治中期に建てられた高等女学校の希少な木造校舎遺構として重要である。ゆえに、これら3件の木造建築は、今後も長く保存されることが望まれる。

## 8-2.鉄筋コンクリート造校舎群

昭和8(1933)年から13年にかけて順次建てられた一連の鉄筋コンクリート造の校舎群についても、戦前期の旧制高等女学校の校舎遺構として貴重である。しかも京都府営繕技師・十河安雄によるモダニズムを基調とする質の高い校舎デザインは、近代建築群としての建築史的価値を高めている。和風モチーフを加味した本館教室棟を始め、体育館、屋内プール、図書館、地下トンネル出入口棟の、それぞれが個性を示しつつも校舎群としての統一性を保持する点も、十河の技量の確かさゆえであろう。

十河設計による校舎建築としては、他に京都府立鳥羽高等学校(元府立第二中学校校舎、昭和6年、同11年)、京都教育大学付属京都小学校(元京都師範学校付属小学校校舎、昭和13年)等がある。いずれも本館及び教室棟であるのに対して、体育館、屋内プール、図書館、さらには地下トンネル等の附属校舎・施設が一体として保存されている鴨沂高校に見るような校舎群は類例が少ない。同校校舎群の建築史的価値の高さの所以は、この点にもある。

個別にみると、まず、地下トンネルおよび出入口については、恐らくは他に類を見ない同校に特有の校地施設であろう。しかも、その設置が明治33年の校地移転時にまで溯ることから、同校の校地成立に関わる長い歴史性を有し、今日もなお現役であり続けていること。さらには、十河設計による出入口棟が、昭和初期の建築デザインの潮流を端的に示しつつ高い意匠性を発揮していること。これらの理由により、地下トンネルおよび出入口棟については、明治33年以来の校地の歴史と昭和初期の校舎デザインを象徴的に示す遺構として今後も保存されることが望まれる。

鉄筋コンクリート造の校舎建築については、まずは、中央の本館と南北の教室棟による長大な校舎列を、本館の中心性を示しつつも一体的にまとめあげたその外観デザインが秀逸である。とりわけ、隣接する御所・御苑への正面性を強調する千鳥破風と直下の玄関廻りを中軸とした外観西面は、本館及び教室棟の要諦をなして重要である。

本館・教室棟の内部は総じて簡素ながら、本館南北端部の階段室には本館内観の意匠設計のセオリーが凝縮されている。コンクリートの壁体面と、南洋材が採用された木部



との強いコントラストを主題とする階段室の造形は、最上階の3階でもっともダイナミックに展開されていて、本館内部最大の見せ場になっている。設計者である京都府営繕技師・十河安雄の技量が遺憾なく発揮された箇所といってもよい。

生徒達や教職員が毎日昇降する階段室は、単なる移動空間に留まらず、その視線の動きに伴う空間体験と木の手摺の手触りが、日々の学校生活の中で、とりわけ生徒達の記憶の中に刻まれるはずである。階段室内の空間構成は、同校の校舎内部においてもっとも保存されるべき部位として重要である。

なお、木部の造作という点では、校長室における造り付けの棚やキャビネット等が、竣工写真のままだに当初の状況をよく保持している。内部造作の多くが改装を受けている状況の中で、校長室は今後も保存すべきであろう。

本館の南北に連なる教室棟は、教室など内部は改修箇所が多いものの、注目すべきは校舎西側の前庭に面した片廊下の空間である。廊下の窓を大きく開けるために腰壁をあえて低くし、袖壁を省き、柱型以外を広く開口面とすることで、明るく開放的な通路空間を実現している。この点は、教室棟のガラス面の多い軽快な外観の構成と同義である。教室棟に長く連なる廊下空間には、当時のモダンデザイン思潮の投影とその効果を端的に読み取ることができ、同校鉄筋校舎の設計理念を体感しうる場として評価される必要がある。

図書館は、その端正で品格のある外観が寺町通りに面することにより、昭和初期に建てられた一連の校舎建築の水準の高さ、近代建築としての正当性を公に示す役割を果たしている点が重要である。近代の図書館建築が満たすべき機能に答える鉄骨造の積層書架など、近代化遺産としても評価されるべき同館は、近世遺構である表門との鮮やかな対比を見せつつ、同校の正面外観を飾る付属校舎として、その存在意義は大きい。

体育館及び屋内プールは、校地の北辺という立地条件のために存在感がやや希薄であるが、体育館の玄関廻りの意匠は、地下トンネルの出入口棟のモダニズムと呼応し合うことで、同校北側校地の雰囲気을支配している。屋内プールは、体育館に連続する特徴的な丸窓の喪失とともに、外観からは個性が失われはしたものの、昭和初期における一連の校舎改築に先鞭をつけ、しかも温水プールなど当時の最先端設備を導入した施設であり、学校付属施設の近代化を物語る遺構として注目される。

以上、昭和8年から同13年にかけて改築された一連の鉄筋コンクリート造校舎建築は、それらがほぼ欠けることなく現存し、個々に改装はあるものの、今もなお現役の校舎群として所与の役割のままに機能し続けていることの意義は大きい。

高等女学校としての長い沿革を背負う同校の校舎建築は、繰り返しになるも、それらが群として近代建築史的価値を互いに高め合っていることに、同校校舎建築の文化財と

しての価値がある。ゆえに、同校に遺存する近世近代の木造建築にのみ、同校の沿革に関わる価値があるという認識は正当ではない。これらの歴史的評価の延長線上に、鉄筋校舎群もまた同等に意義づけられなければならない。

---

#### 注釈

- <sup>1)</sup> 京都鴨沂會：鴨沂會雑誌 第78号、1936.7.15、p10

## 9. 鴨沂高等学校校舎の改修に向けて

### 9-1. 鉄筋コンクリート造校舎群の歴史的価値に即した改修方針

鴨沂高等学校の校舎群は、すでに『京都市の近代化遺産 近代建築編』（京都市文化市民局発行、2006年）にて、京都市近代化遺産調査委員会（当時）により詳細調査の対象物件として選定され収録されている。同書が個別にとりあげ論考したこれら建築物は、いずれも今後文化財として登録や指定されるべき要件を備えている。同校校舎の調査報告は石川祐一（京都市文化財保護課）が担当し、「昭和初期における叔新の学校施設が、一連の施設群として現存している点で貴重である。」と総括され評価された（同書 120～121頁）。

同書の翌年に刊行された『京都の近代化遺産』（川上貢監修、淡交社発行、2007年）においても同校校舎は取り上げられ、同様の評価が再確認されている（同書 162～163頁）。また、同校校舎と同じ京都府営繕技師・十河安雄の設計による鳥羽高等学校本館については、上記に加え、『京都モダン建築の発見』（中川理著、淡交社発行、2002年）が取り上げ、当時の京都府営繕組織の技量の高さとともに、前衛とも言えるそのデザインの先進性を高く評価している。

このように、同校校舎群の歴史的価値の高さ、あるいは府営繕組織によるこの時期の同校校舎を含む作例に対する評価は、本調査を待つまでもなくすでに定まり、広く巷間に周知されているといつてよい。

今回の詳細調査によって、同校校舎に関する詳細な歴史とその建築的特徴がより詳しく判明したことで、その文化財的価値はいっそう明確になったといえる。

ゆえに、鴨沂高等学校に現存する木造建築は言うに及ばず、昭和初期の鉄筋コンクリート造校舎群についても、公立高校という公共財としての存在意義と、歴史と文化を糧とすべき教育機関の理念に照らして、撤去して更地とし建て替える、という選択肢は想定し難い。

同校の歴史性と、校舎群の文化財的価値は他に換えがたく固有のものであることから、木造校舎共々、昭和戦前期に建てられた鉄筋コンクリート造の校舎建築群についても、その全体が保全されることが望まれる。

一方、より良い教育環境を府民に提供すべき責務を設置者は常に負っている。その点からすれば、木造建築に比べ、戦前期の鉄筋コンクリート校舎の保存は、耐震補強による耐震性能の保持、適正な施設規模の確保、機能性の向上等、今日的課題が多い。これら諸課題に対してなすべき現実的対応は大掛かりになると予想される。しかし、これは建て替えとても同じである。

如何に改修すべきか、という点については、以下の点が重要である。

これら鉄筋コンクリート造の校舎群は、多くの場合、外観意匠と、内部においては玄関廻りや階段室、特別な部屋等の限られた部位に意匠性が凝縮している場合が多い。鴨沂高校の校舎建築も、外観に加え、外観デザインと表裏一体の通路空間や、階段室、出入口廻り等、保存が強く望まれる内部意匠の所在は限定的である。

ゆえに、校舎改築に際しては、外観を保持しつつ(適度な新規意匠の表出は許容されよう)、保存すべき内部箇所を明確にした上で、他の内部改修については比較的柔軟かつ大胆に行うことができるものとする。必要に応じて増築される場合は、その外観意匠は当然ながら旧校舎との関係性が考慮される必要がある。

門については、新たな正門の整備により、現在の門を記念碑的に保存することも想定される。ただし、現在の門をわずかな距離でも移設する場合には、門脇の築地塀の扱いには注意を要する。

門に連なる左右の塀は鉄筋コンクリート造で、本館校舎などと一体的に整備されたものであり、九条家河原邸から移築された御門の歴史性とその様式に即して、コンクリート造ながら門を引き立てるべく伝統形式により整備されている。よって、塀といえどもその形式と意匠は正当なもので、いわゆる近代和風に類する工作物として評価しうる。

また、茶室や木造校舎(和室)の保存に際しては、旧態のまま保存整備されることが望まれるが、必要に応じた適地への再移築もありえる。さらに、木造校舎について言えば、場合によっては新校舎内で再建築するという方法も、考え方としてはありうる。

同校舎は、現地への移築の過程で、木造2階建てから平屋建てへとその構造形式は大きく改変されているし、内部についても、造作等の改変が当時の古写真との比較で確認できるためである。同舎は、明治中期に建てられた高等女学校の木造校舎遺構として、また昭憲皇太后行啓の御座所という慶事を記念する歴史性ととも文化財的価値が高いが、今後の保存方法については、柔軟にその対応が検討されてよい。

一方、茶室については、内外ともに痛みがひどく、トタン張りの応急処理がされた外観と、とりわけ内部造作の腐朽の進行に対しては早急の改修が望まれる。この茶室も幾度の移築を経て今日に至っている。小規模な建物であり、またそれゆえ茶室は一般的に移築されることが多いが、同校茶室は、移築を経ても大きな内外部の改変はない模様である。

よって、九条家河原邸内に建てられたという歴史性とその当時の形式を凡そ継承しているものと考えられることから、校舎の改修後も、校地の一隅の適所に保存され、京都の伝統文化に触れる施設として、大いに活用されることが望まれる。

## 9-2.建替えを前提とした部分的保存の考え方

すでに公表されている同校鉄筋コンクリート校舎群に関する耐震診断は、教育施設が必要とすべき耐震基準値を大きく下回り、地震時倒壊の危険性が高いことを示している。

府教育委員会は、もはや耐震補強の方途が残されていない、との認識のもとで、その全面的な建替えは止むなしと判断されている（むろん、制震や免震工法等の高度な耐震補強の可能性は残されてはいるものの、敷地条件や経費的な面で現実的ではない、との判断である）。

その上で、府教委としては、新築校舎の校舎デザインの中で、現存する校舎群の歴史性、意匠性を可能な限り継承する手だてを模索したいとの意向である。

では、限定的であり部分的保存になるとはいえ、可能なかぎりの保存的手だてを講ずる際に、どのような考え方で望むべきなのか。

以下は、8-2 に示した鉄筋コンクリート造校舎の歴史的価値を踏まえ、前節（9-1）に記述した鉄筋コンクリート造校舎の改修方針を前提としつつ、同時に、それでも建替え改築をするのであれば、どのようにすれば旧校舎の歴史性が最低限継承しうるのか、その点について基本的な考え方を述べたい。

まず、地下トンネルおよび出入口については、同校に特有の校地施設として、しかも、その設置が明治 33 年の校地移転時にまで溯り、校地成立経緯に関わる近代化遺産としても価値が高いことから、そのまま修復し保存すべきである。南北両出入口は、十河率いる当時の京都府営繕課による一連の鉄筋コンクリート造校舎群の意匠性の高さを象徴する存在としても保存する意義がある。小規模な施設であり、保存は比較的容易であろう。

正門と併置されて建つ同校の顔とも言うべき図書館は、昭和初期の校舎建築の斬新かつ端正な校舎デザインを、この建物が代表して公道に直接に示しているという点で、その存在意義は大きい（実際、通りに沿って入口を設け、開かれた図書館として計画された）、ゆえに、単体として保存改修の可能性が追求されることが望まれる。

むろん、改修後は図書館でなくてもよい。例えば、鴨沂高校の旧校舎を記念する施設として、内部は、近代化遺産的にも価値が高い鉄骨造の積層書架を蔵書類とともに保存しつつ、他の部分は会議室や集会室等多目的な利用が想定される。

鉄筋コンクリート造の本館と南北に連なる教室棟は、まず、校舎の外観意匠（車寄せを含む）が継承されるべきである。この場合、保存部分は車寄せや正面中央上部の千鳥破風などの限定的なものとなる。他については、モダニズムの洗練と、本館正面における和を加味し適度に格式張った意匠性の、両面を兼ね備えた現在の外観デザインをできる限り誠実に継承する、新規の外観デザインに負うことになる。



内部においては、玄関廻りや階段室、校長室の木製のキャビネット等の部位における高い意匠性が保存されるべきである。校長室の木製キャビネットをはじめとする木部の造作類は、本体から取り外しあらたな構造体に据え付けることでよい。

階段室については、手摺や手摺子、および階段の踏面や踊り場などにふんだんに使用されている南洋材の再利用を含む、階段室の全体構成が再現されることが望まれる。とりわけ、階段室3階の張り出した通路と階段によるきわめて独創的な吹き抜けの空間構成は、同校本館最大の見所である。当時のモダニズムの息吹と木部の多用による重厚さの絶妙なバランスの上に成立している本館階段室の再現は、建替え校舎における重要なテーマとなる。

北側校地に建つ体育館については、地下トンネル出入口棟のモダニズムを受け止めるように意図された、その玄関廻りの意匠的演出が巧みである。現体育館玄関廻りの大中小の丸窓は、地下トンネル北側出入口に張り出した印象的な半円形の屋根の造形と響き合うように穿たれたことは間違いない。

北側校地が今後どのように活用されるか不明であるが、北側校地に建つ新築施設は、地下トンネル北側出入口のオブジェのごとき高い造形性と呼応し合う高度なデザイン性が求められる。

木造の校舎群に関しては基本的に保存される方向であるが、その留意点についても述べておきたい。

正門は、記念碑的に保存することが望まれる。現在の位置から移設する場合には、門脇の鉄筋コンクリート造の築地塀も含めた移設が望ましい。その理由は前節で述べたとおりである。移設が困難な場合は、その忠実な再現が望まれる。

茶室や木造校舎(和室)については、移築をするにしても旧態のまま修復され保存整備されることが望ましいが、その維持管理という面では、新校舎の内で再建築するという方法もありうる。

ただしその場合は、茶室であれば、新校舎の屋内で、化粧屋根裏まで忠実に組み上げられるべきである。場合によっては屋内に路地庭を再現し、軒先や外壁まで復原することの可能性も検討されたい。

木造校舎は、もと2階作法室の、昭憲皇太后行啓の御座所という由緒を記念すべく保存されてきたことから、その歴史性は室内空間に力点が置かれている。ゆえに、新築校舎の屋内に移設されるのであれば、柱、鴨居、敷居、小壁、天井、座敷飾り、をはじめとする内部造作の再構築による移設保存ということになる。その場合、いうまでもないが、コンクリートの構造体との慎重な見切りにより、和室の室内空間の視覚的な独立性が確保されている必要がある。



## 10.写真（現況）



図 1-01 正門



図 1-02 正門詳細



図 1-03 正門細部



图 2-01 茶室外觀（俯瞰）



图 2-02 茶室入口廻り



图 2-03 茶室南側外觀





図 2-04 茶室屋根詳細



図 2-05 茶室水屋内観



図 2-06 茶室水屋内観



図 2-07 茶室水屋内観



図 2-08 茶室床の間内観



図 2-09 茶室床の間内観





图 3-01 和風校舎（和室）  
外觀（俯瞰）



图 3-02 和風校舎（和室）  
外觀



图 3-03 和風校舎（和室）  
屋根外觀



图 3-04 和風校舎（和室）  
内観



图 3-05 和風校舎（和室）  
内観



图 3-06 和風校舎（和室）  
内観





图 4-01 本館正面



图 4-02 本館正面外觀



图 4-03 本館背面外觀





図 4-04 本館車寄せ



図 4-05 本館玄関



図 4-06 北教室棟外観



図 4-07 北教室棟外観



図 4-09 本館背面



図 4-08 本館・南教室棟（左）背面



图 4-10 南教室棟 2 階廊下

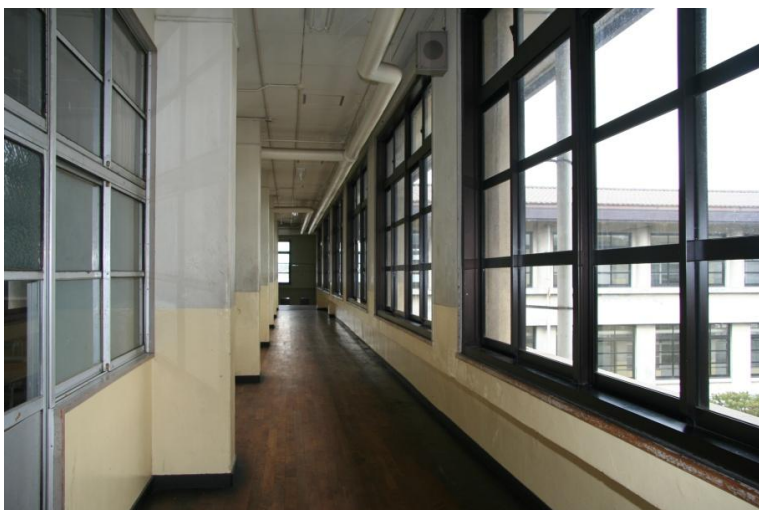


图 4-11 南教室棟 3 階廊下



图 4-12 本館北階段





图 4-13 本館北階段



图 4-14 本館北階段



图 4-15 本館北階段



图 4-16 本館北階段



图 4-17 本館北階段



图 4-18 本館南階段





图 4-19 本館南階段



图 4-20 本館南階段



图 4-21 教室棟消火栓



图 4-22 本館講堂



图 4-23 本館校長室



图 4-24 本館校長室



図 5-01 プール外観



図 5-02 プール内観



図 5-03 プール内観





図 6-01 体育館外観



図 6-02 体育館外観



図 6-03 体育館入口

階段廻り





図 6-04 体育館入口  
階段廻り



図 6-05 体育館入口  
階段廻り

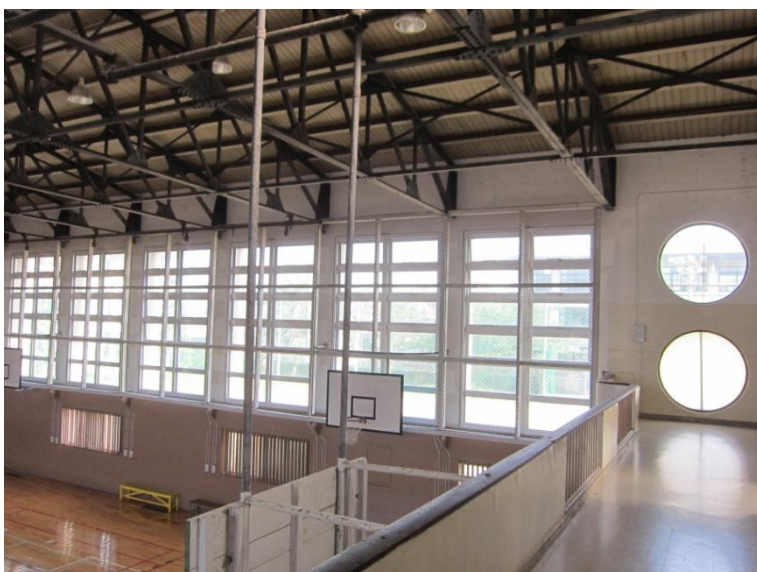


図 6-06 体育館内観



図 7-01 地下通路  
北側入口外観



図 7-02 地下通路  
北側入口外観



図 7-03 地下通路  
北側入口内観



图 7-04 地下通路北側入口



图 7-05 地下通路北側入口



图 7-06 地下通路北側階段





图 7-07 地下通路南侧階段



图 7-08 地下通路南侧入口内観



图 7-09 地下通路  
南侧入口外観





図 8-01 図書館外観  
(寺町通り側)



図 8-02 図書館玄関廻り  
(寺町通り側)



図 8-03 図書館外観（校地側）



图 8-04 图书馆 1 階閲覧室



图 8-05 图书馆階段



图 8-06 图书馆階段





図 8-07 図書館階段



図 8-08 図書館 2 階  
特別閲覧室



図 8-09 図書館 2 階会議室



図 8-10 図書館積層書架



図 8-11 図書館積層書架  
(最上階)

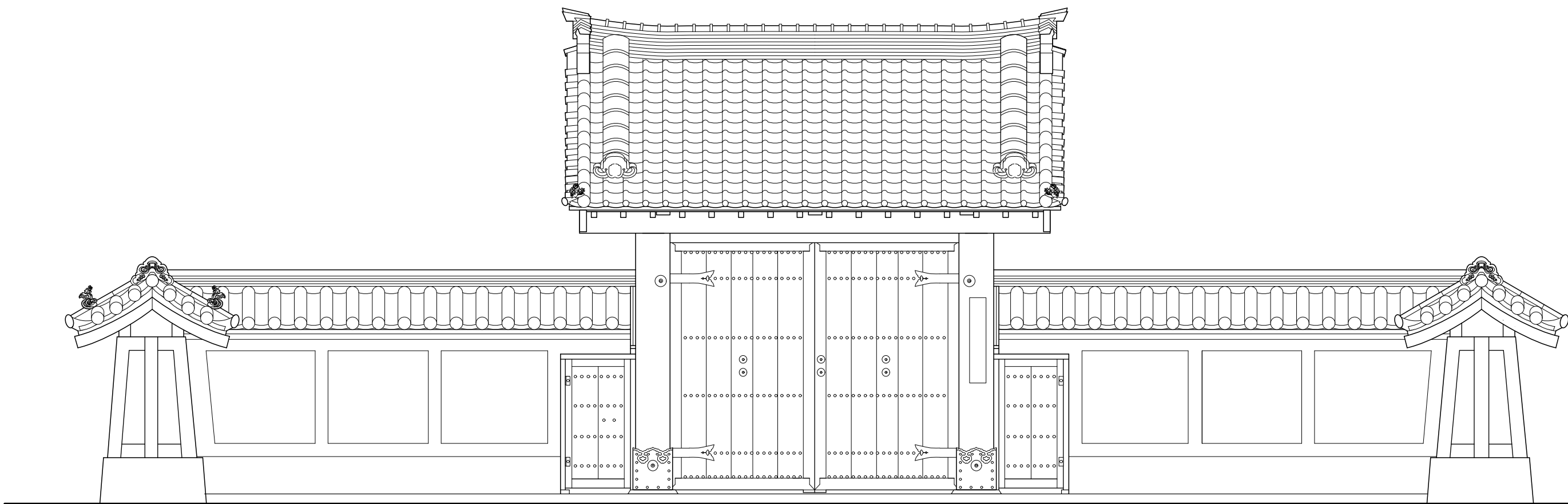


図 8-12 図書館積層書架と  
梁型



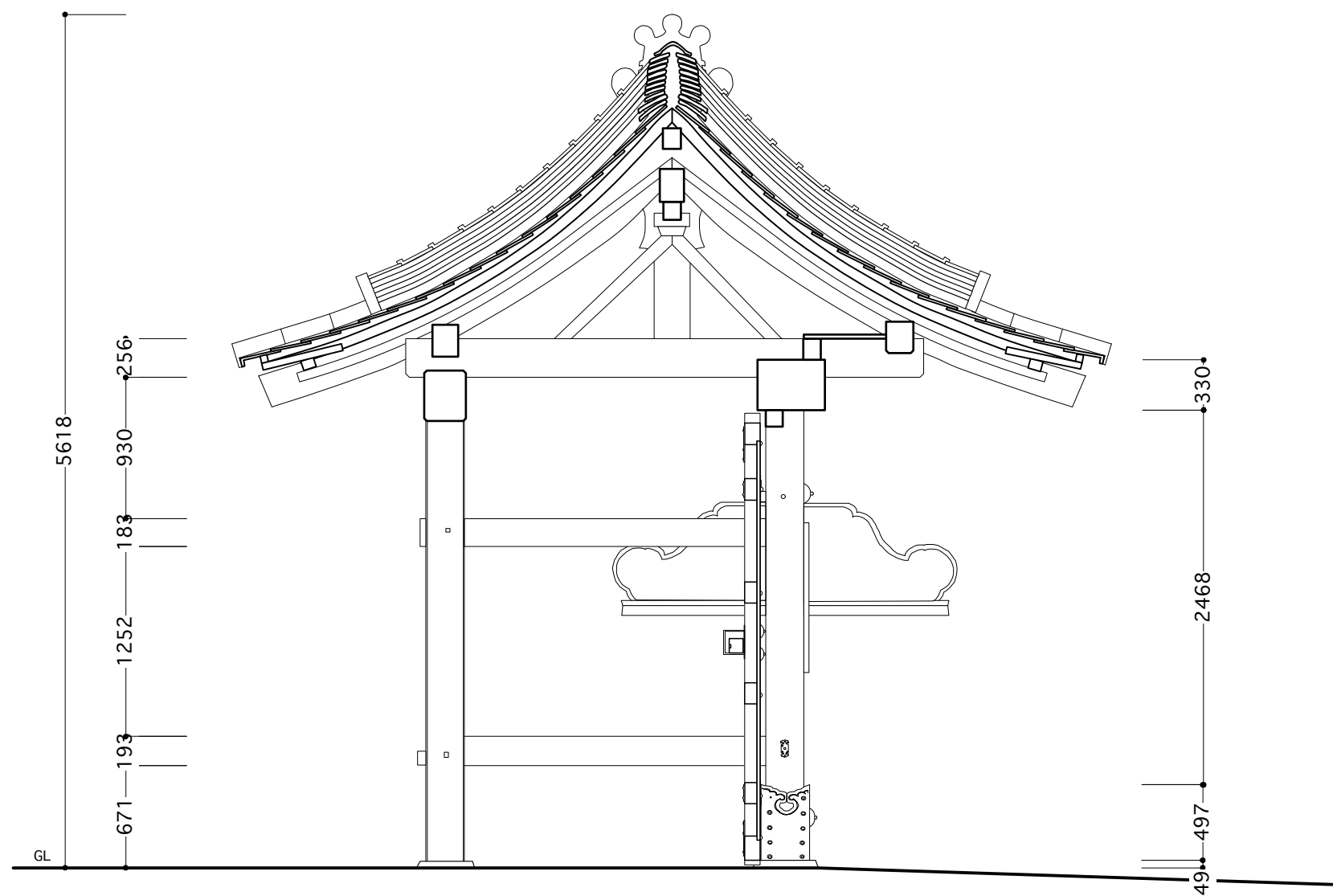
## 11.図面（実測図面）





家屋名	鴨沂高校 正門	図面No.	1/1	調査	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	M2 松崎 渚	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)
図面名	立面図	縮尺	1 : 50	作成	H 24 年 5 月 22 日		野帳担当者	B4 今井 隆平	

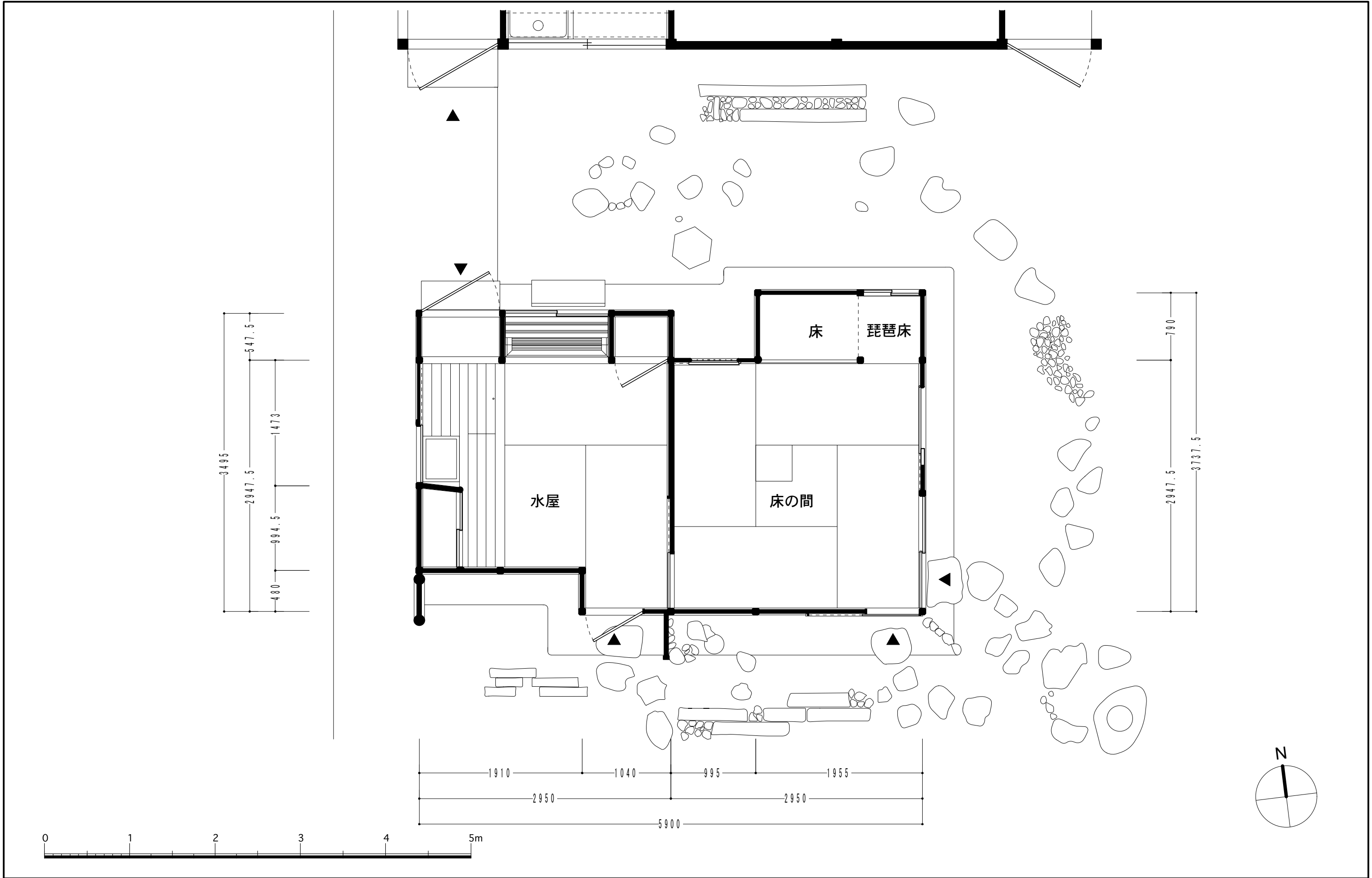





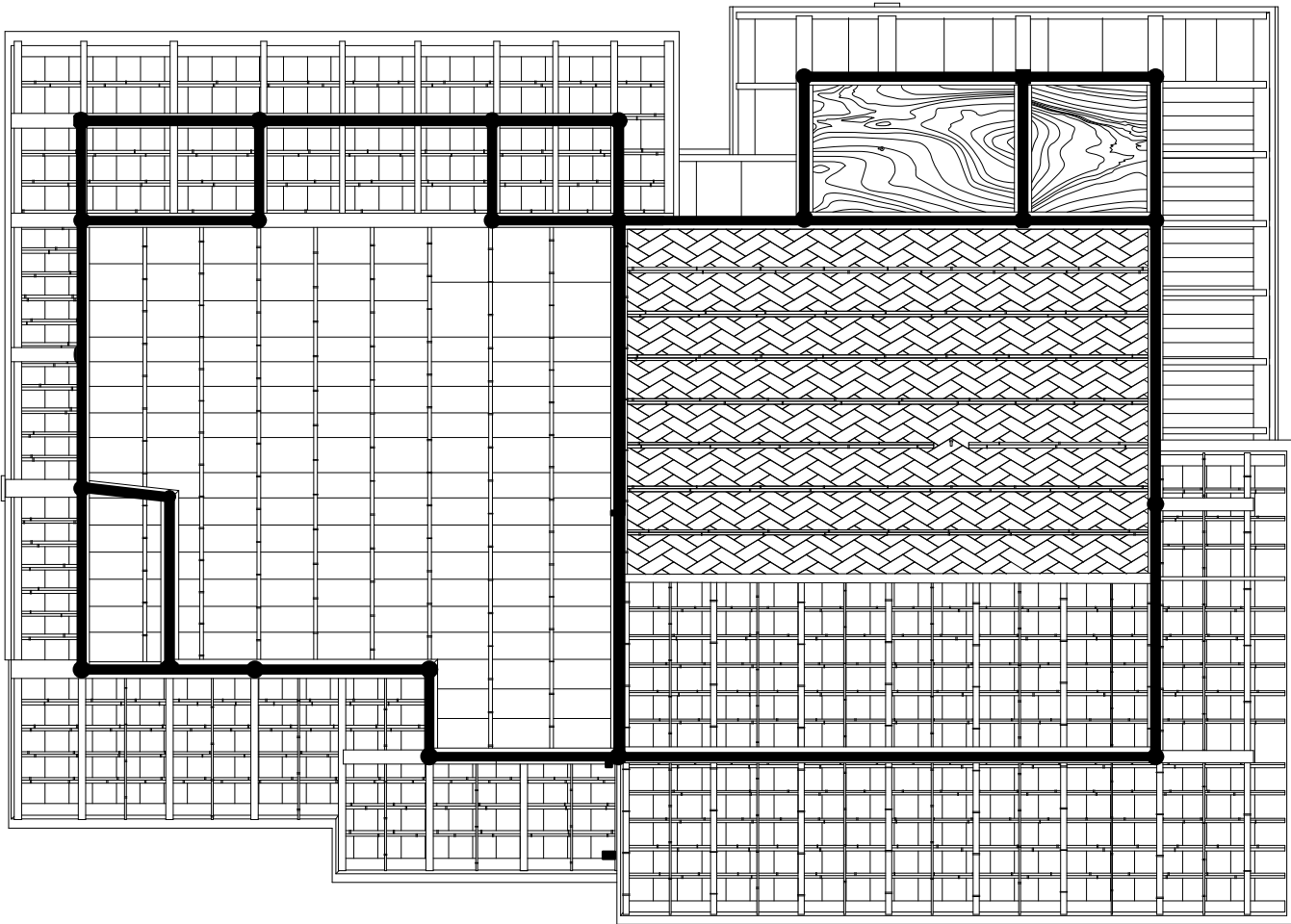
家屋名	鴨沂高校 正門	図面No.	1 / 1	調査	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	Ⅱ1 木口 なつみ	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)
図面名	断面図	縮尺	1 : 40	作成	H 24 年 5 月 22 日		野帳担当者	Ⅱ1 木口 なつみ	





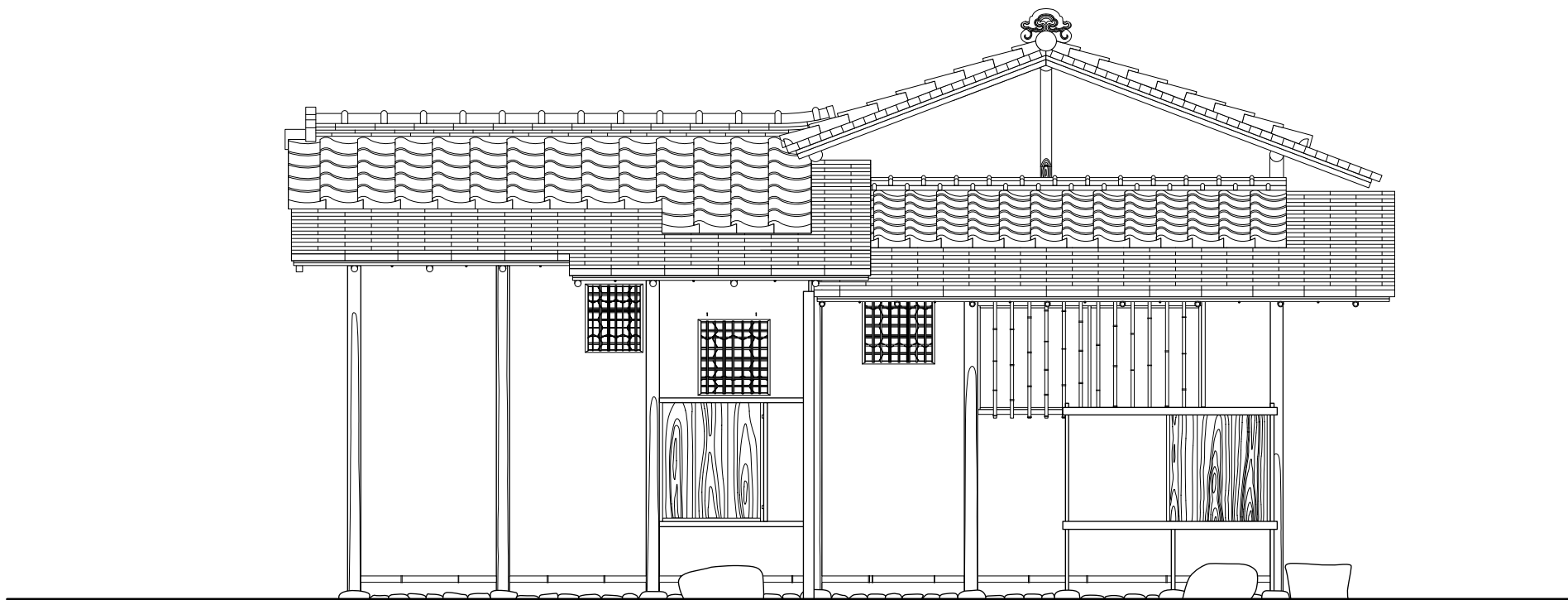


家屋名	鴨沂高校 茶室	図面No.	1 / 1	調査	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	Ⅱ1 小谷 由貴	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)	
				作成	H 24 年 5 月 22 日					
図面名	平面図	縮尺	1 : 40				野帳担当者	Ⅱ1 小谷 由貴		

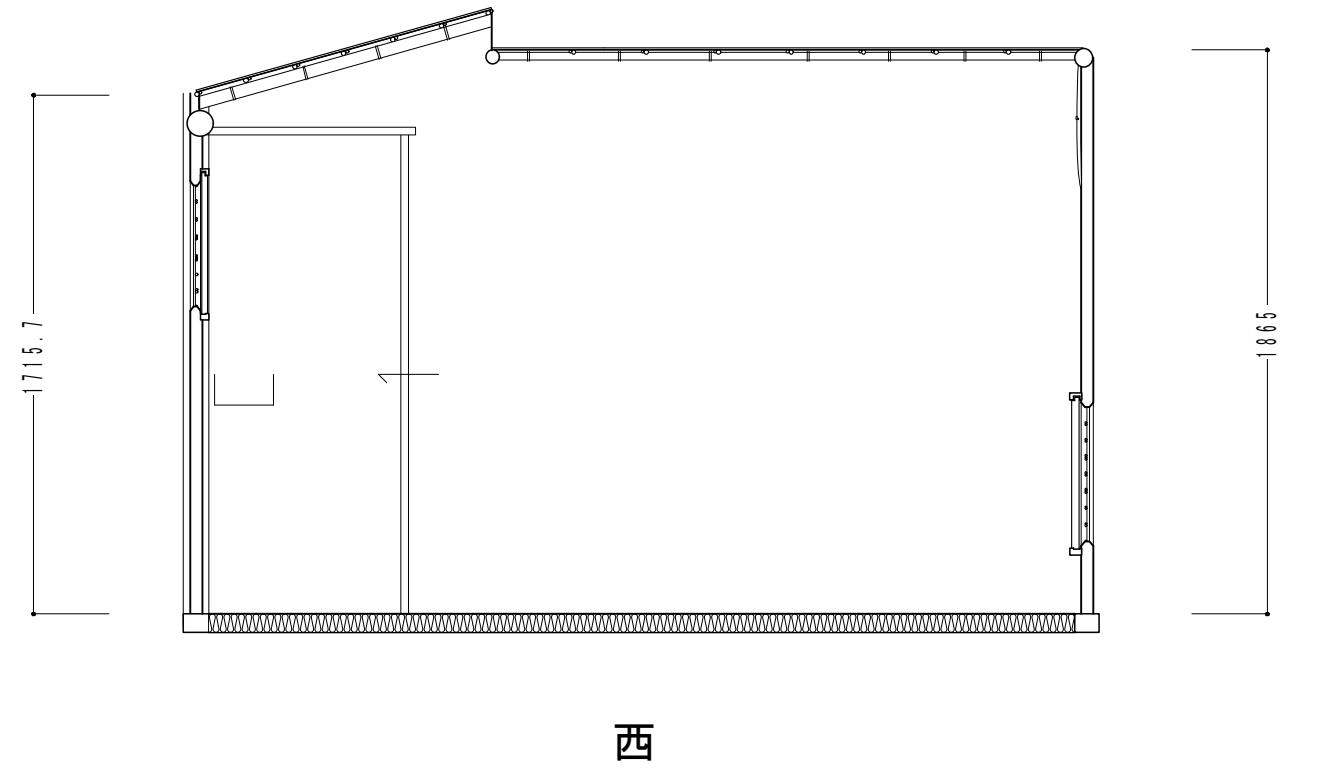
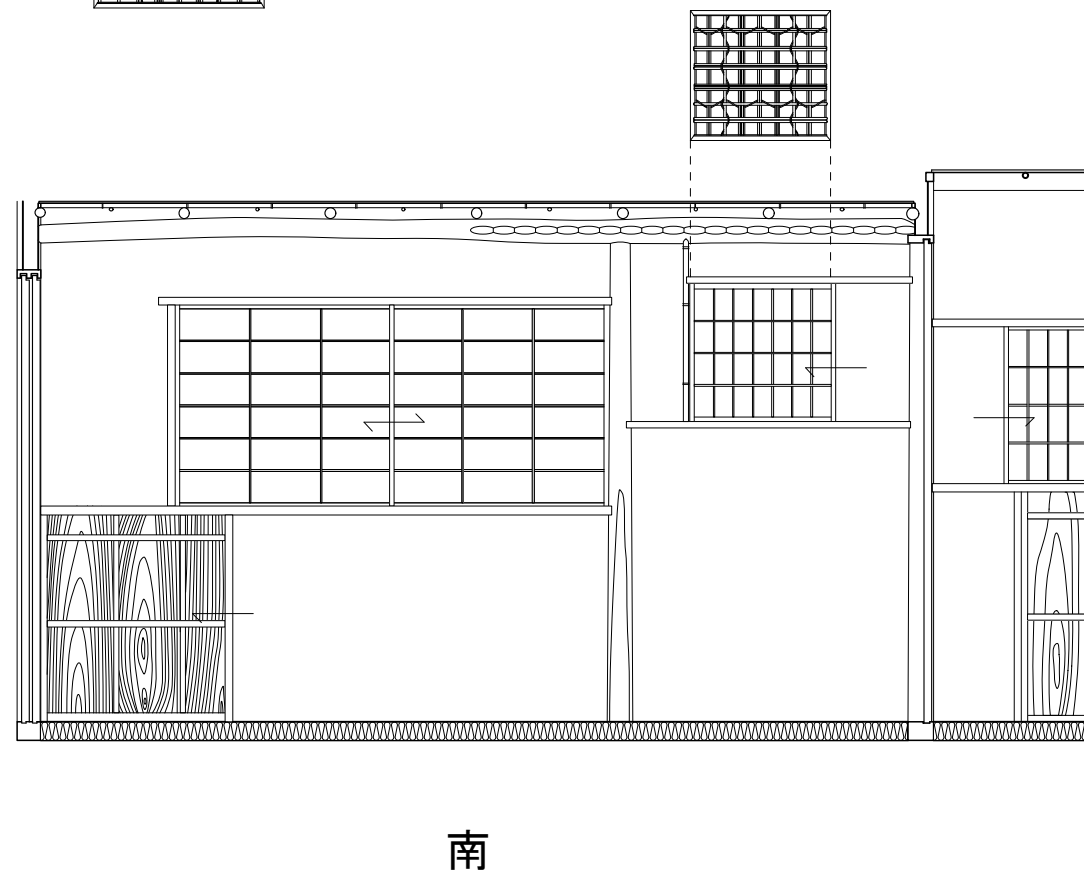
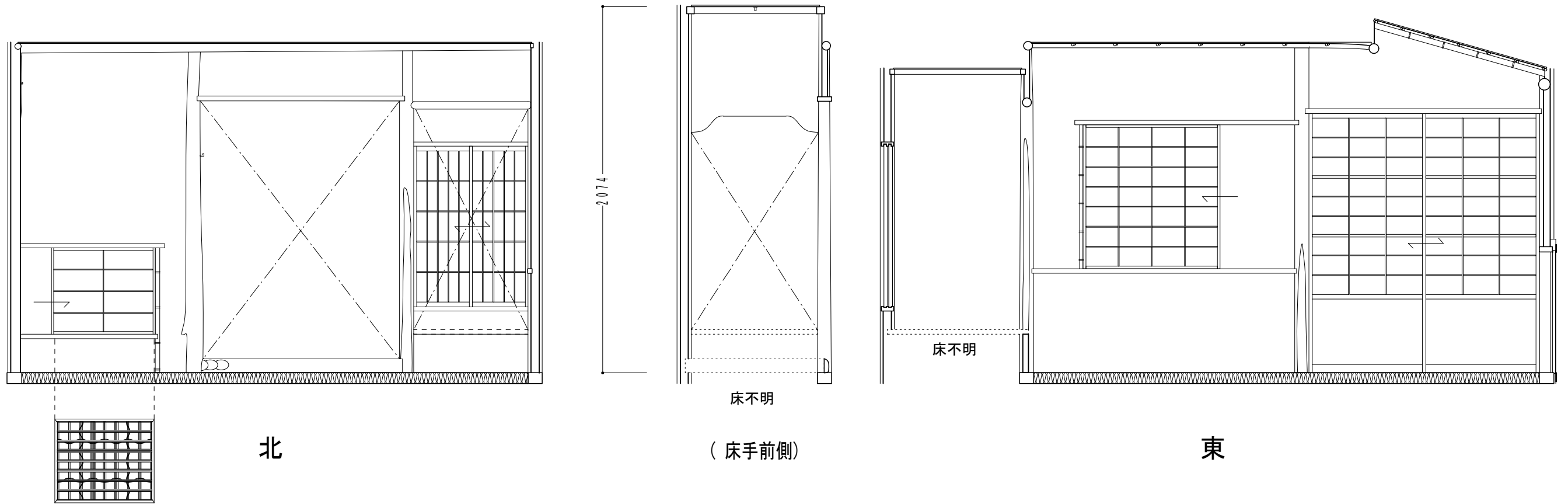



家屋名	鴨沂高校 茶室	図面No.	1/1	調査	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	Ⅰ 小谷 由貴	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)
図面名	天井伏図	縮尺	1 : 40	作成	H 24 年 5 月 22 日		野帳担当者	Ⅱ 檜垣 友映	



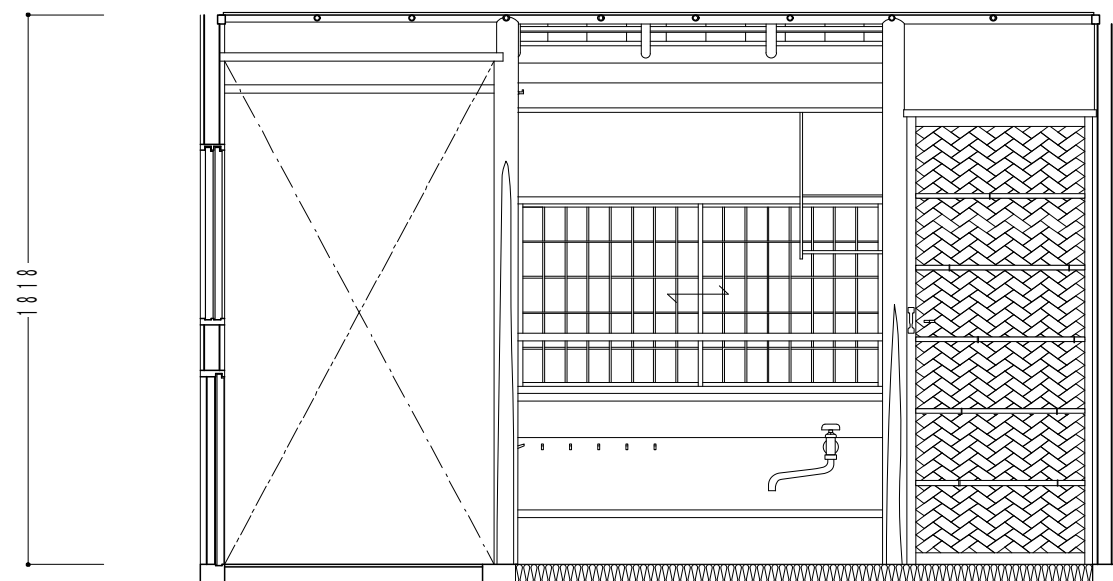


家屋名	鴨沂高校 茶室	図面No.	1 / 1	調査日	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	M 2 檜垣 友映	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)	
				作成	H 24 年 5 月 22 日			野帳担当者	M 2 檜垣 友映	
図面名	南立面図	縮尺	1 : 40							

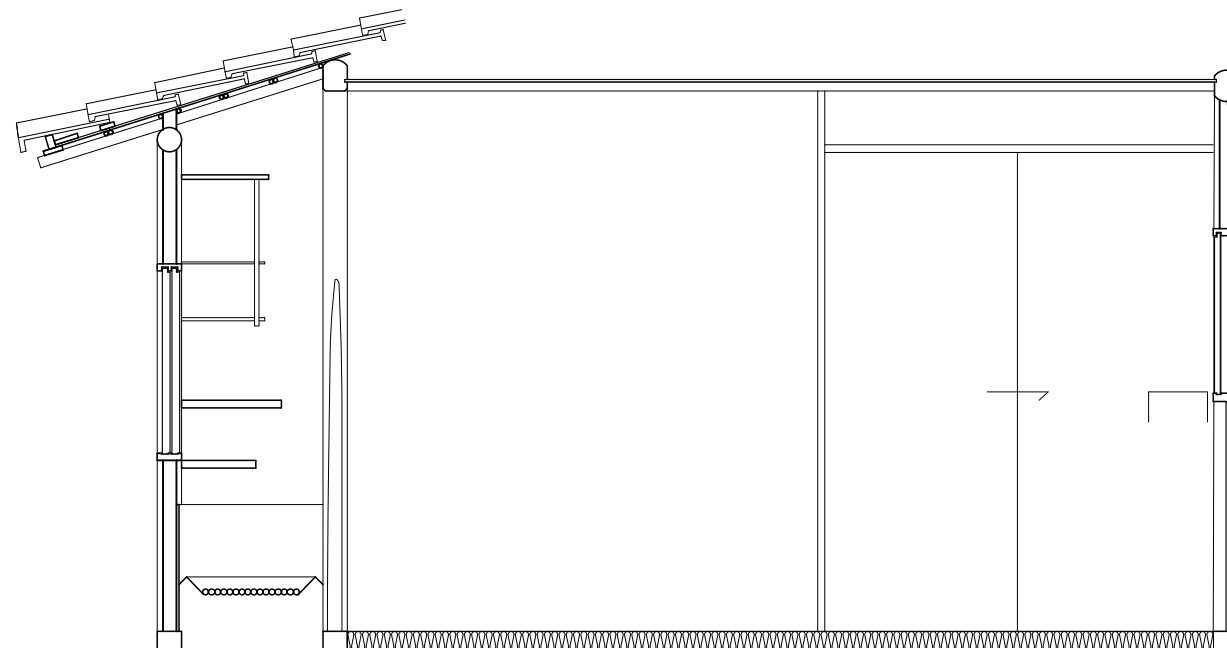


家屋名	鴨沂高校 茶室	図面No.	1 / 1	調査日 H 24 年 4 月 21・28 日		備考	製図担当者	M 2 渡邊 綾香	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)	
				作成 H 24 年 5 月 22 日						
図面名	床の間 展開図	縮尺	1 : 25				野帳担当者	M 1 宮下 浩		

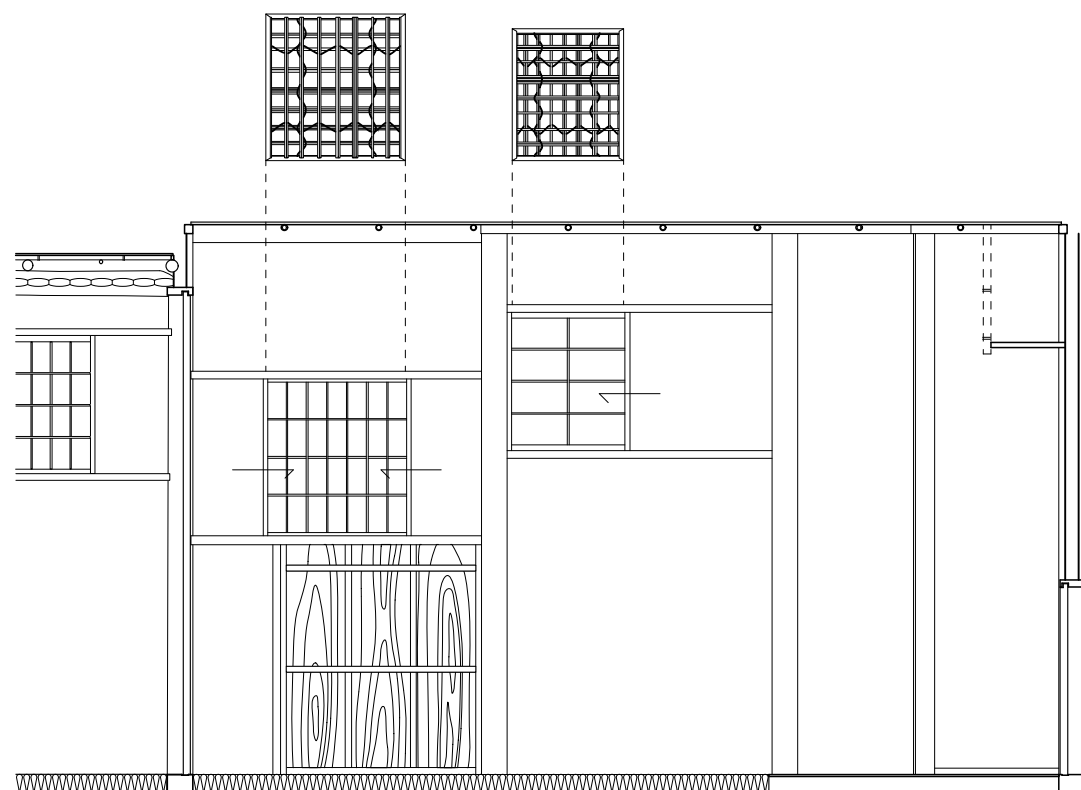




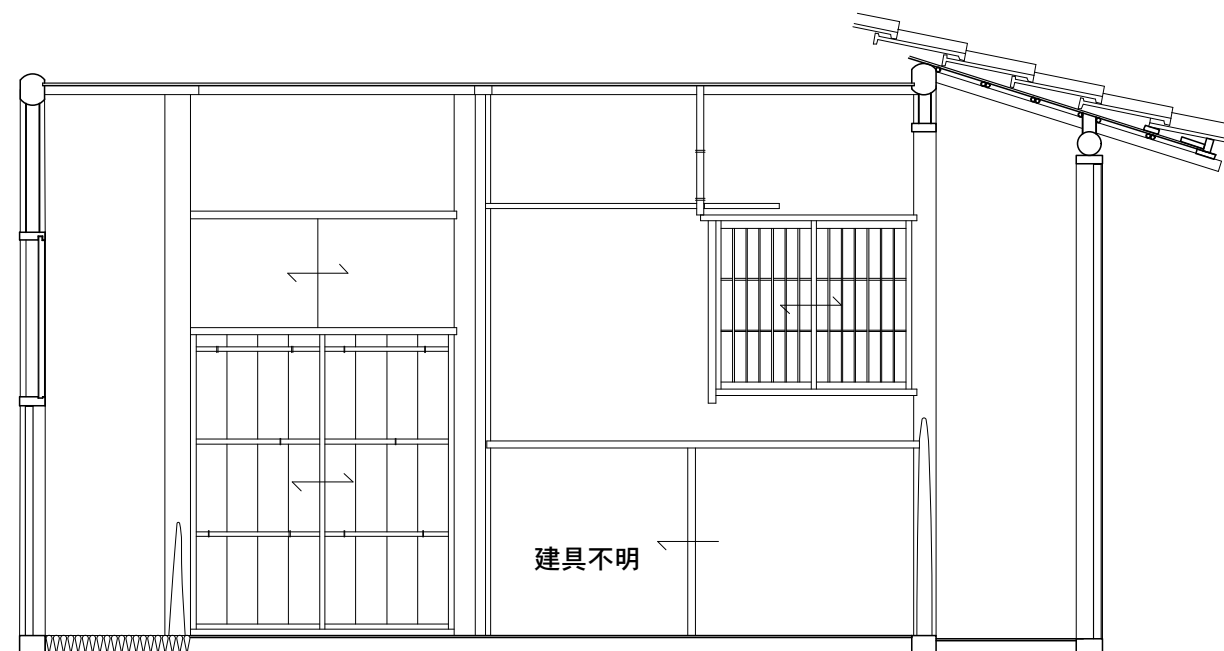
北



東




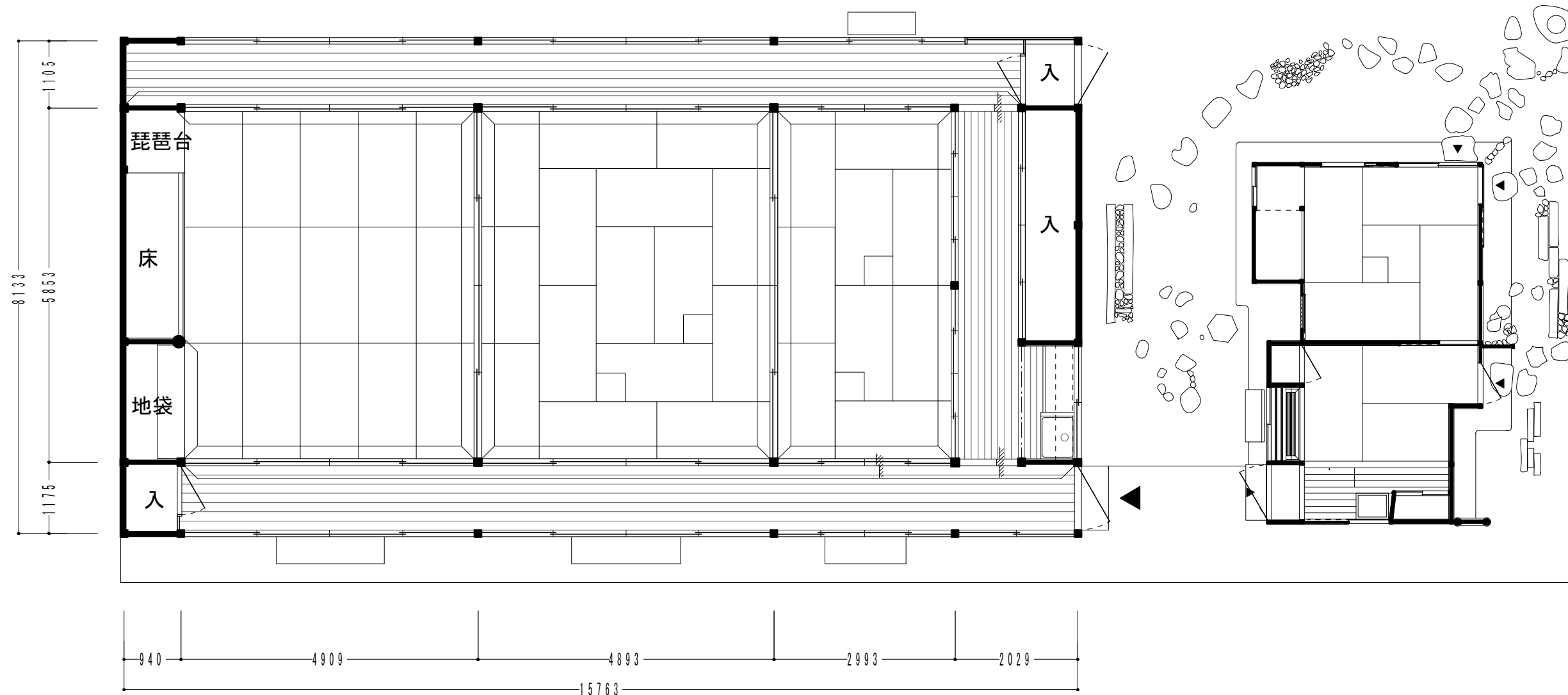
南



西

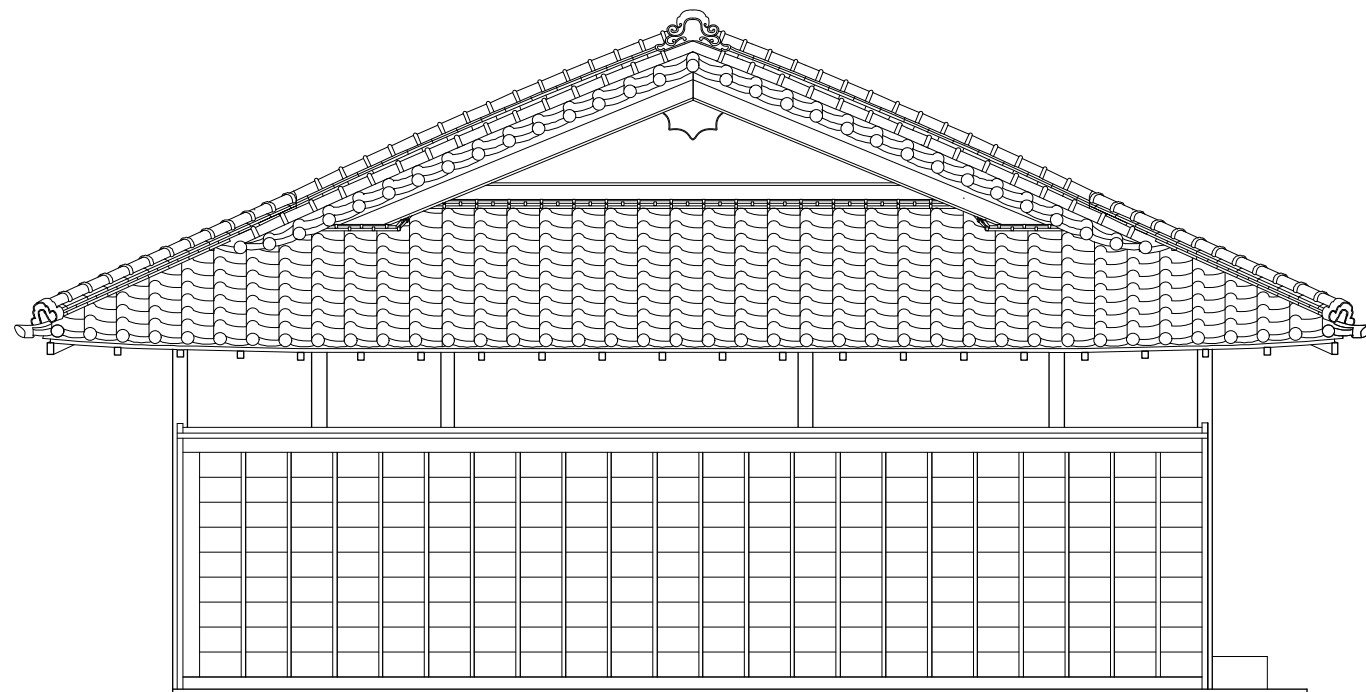


家屋名	鴨沂高校 茶室	図面No. 1/1	調査日	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	Ⅱ1 小谷 由貴	京都府立大学 史的住環境学研究室 (大場研究室)	
			作成	H 24 年 5 月 22 日					
図面名	水屋 展開図	縮尺 1 : 2 5				野帳担当者	研究生 林 井永 Ⅱ1 小谷 由貴		



家屋名	鴨沂高校 木造校舎	図面No.	1 / 1	調査	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	M1 宮下 浩	京都府立大学 史の住環境学研究室 (大場研究室)
図面名	平面図	縮尺	1 : 80	作成	H 24 年 5 月 22 日		野帳担当者	M1 宮下 浩 研究生 陳 緯玲	

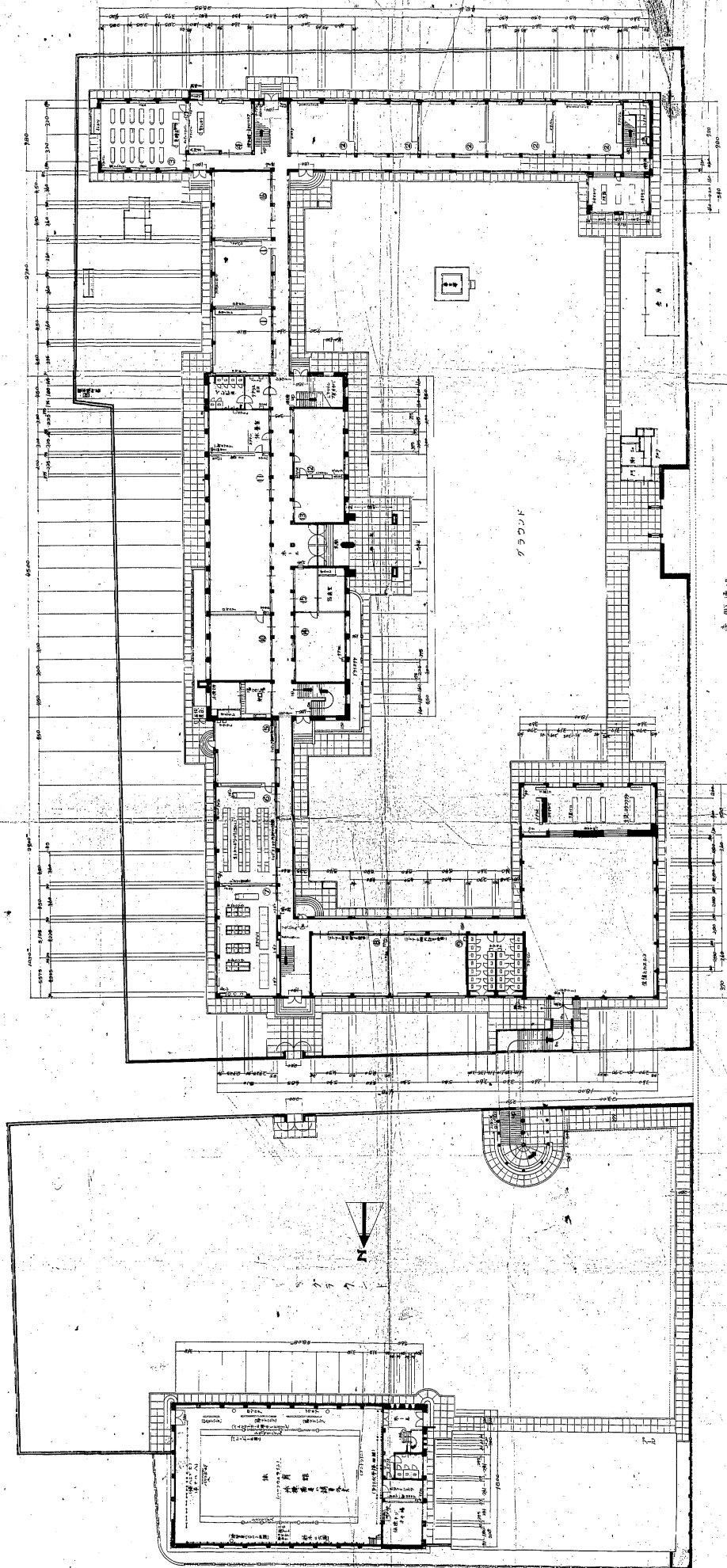




家屋名	鴨沂高校 木造校舎	図面No. 1 / 1	調査日	H 24 年 4 月 21・28 日	備考	製図担当者	研究生 陳 緯玲	京都府立大学	史的住環境学研究室 (太場研究室)	
			作成	H 24 年 5 月 22 日			M1 宮下 浩(修正)			
図面名	北立面図 (側面)	縮尺	1 : 60			野帳担当者	研究生 陳 緯玲			



## 12.図面（建築当初）

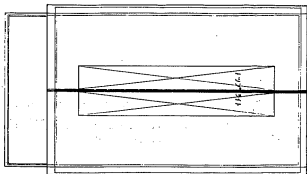


分 1/200

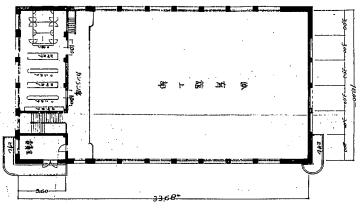
① 普通教室	⑤ 試食室	⑨ 第二洋式機械教室	⑬ 廊下
② 普通教室	⑥ 調理室	⑩ 機械教室	⑭ 廊下
③ 普通教室	⑦ 家庭科教室	⑪ 機械教室	⑮ 廊下
④ 廊下	⑧ 洋式機械教室	⑫ 校舎	⑯ 廊下

Gymnasium  
1st stage higher school  
1:200





体育馆平面  
1:300



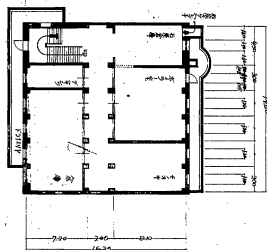
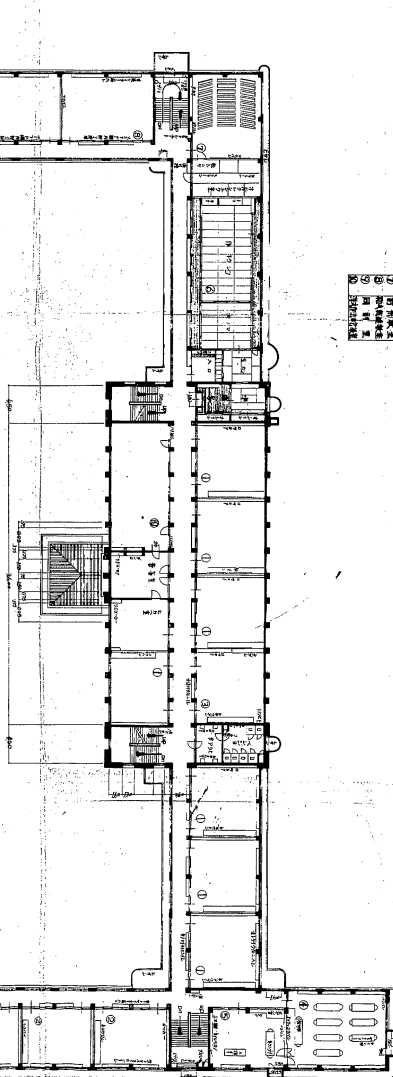
体育馆二階平面  
1:200

Gymnasium  
1st floor plan  
no. 2.

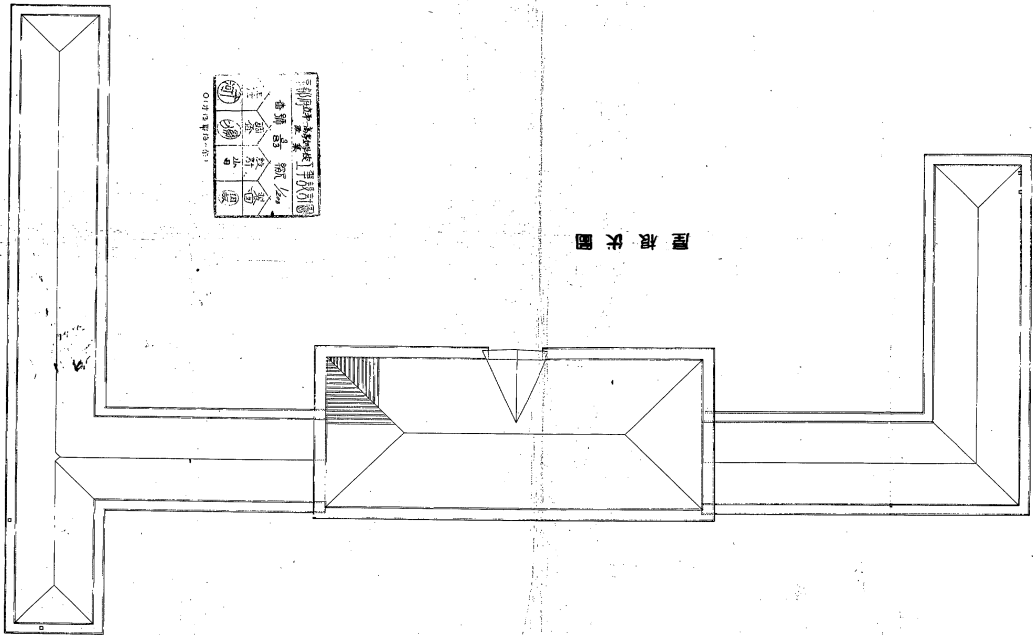


二階平面  
1:200

- ① 體育館
- ② 體育館
- ③ 體育館
- ④ 體育館
- ⑤ 體育館
- ⑥ 體育館
- ⑦ 體育館
- ⑧ 體育館
- ⑨ 體育館
- ⑩ 體育館
- ⑪ 體育館
- ⑫ 體育館
- ⑬ 體育館
- ⑭ 體育館
- ⑮ 體育館
- ⑯ 體育館
- ⑰ 體育館
- ⑱ 體育館
- ⑲ 體育館
- ⑳ 體育館
- ㉑ 體育館
- ㉒ 體育館
- ㉓ 體育館
- ㉔ 體育館
- ㉕ 體育館
- ㉖ 體育館
- ㉗ 體育館
- ㉘ 體育館
- ㉙ 體育館
- ㉚ 體育館
- ㉛ 體育館
- ㉜ 體育館
- ㉝ 體育館
- ㉞ 體育館
- ㉟ 體育館
- ㊱ 體育館
- ㊲ 體育館
- ㊳ 體育館
- ㊴ 體育館
- ㊵ 體育館
- ㊶ 體育館
- ㊷ 體育館
- ㊸ 體育館
- ㊹ 體育館
- ㊺ 體育館
- ㊻ 體育館
- ㊼ 體育館
- ㊽ 體育館
- ㊾ 體育館
- ㊿ 體育館

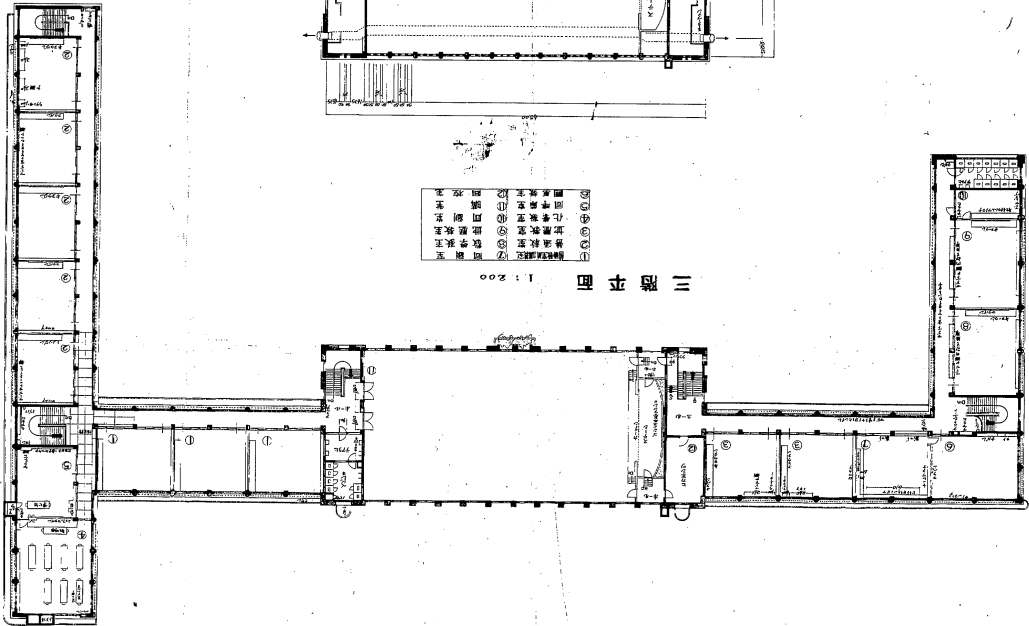
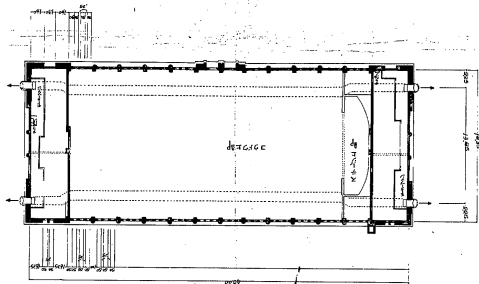


地階平面  
1:200



屋頂平面

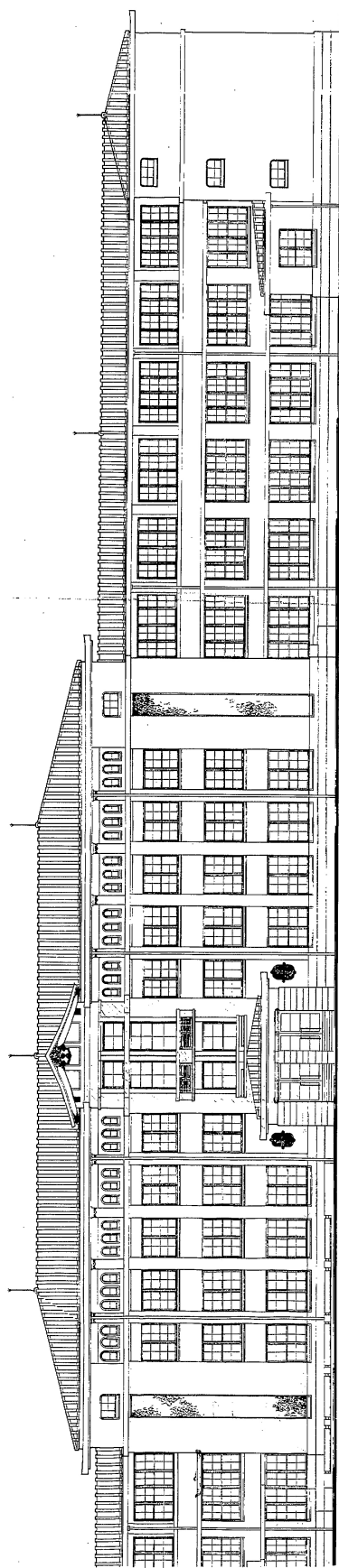
三階上部



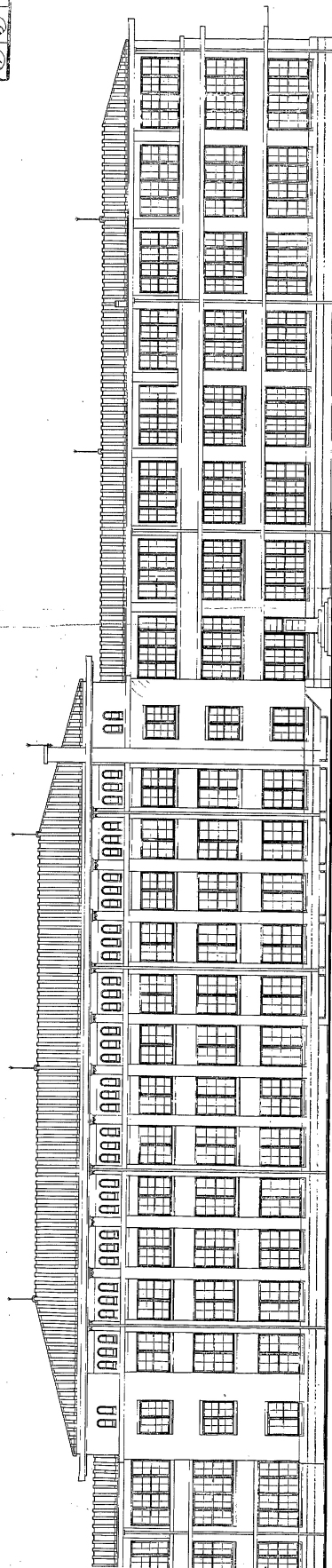
三階平面

- 1:200
- ① 圖書室
  - ② 圖書室
  - ③ 圖書室
  - ④ 圖書室
  - ⑤ 圖書室
  - ⑥ 圖書室
  - ⑦ 圖書室
  - ⑧ 圖書室
  - ⑨ 圖書室
  - ⑩ 圖書室
  - ⑪ 圖書室
  - ⑫ 圖書室
  - ⑬ 圖書室
  - ⑭ 圖書室
  - ⑮ 圖書室
  - ⑯ 圖書室
  - ⑰ 圖書室
  - ⑱ 圖書室
  - ⑲ 圖書室
  - ⑳ 圖書室
  - ㉑ 圖書室
  - ㉒ 圖書室
  - ㉓ 圖書室
  - ㉔ 圖書室
  - ㉕ 圖書室
  - ㉖ 圖書室
  - ㉗ 圖書室
  - ㉘ 圖書室
  - ㉙ 圖書室
  - ㉚ 圖書室
  - ㉛ 圖書室
  - ㉜ 圖書室
  - ㉝ 圖書室
  - ㉞ 圖書室
  - ㉟ 圖書室
  - ㊱ 圖書室
  - ㊲ 圖書室
  - ㊳ 圖書室
  - ㊴ 圖書室
  - ㊵ 圖書室
  - ㊶ 圖書室
  - ㊷ 圖書室
  - ㊸ 圖書室
  - ㊹ 圖書室
  - ㊺ 圖書室
  - ㊻ 圖書室
  - ㊼ 圖書室
  - ㊽ 圖書室
  - ㊾ 圖書室
  - ㊿ 圖書室

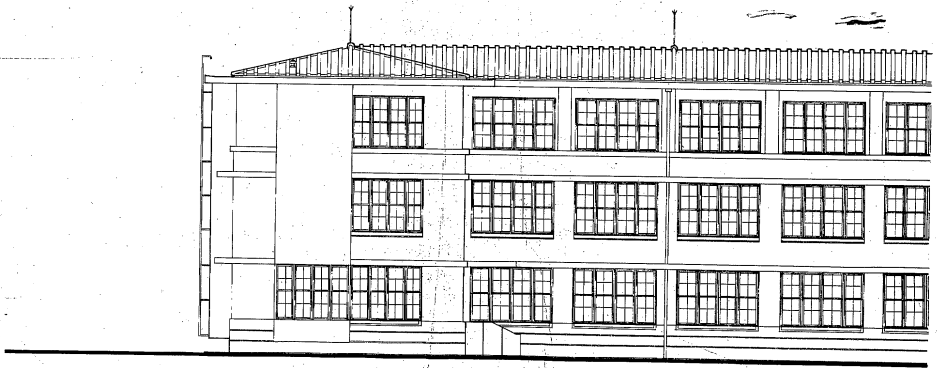
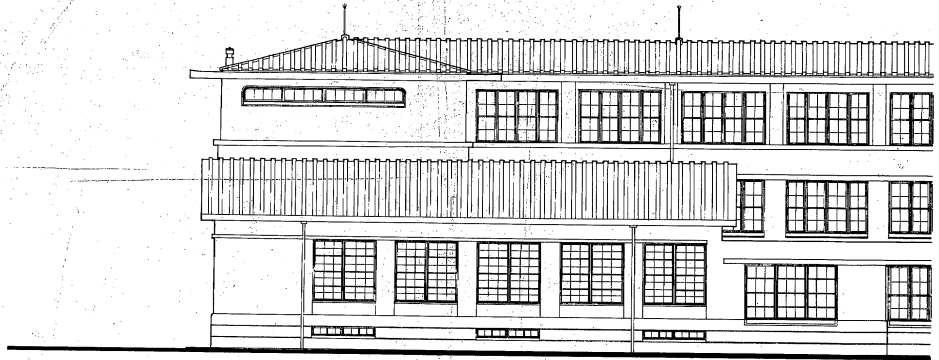


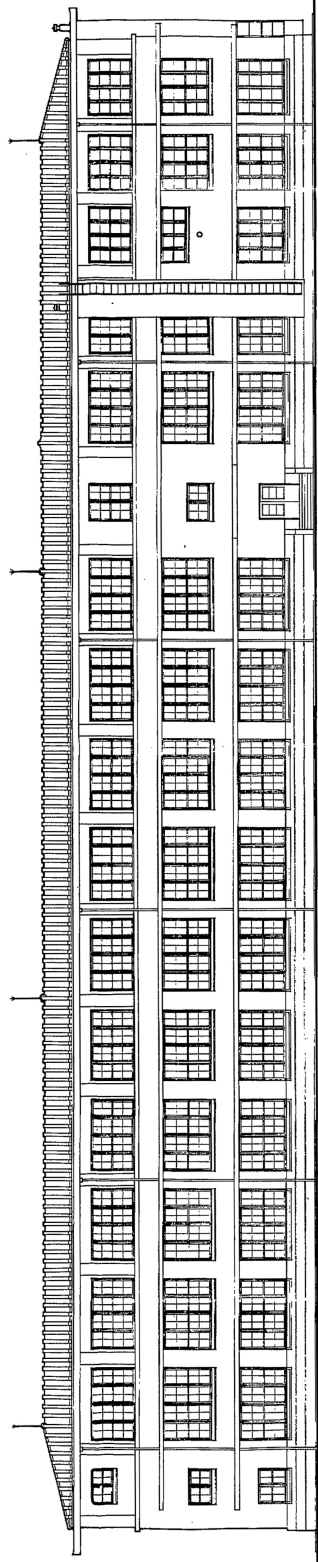


西面立面图 建筑总图卷一



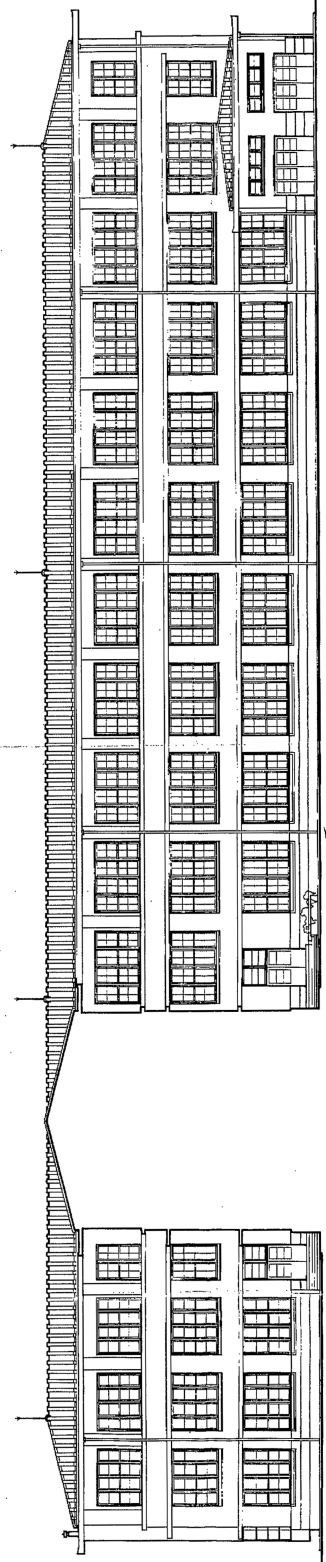
东面立面图 建筑总图卷一





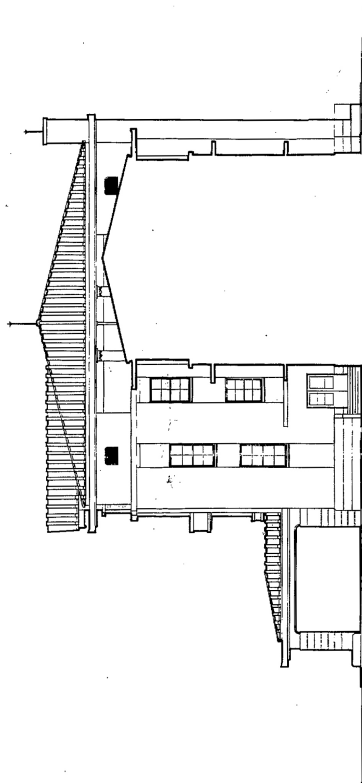
本館以南教室南面圖

繪人黃允之

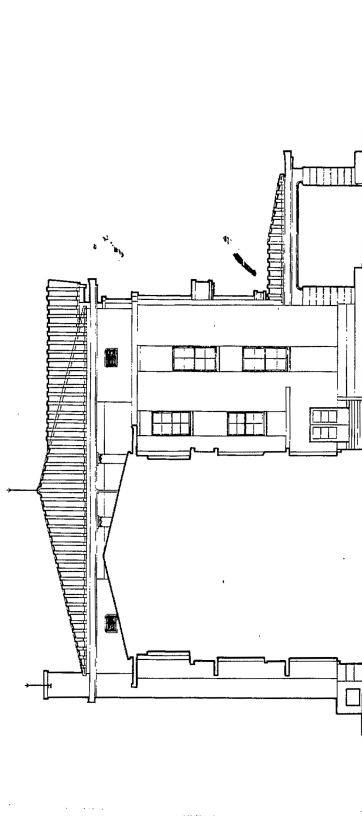


本館以南教室北面圖

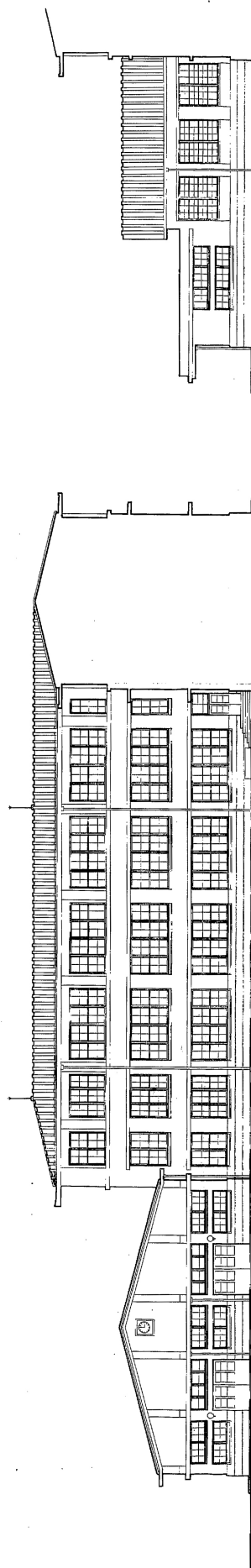
繪人黃允之



本館正面圖  
總尺五分之三



本館背面圖  
總尺五分之三



本館側面圖  
總尺五分之三

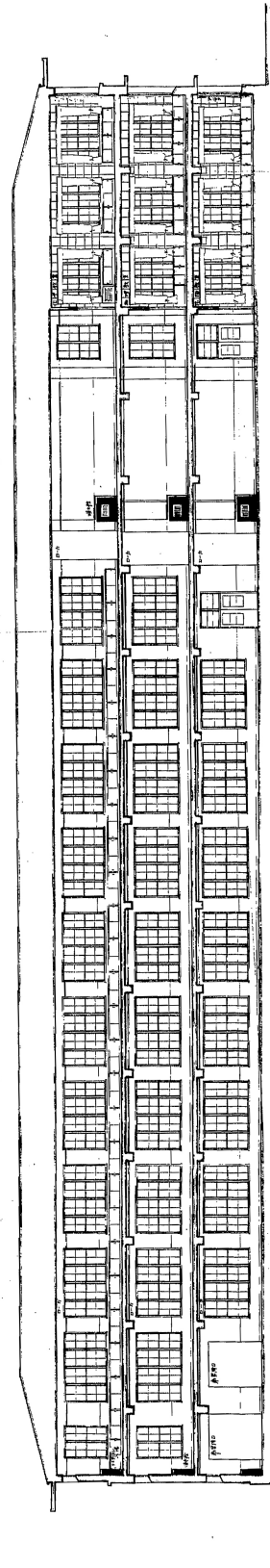


生徒控所東面圖  
總尺五分之三



本館 圖書館主縱斷面圖

100 : 1



左翼 教室縱斷面圖

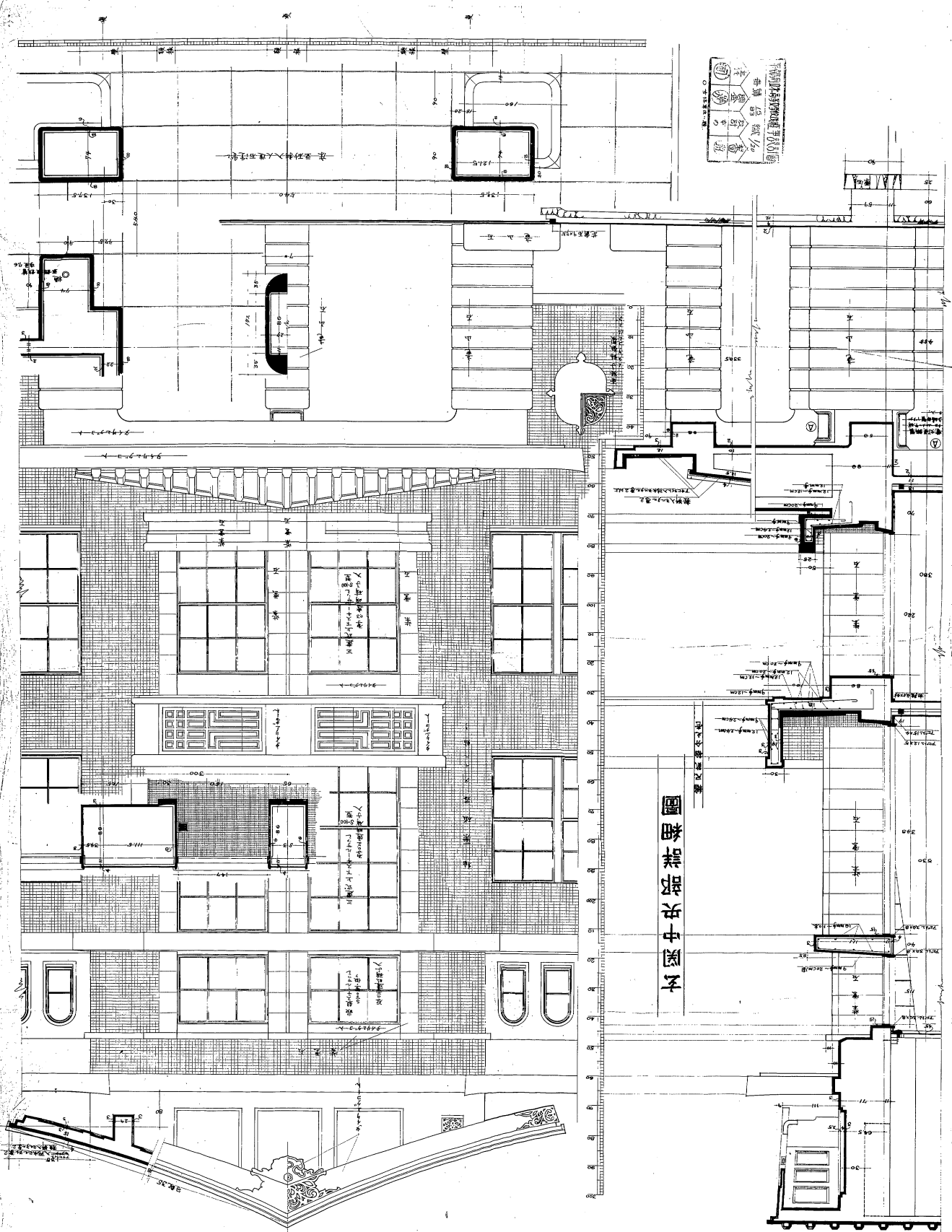
100 : 1



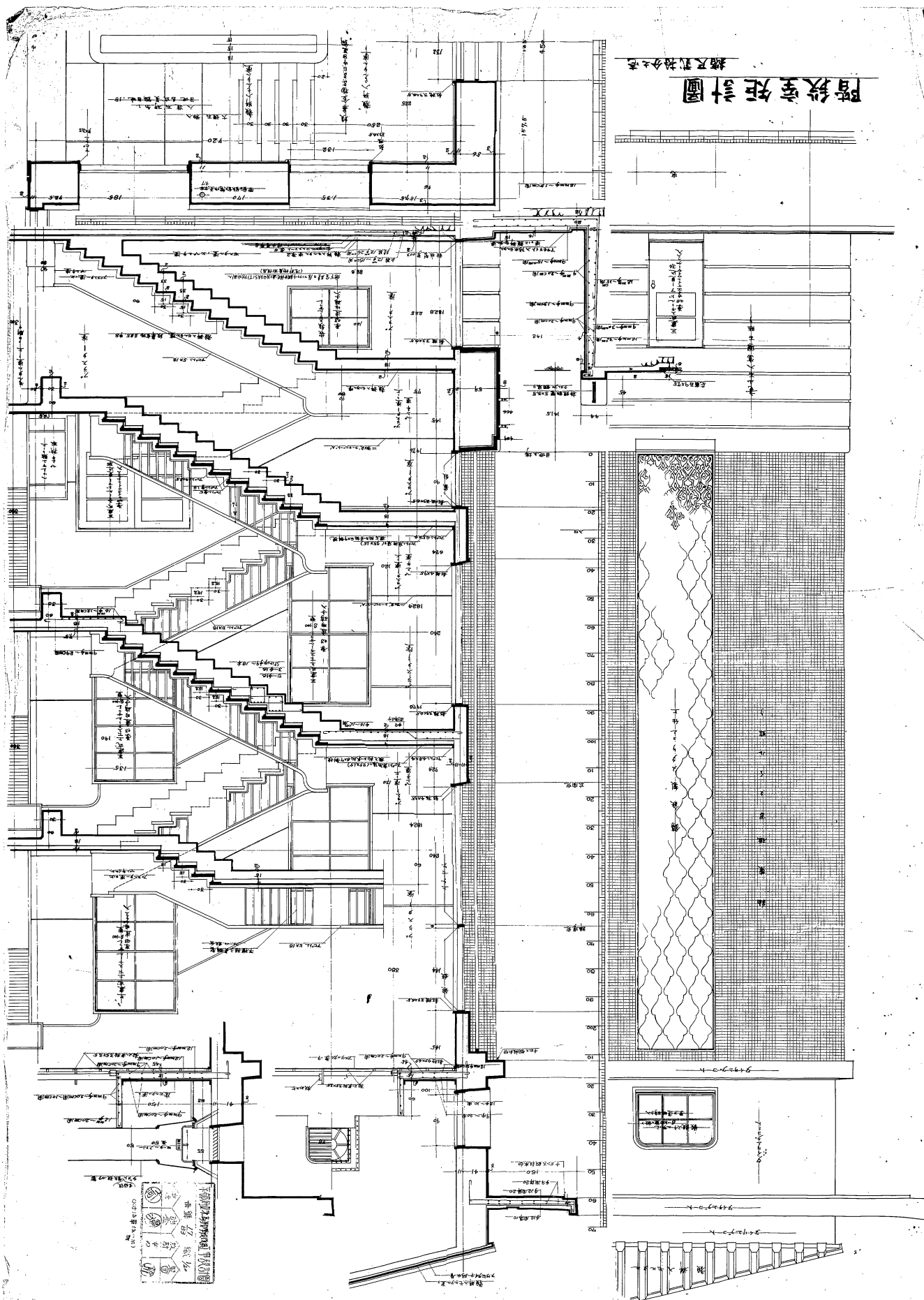


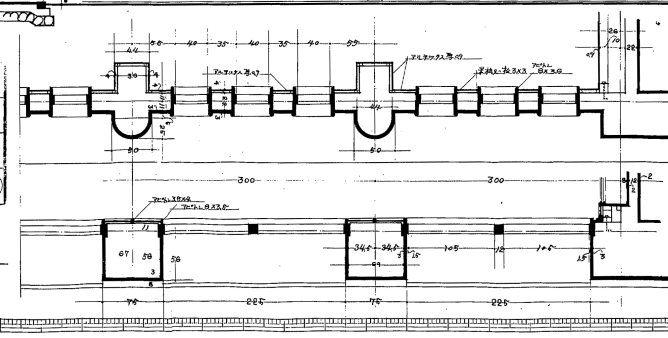
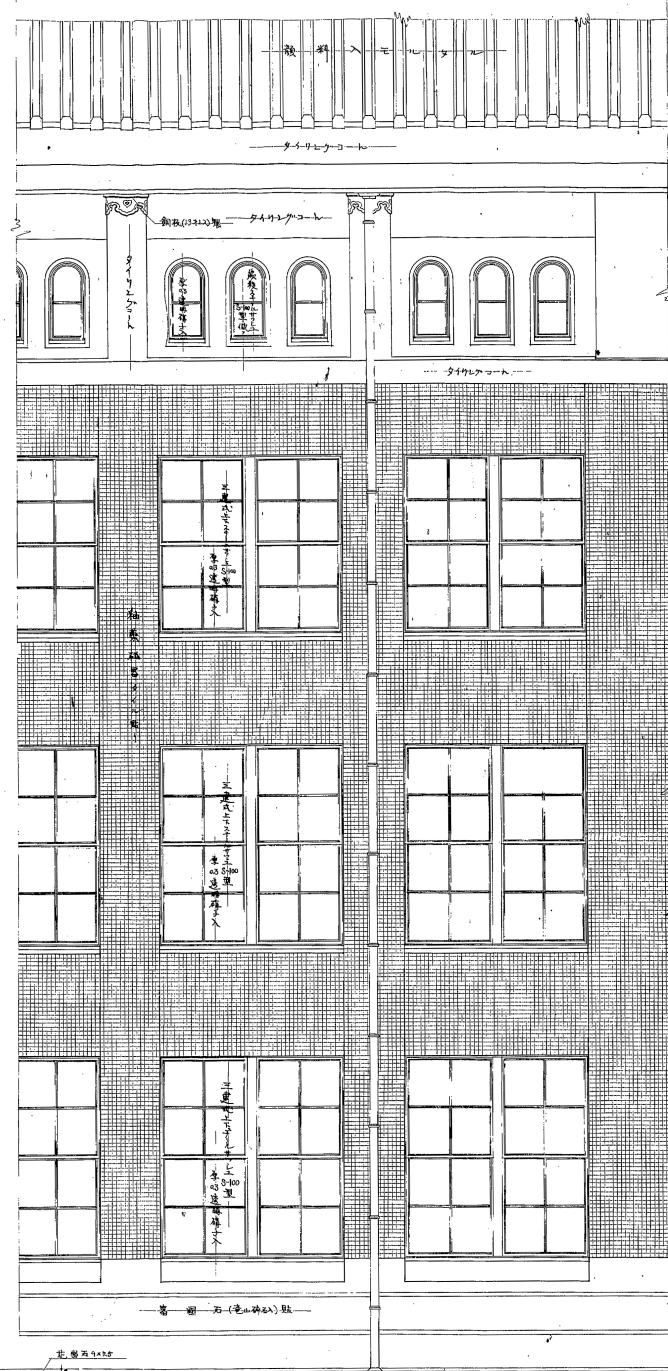
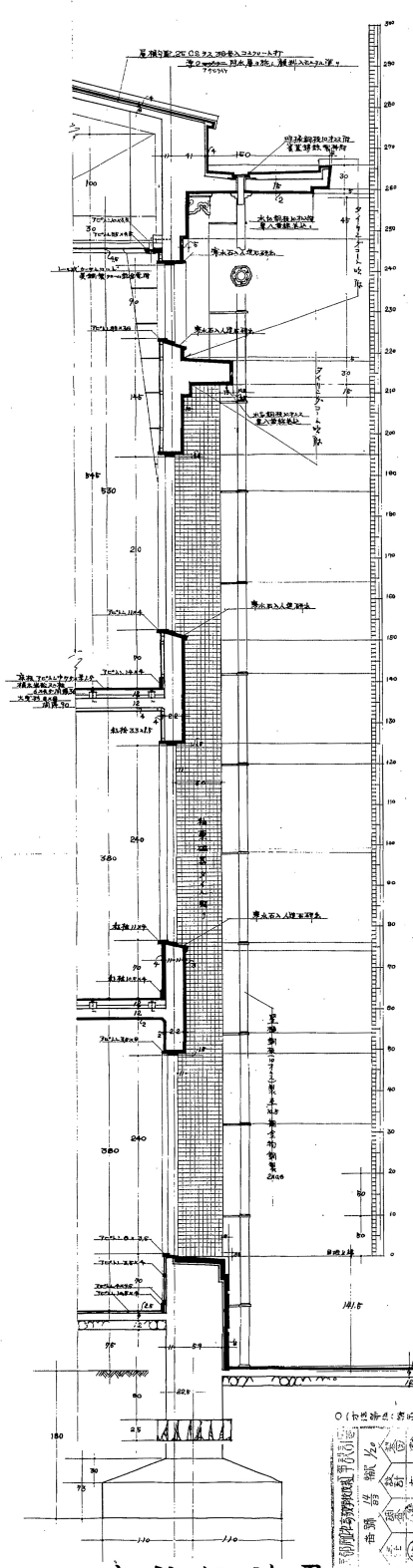
比例 1:100  
 圖名 中央郵局  
 設計 劉國治  
 繪圖 劉國治  
 日期 1934.10.10

中央郵局詳細圖



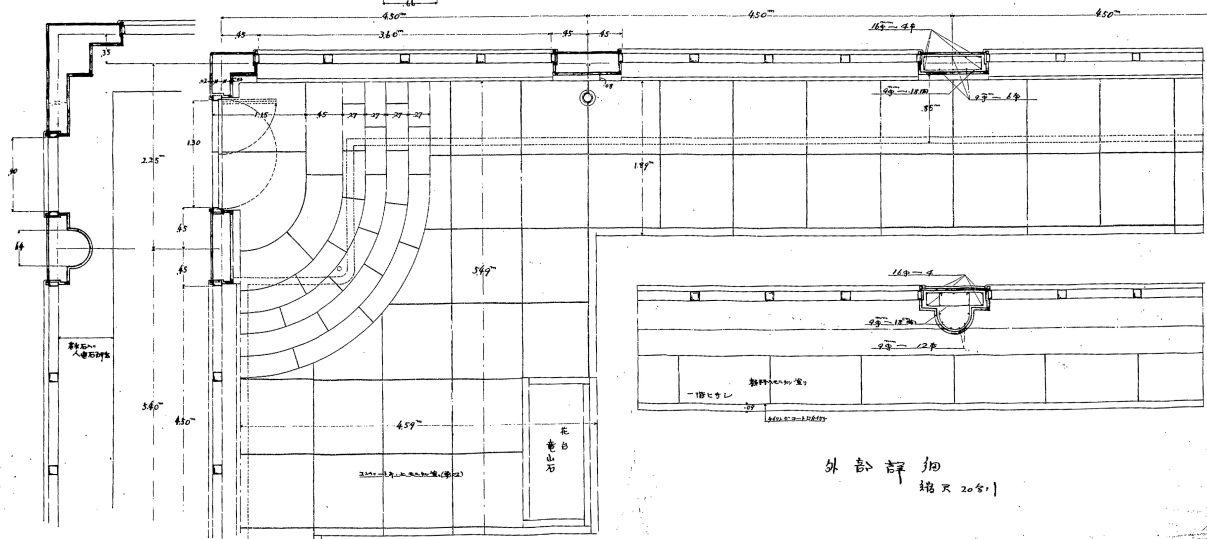
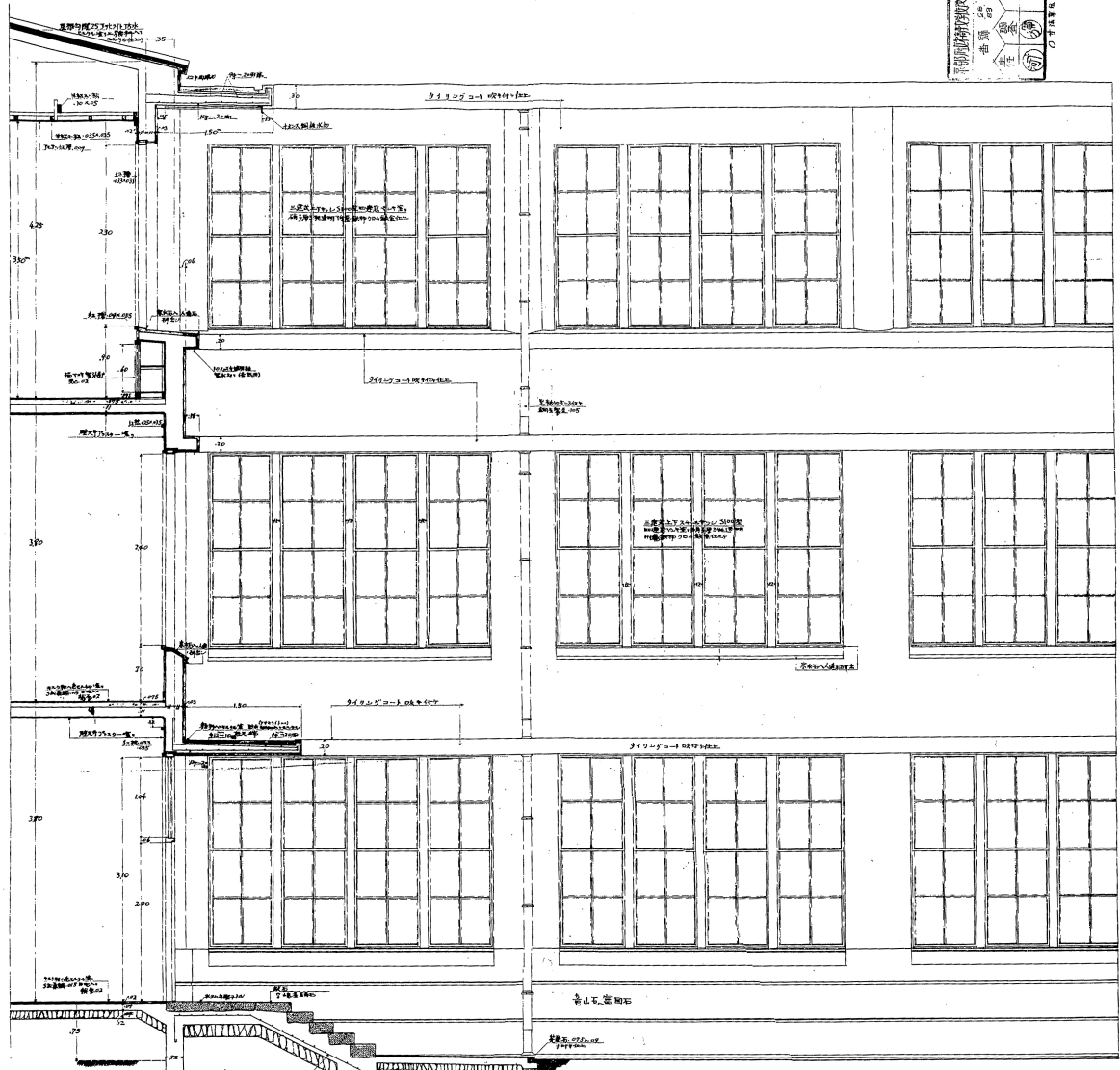
縮尺貳拾分之壹



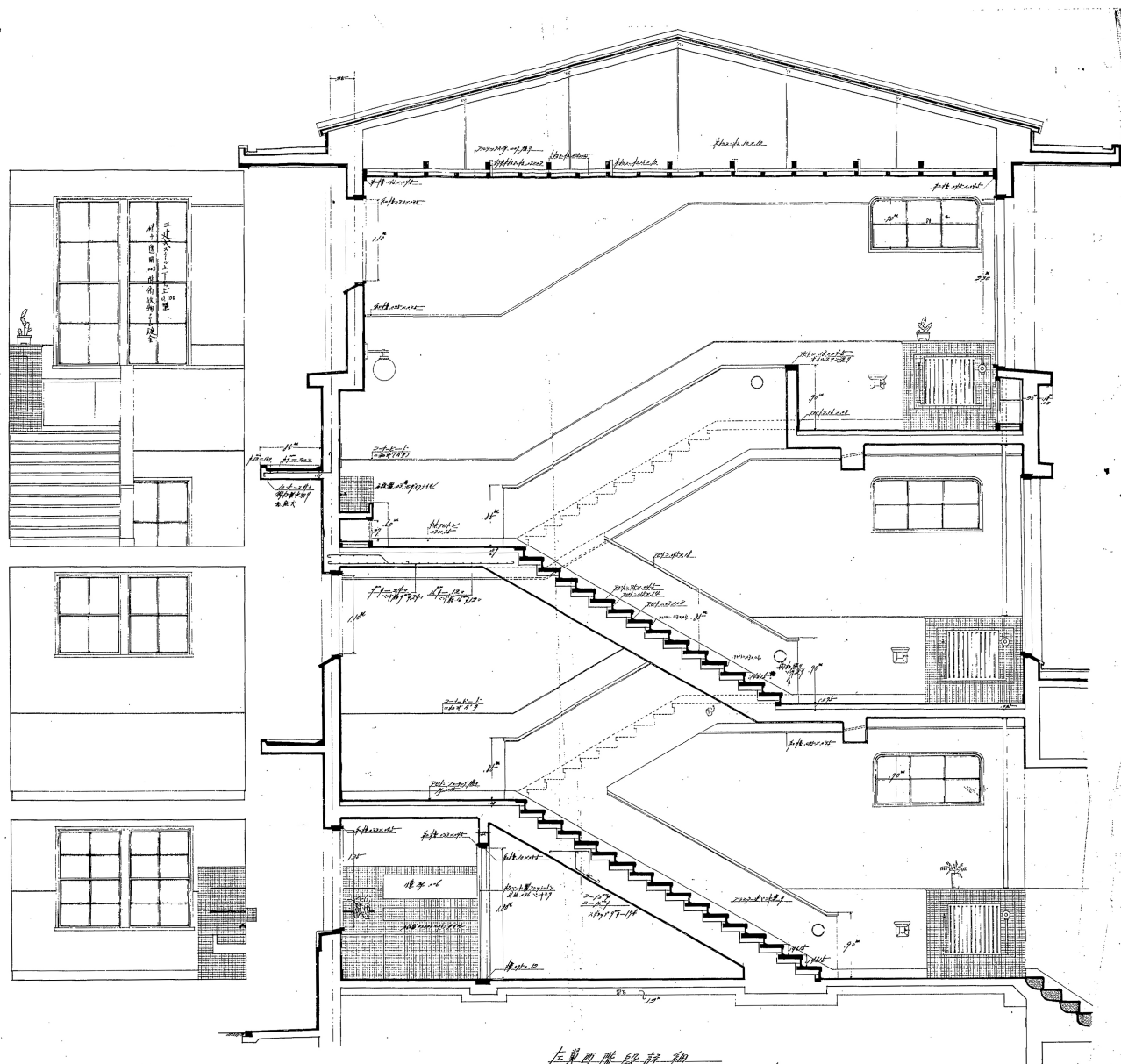


本館矩計圖

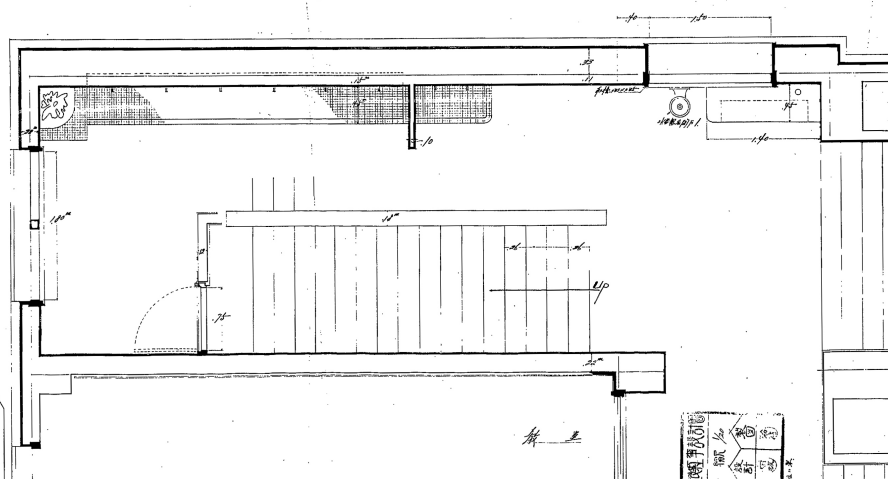
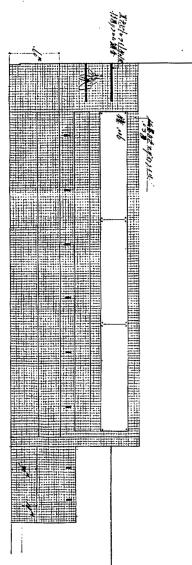
縮尺貳拾分之二



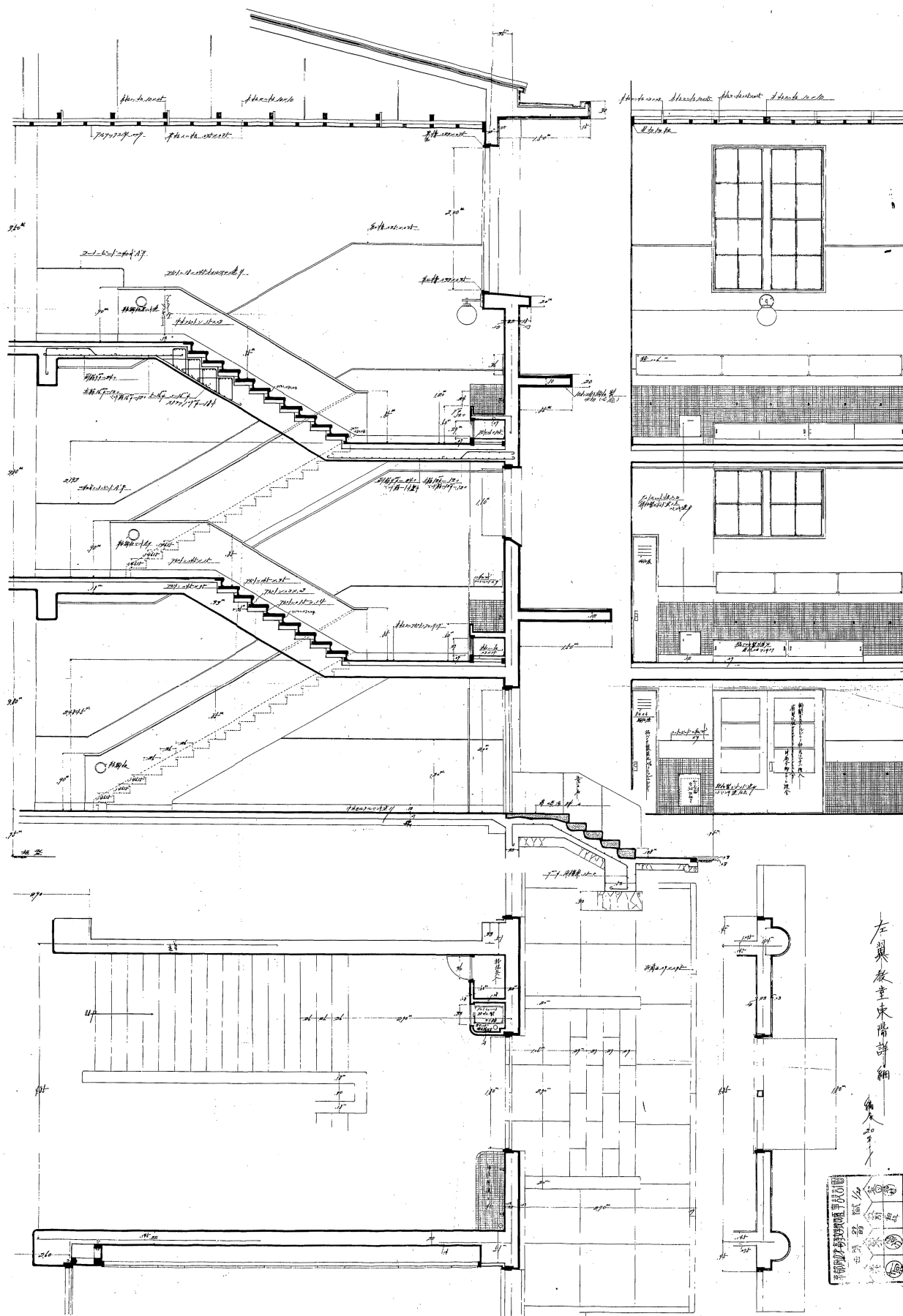
外部詳細  
縮尺 20分1

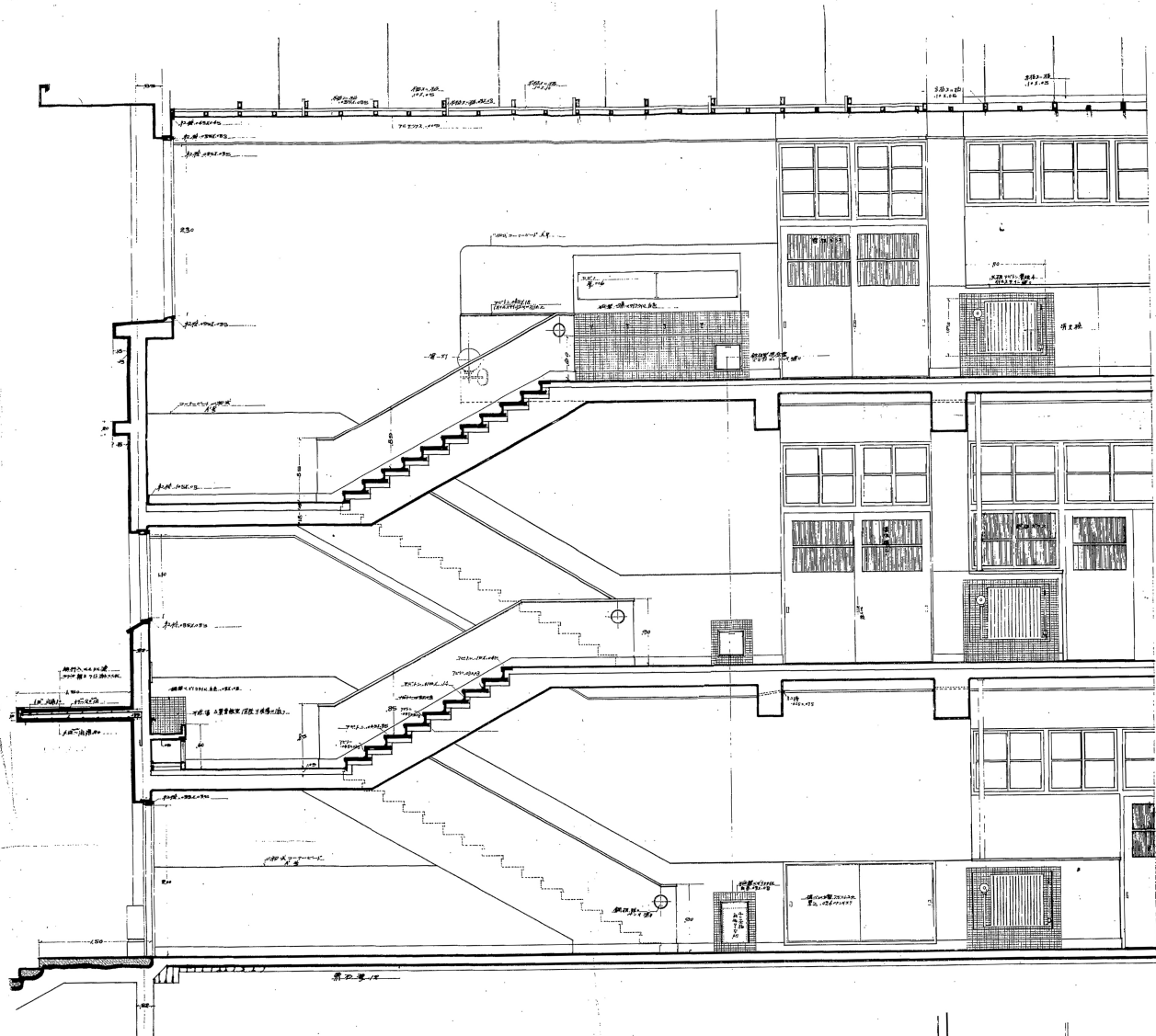


左側門階部詳細



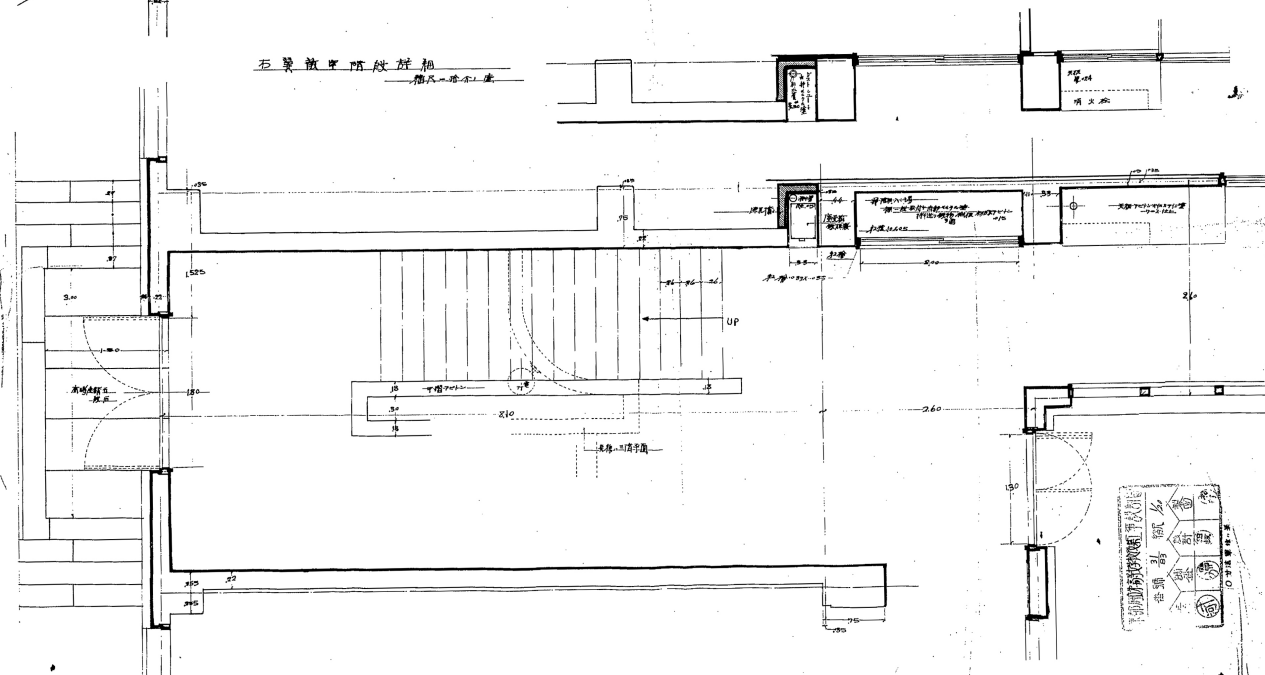


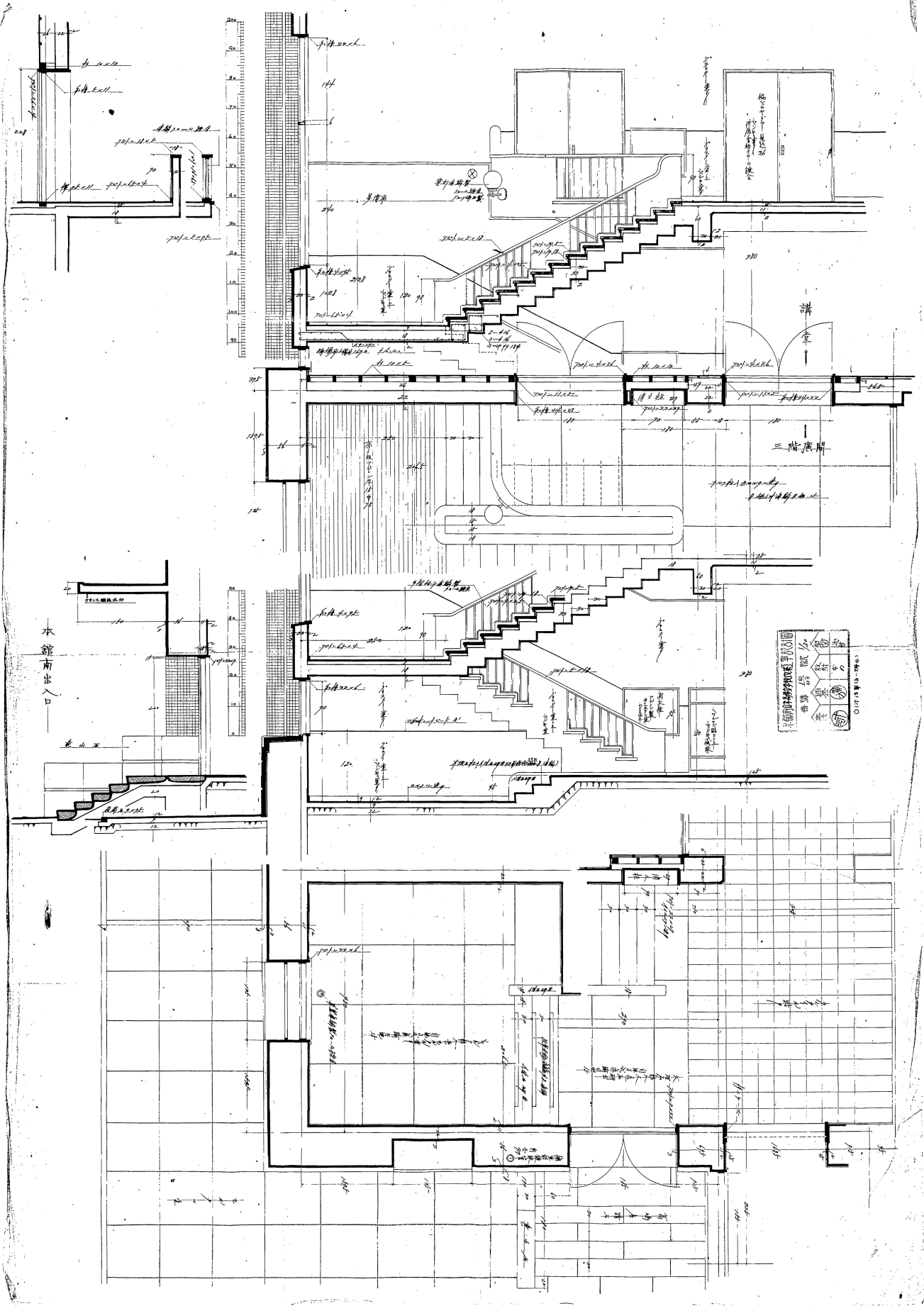


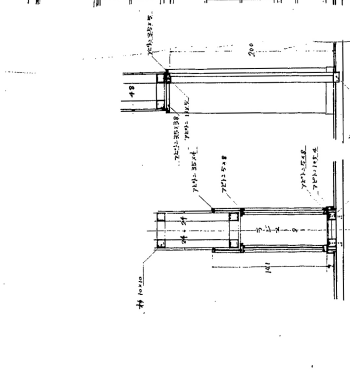
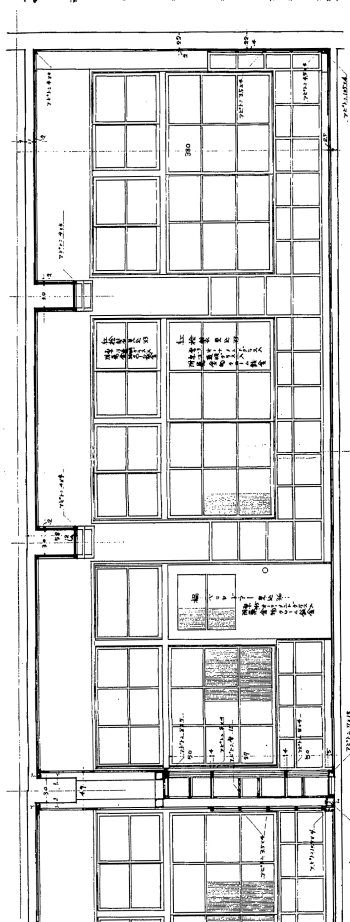
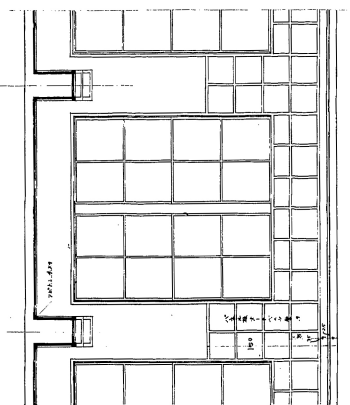
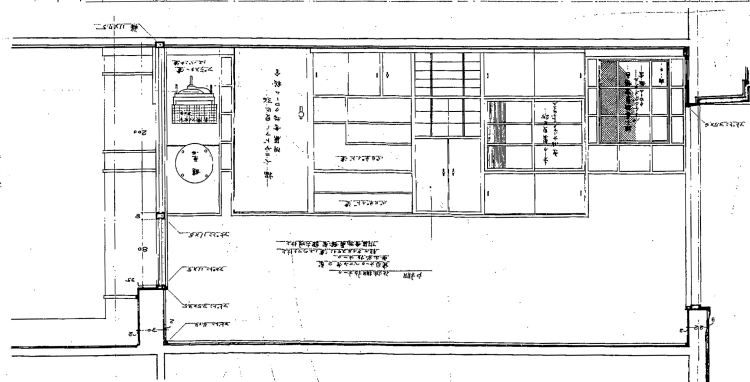
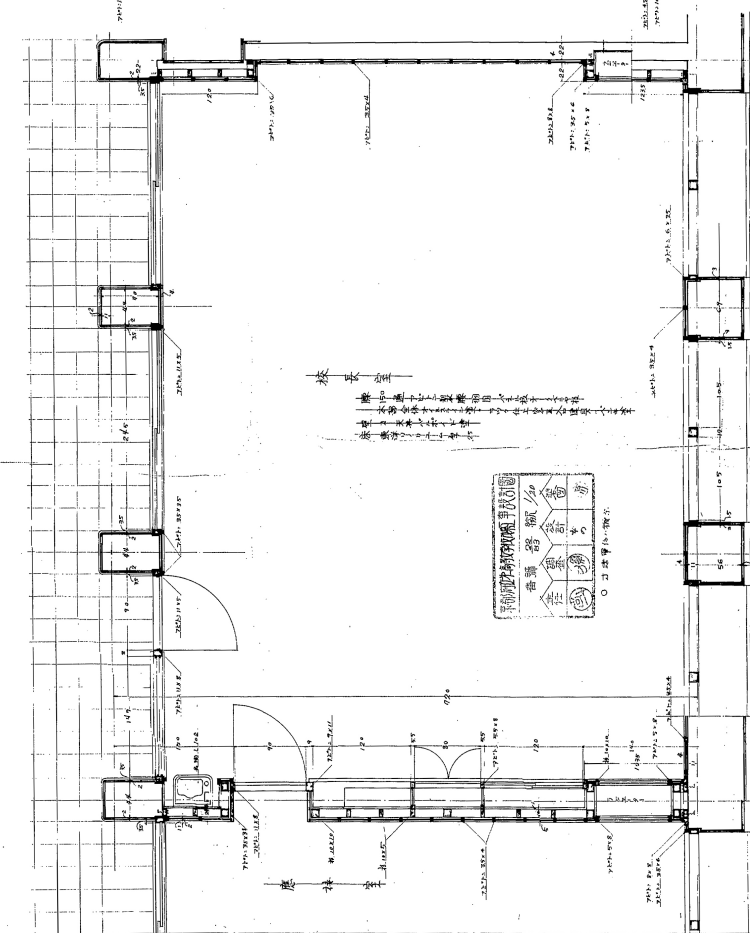
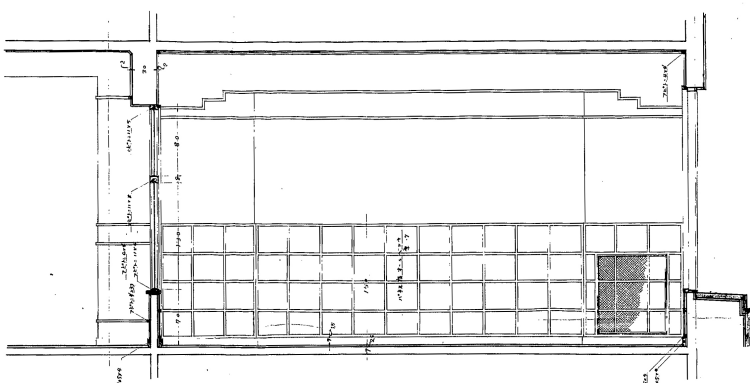


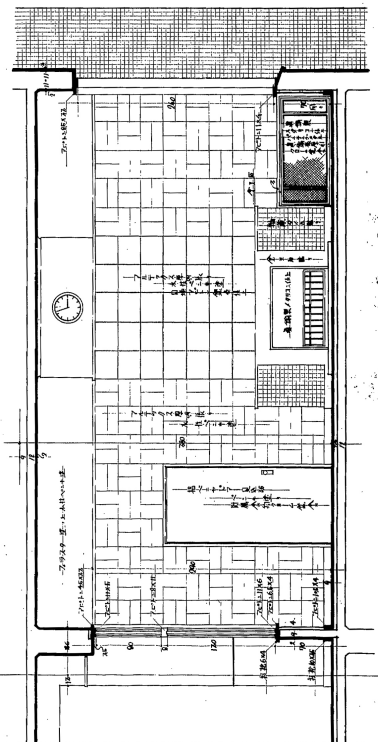
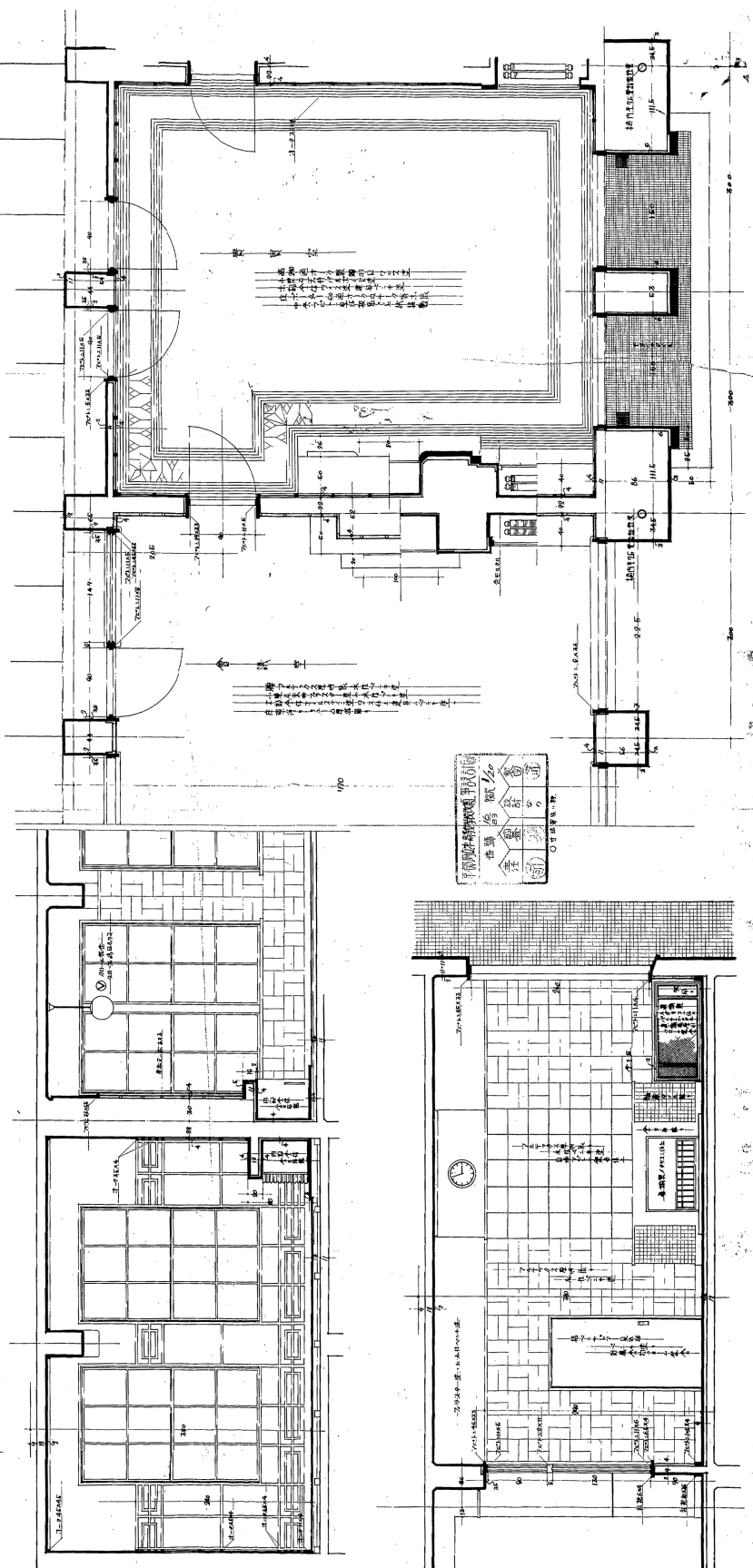
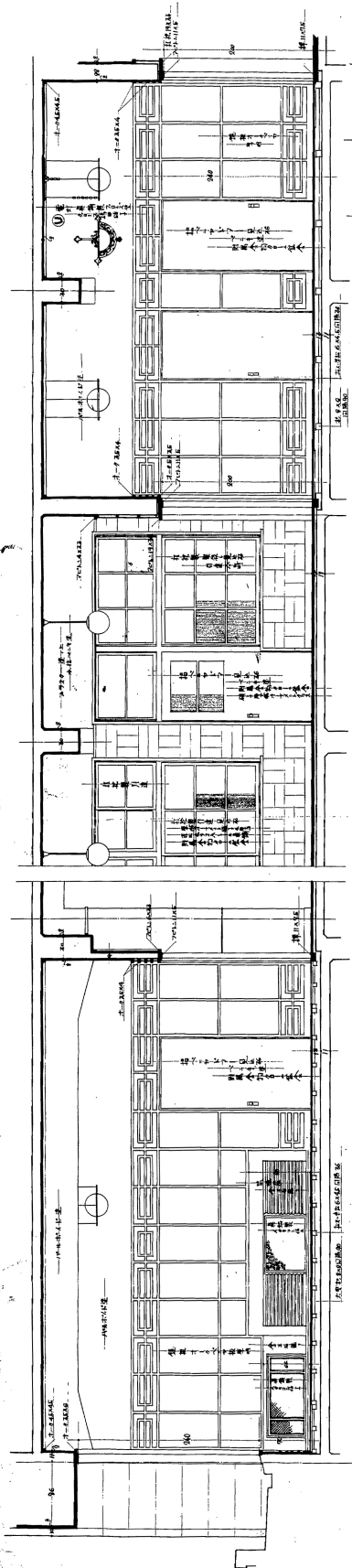
石笋散中防核炸組

總尺一層全一畫

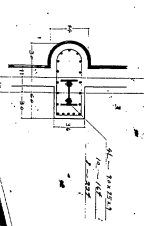








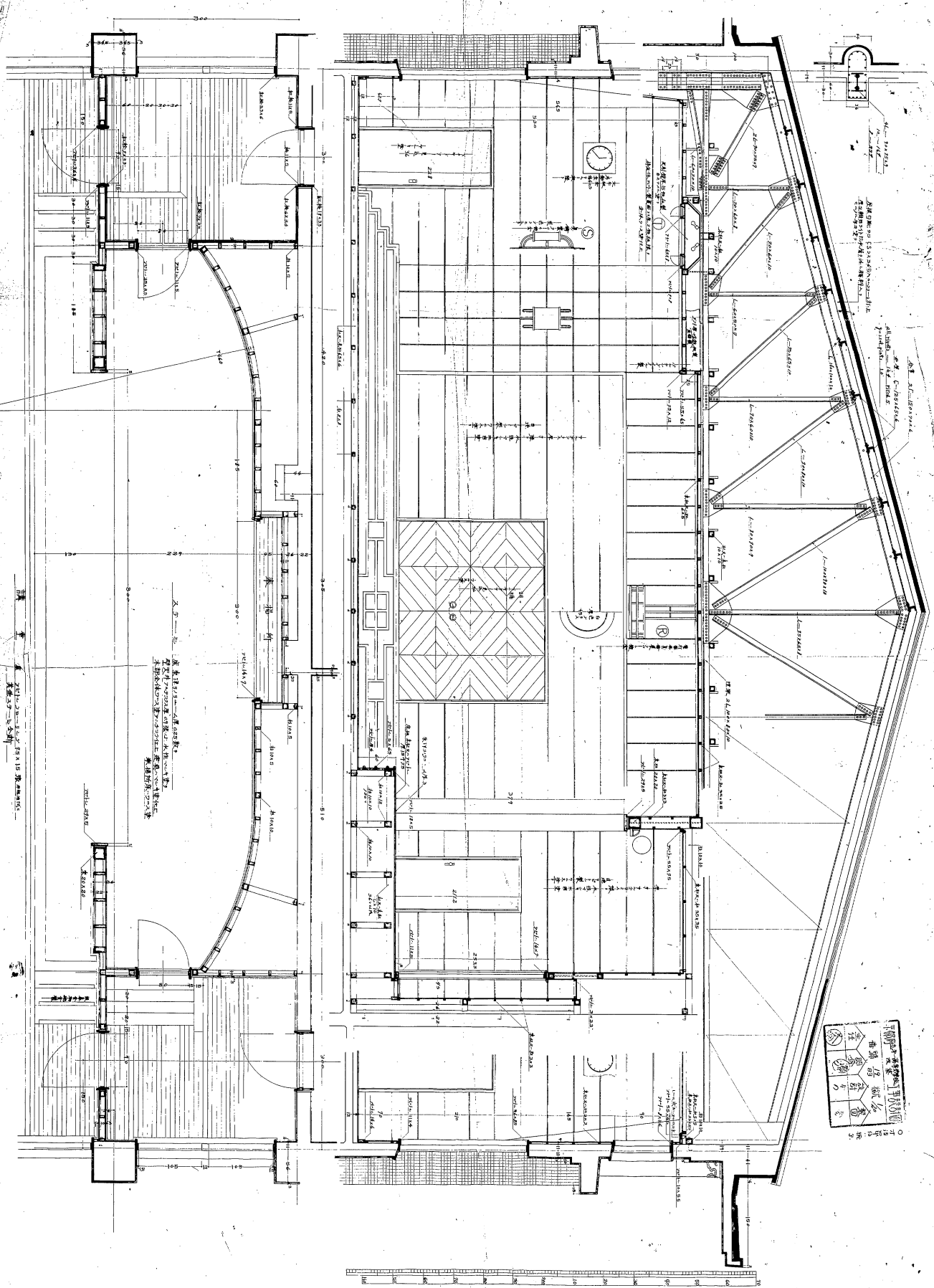




基礎部分の構造は、地盤調査の結果に基づき、  
設計者により決定される。

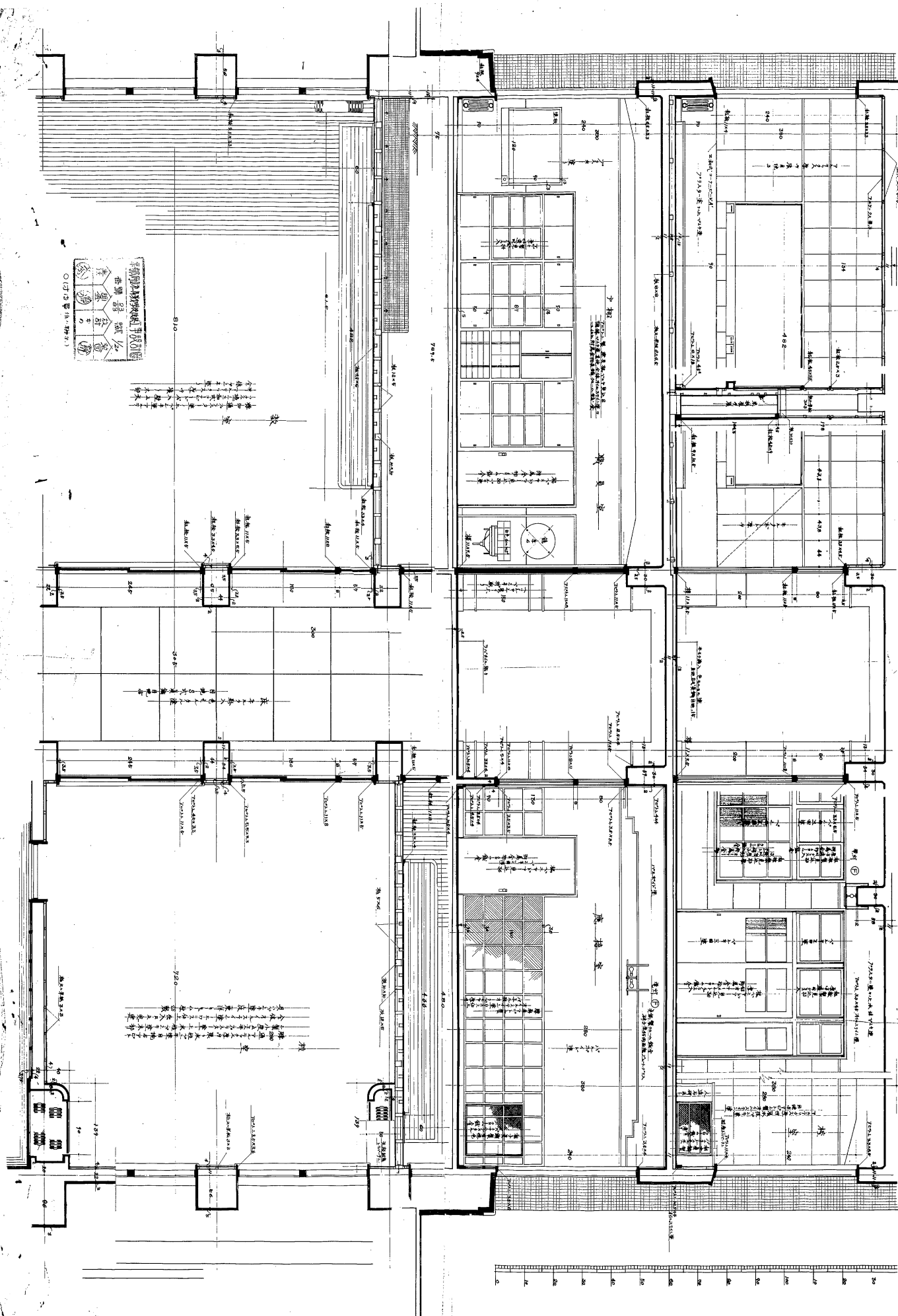


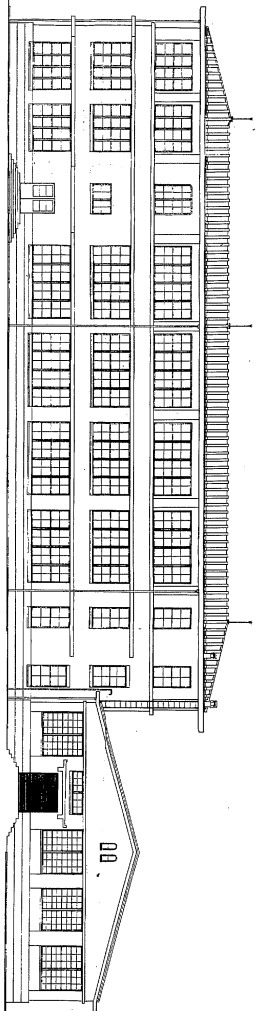
○ 丁組  
▽ 組立  
△ 組立  
◇ 組立  
□ 組立  
● 組立  
○ 組立  
▽ 組立  
△ 組立  
◇ 組立  
□ 組立  
● 組立



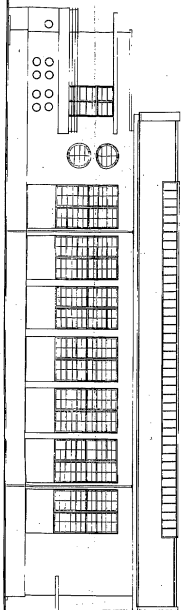
大工 〇  
屋上部分の構造は、設計者により決定される。  
基礎部分の構造は、地盤調査の結果に基づき、  
設計者により決定される。

大工 〇  
屋上部分の構造は、設計者により決定される。  
基礎部分の構造は、地盤調査の結果に基づき、  
設計者により決定される。

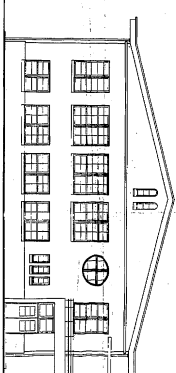




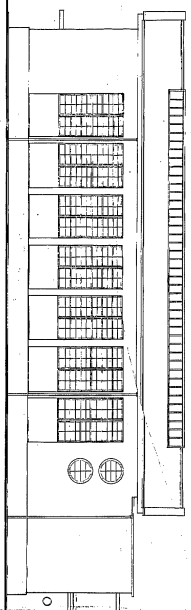
健康控制北立面圖  
縮尺 1:100



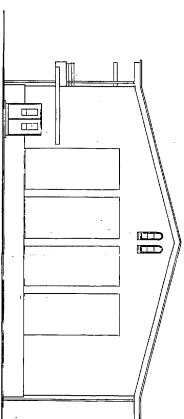
體育館北立面圖  
縮尺 1:100



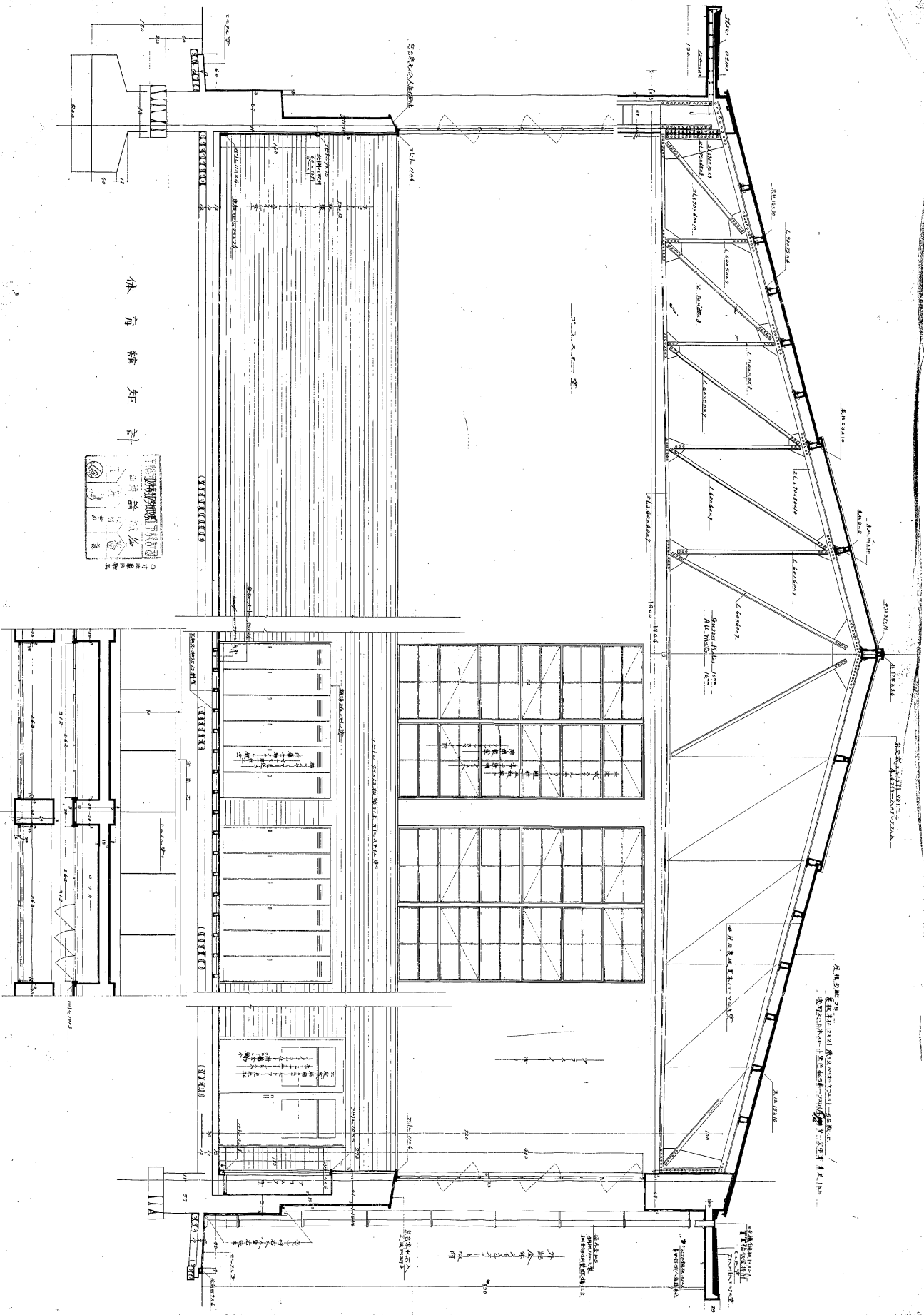
體育館西立面圖  
縮尺 1:100



飯堂北立面圖  
縮尺 1:100



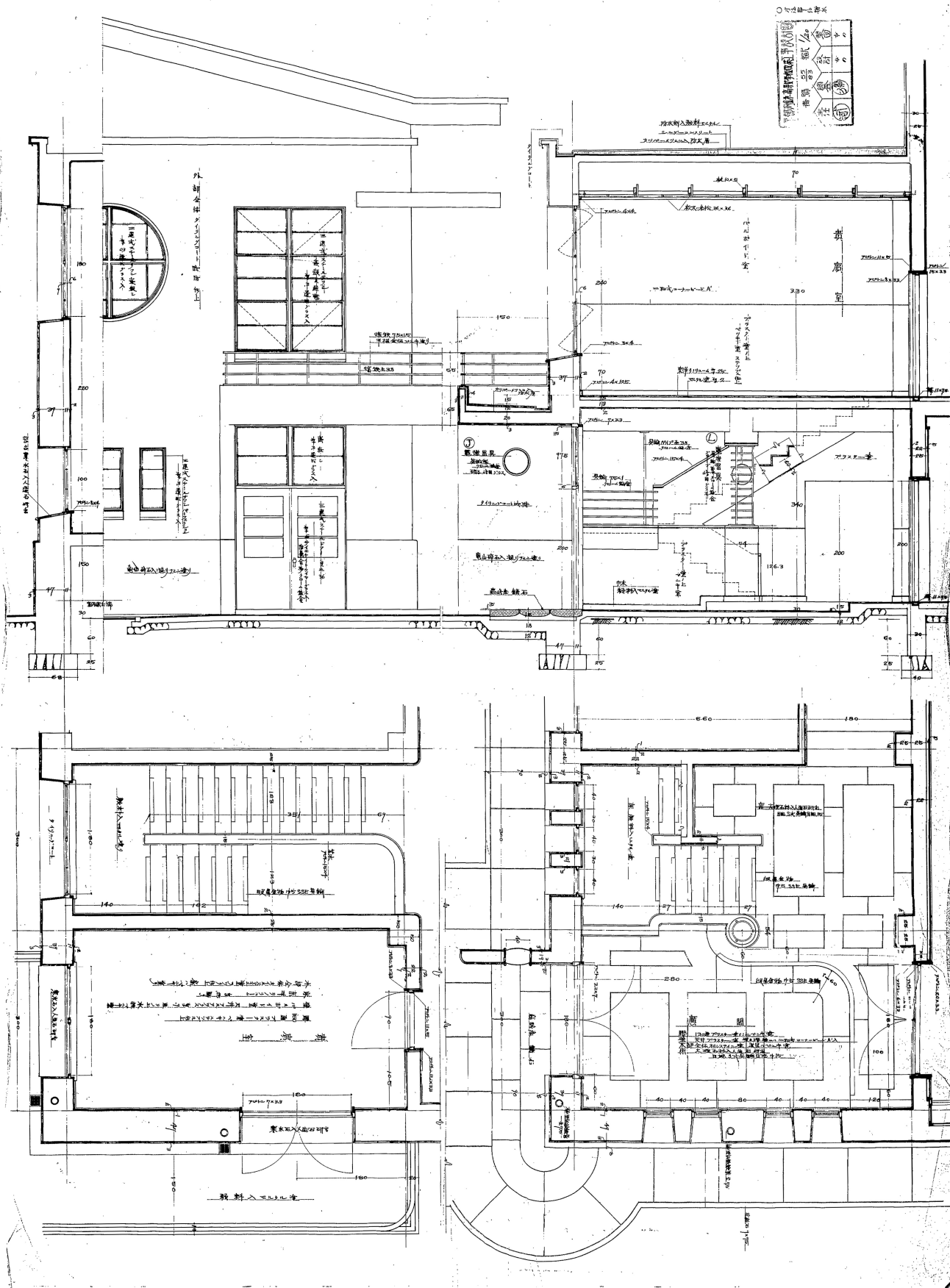
飯堂西立面圖  
縮尺 1:100



体育馆设计

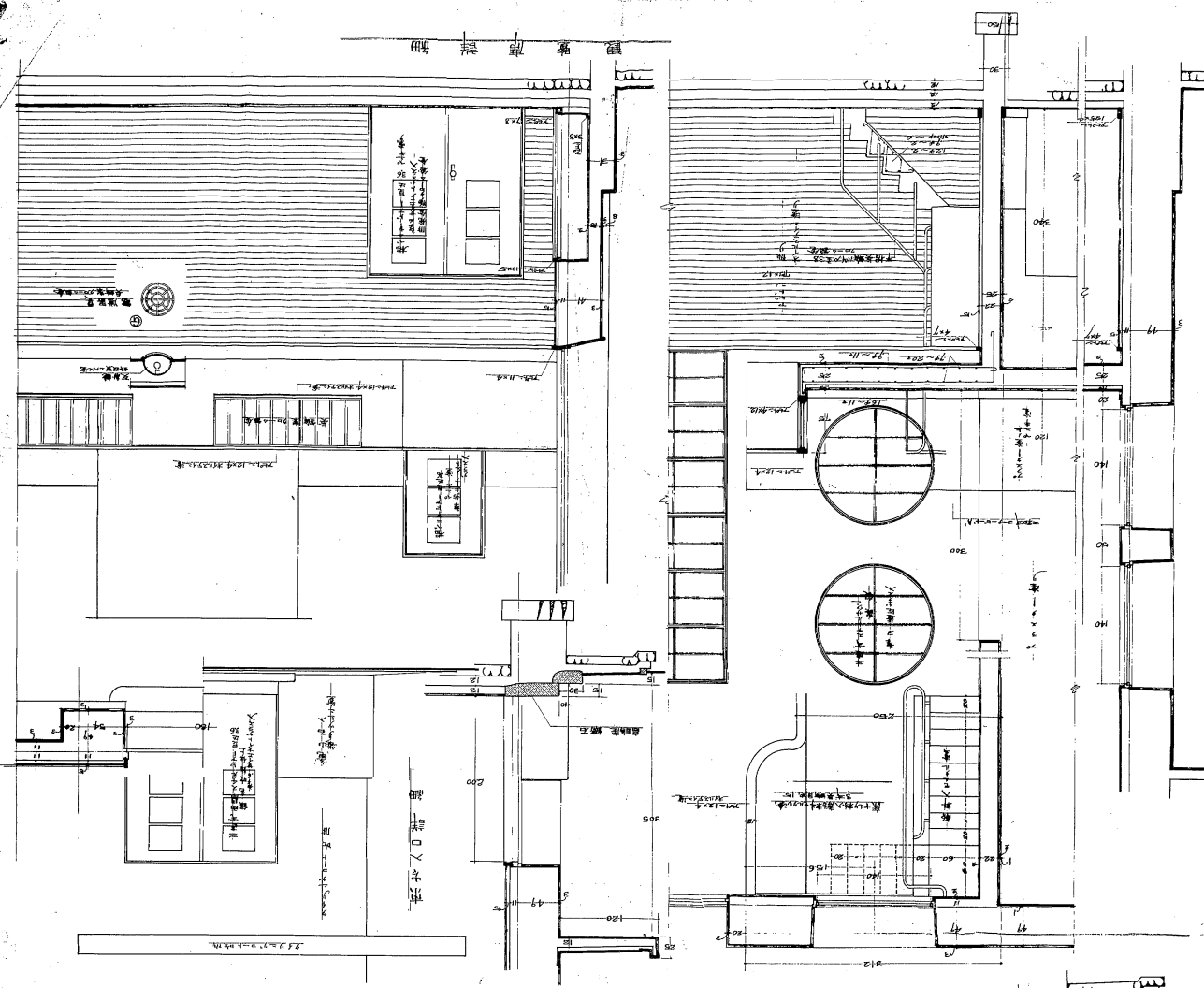


设计人：王...  
设计日期：1954年...  
设计地点：...  
设计单位：...

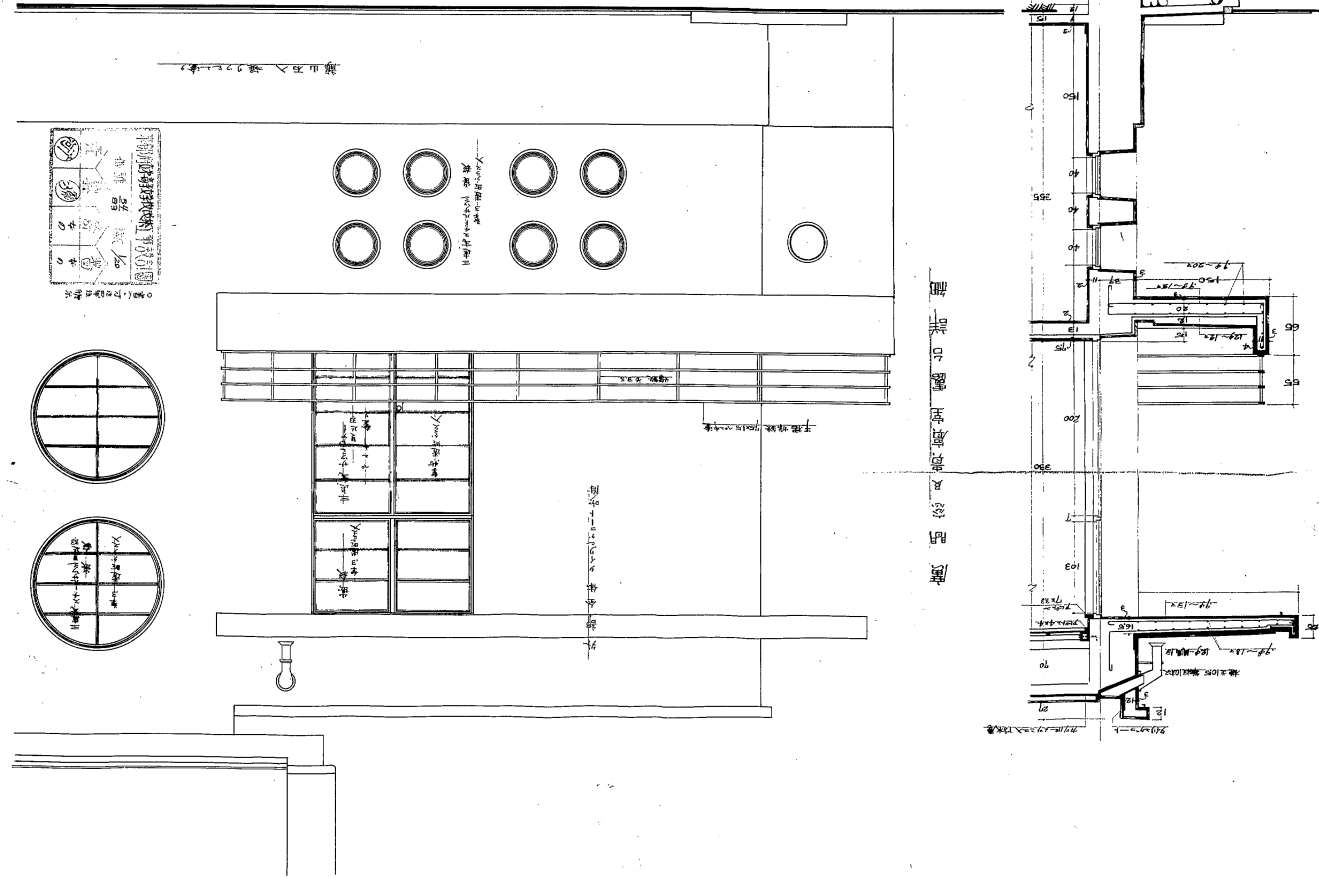


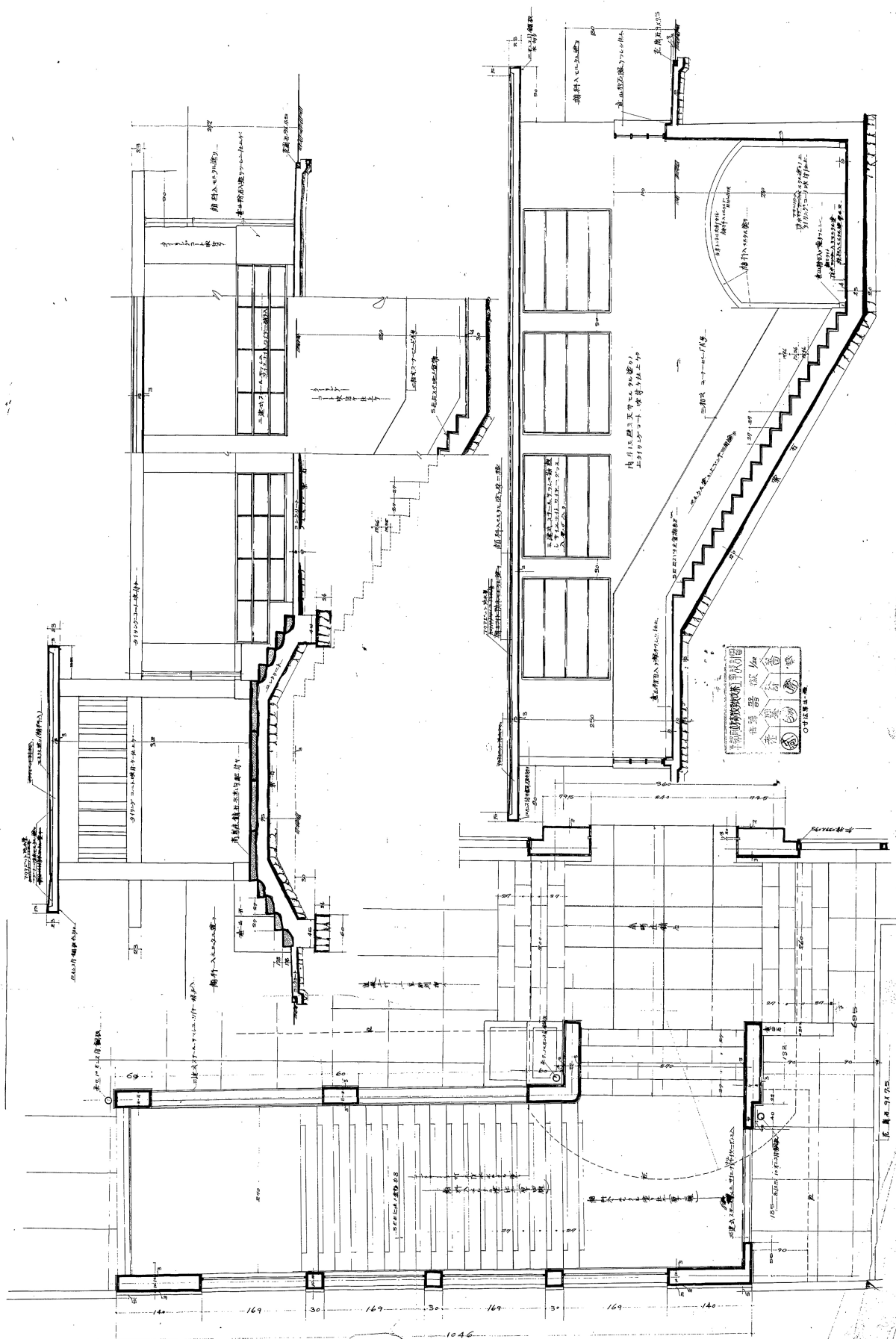


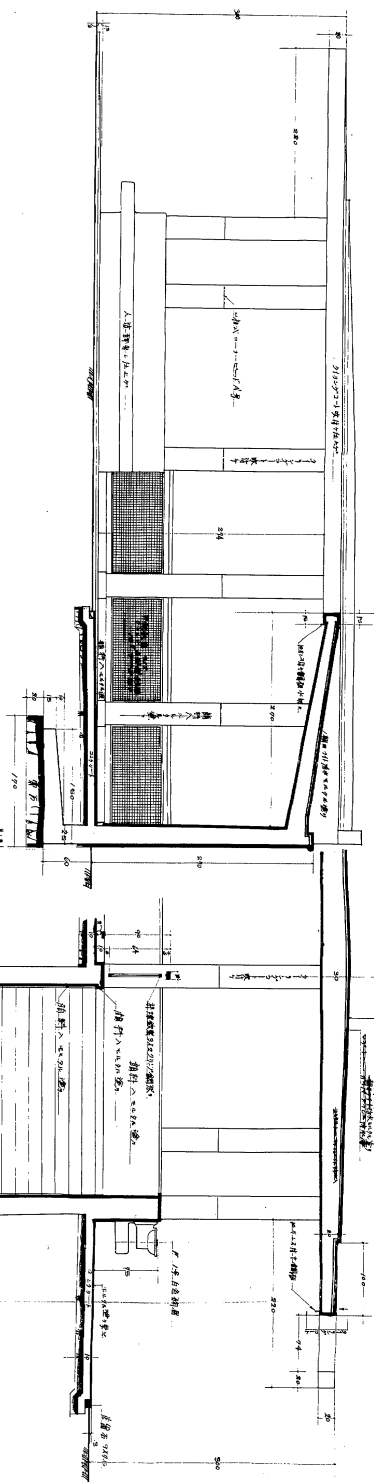
住宅設計圖



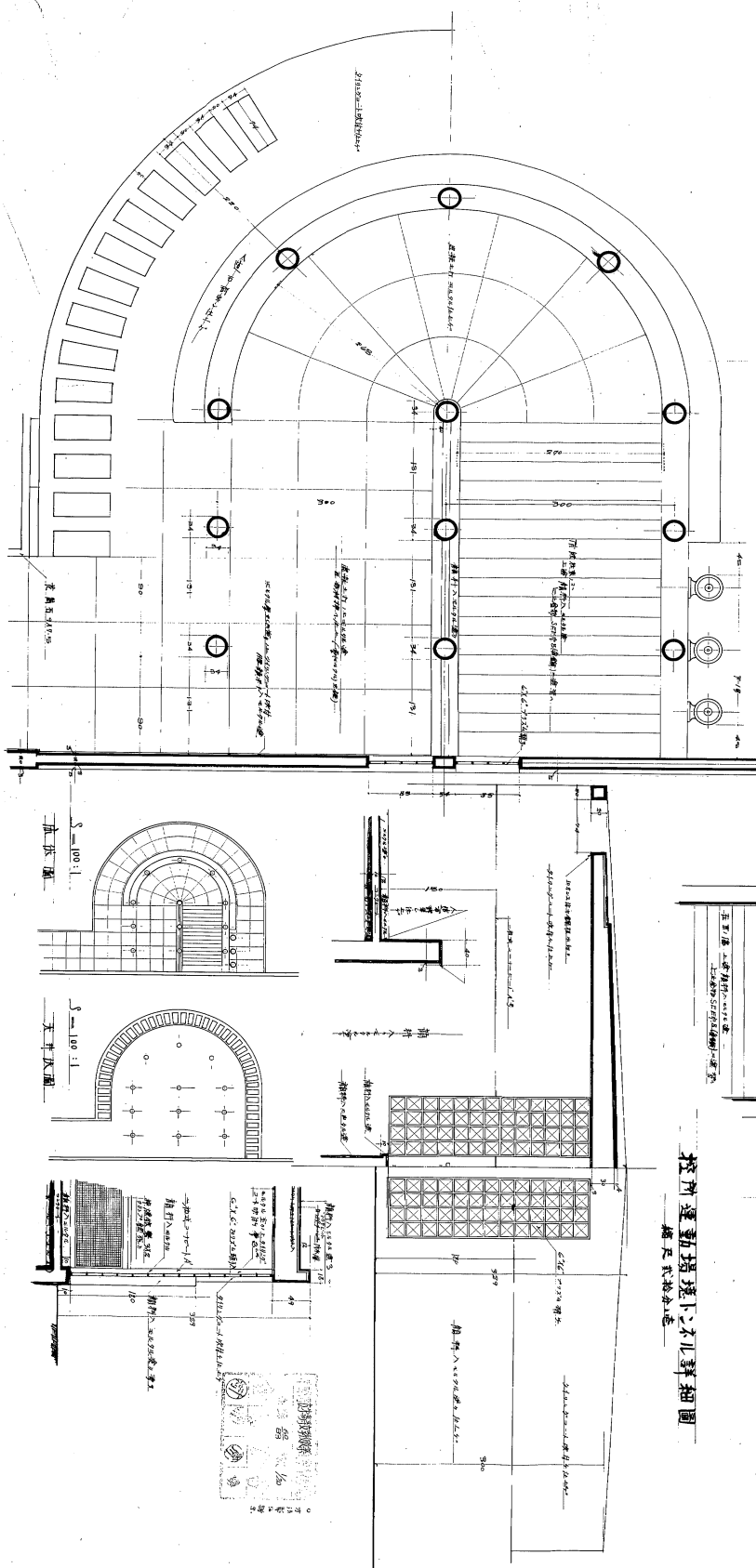
第一層平面圖

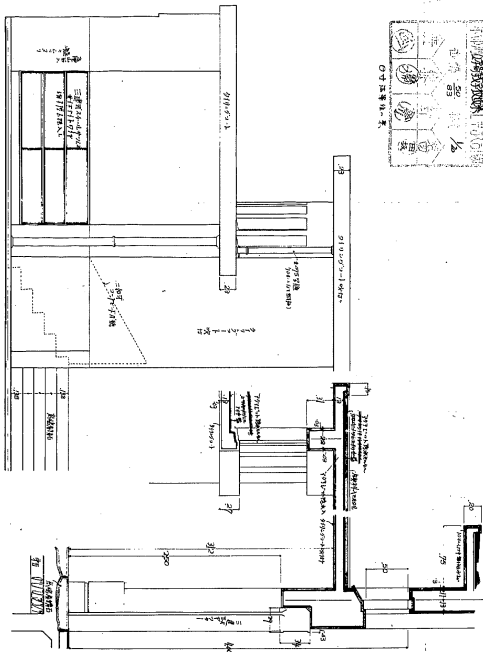
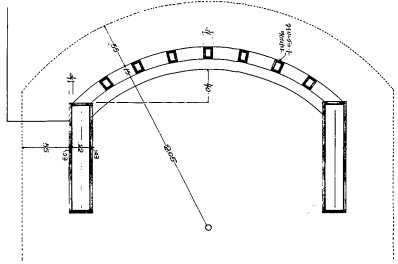




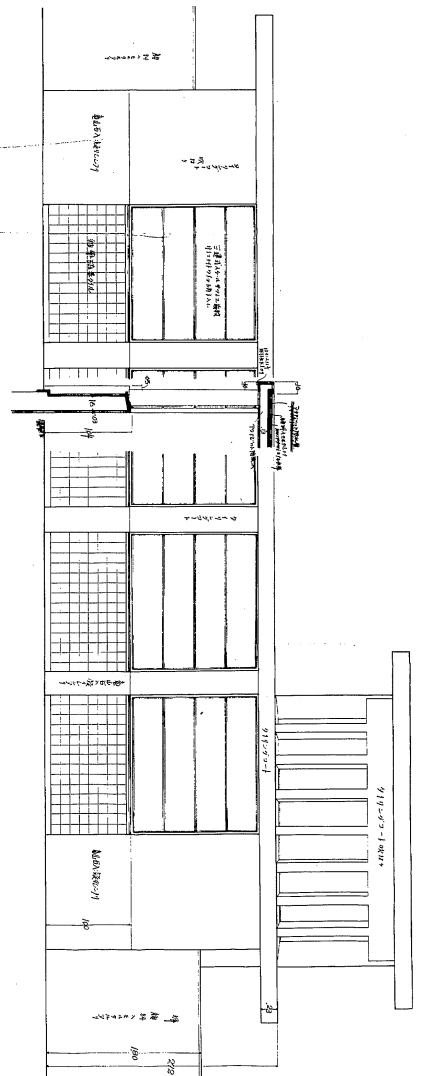


校所運動場境下のル詳細圖

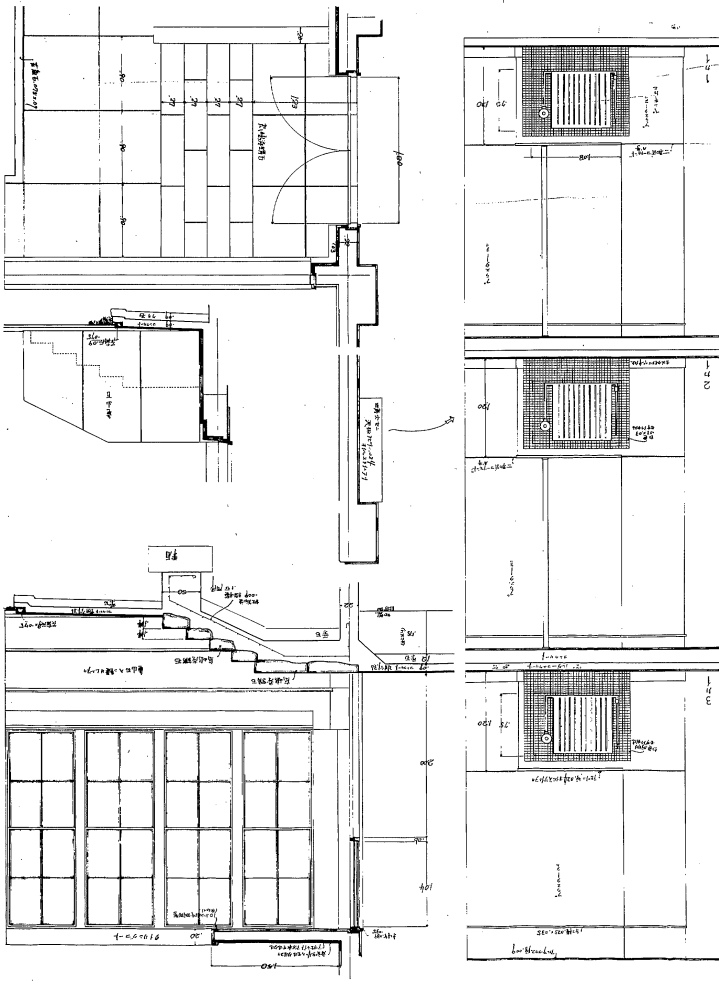


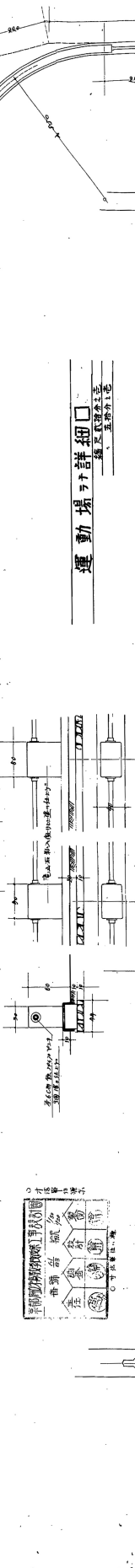
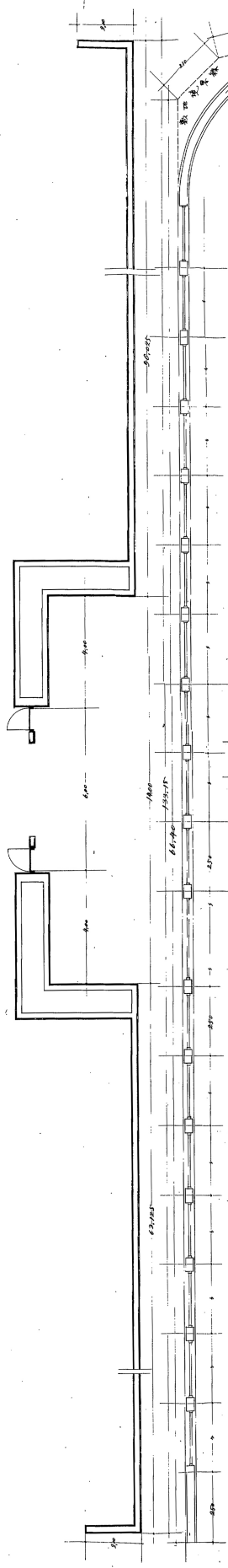
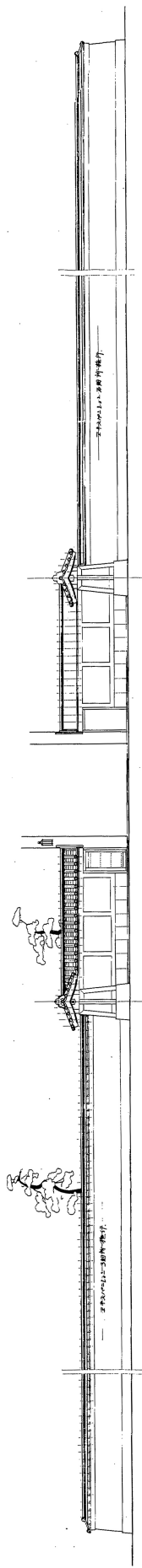


上ノル上ノ新相廻り  
相廻り

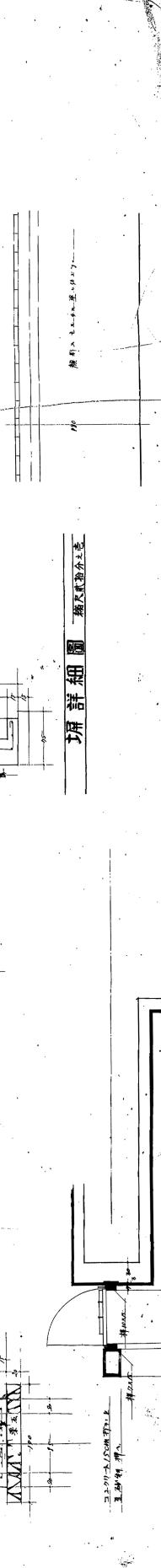
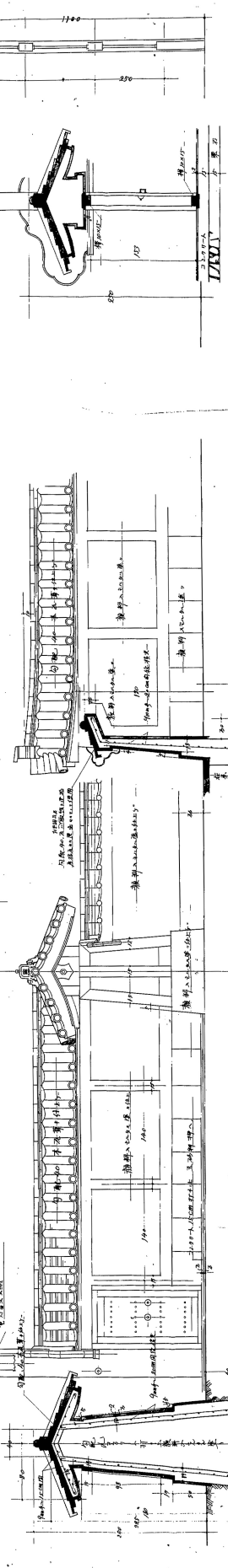


博物館(影)前水口之門世長部相  
相廻り





運動場テ詳細  
縮尺五分一



塀詳細圖  
縮尺五分一



